

山元町文化財調査報告書第 23 集

小平館跡・谷原遺跡ほか

—東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告VI—

令和 4 年 3 月

宮城県亶理郡山元町教育委員会

序 文

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から、早11年の歳月が流れました。この間、山元町内においては道路・鉄道の復旧や新市街地の整備等が着実に進み、被災地はすっかり新しい街に生まれ変わりました。しかし、未曾有の大災害の爪痕はあまりにも深く、真の復興は未だ道半ばであると認識しています。

震災ののち、当教育委員会では、復興事業の進展に伴い数多くの発掘調査を手掛けてきました。本書には、復興事業に伴い平成24年度から令和3年度にかけて実施した確認調査の結果をまとめ、併せて、小平館跡と谷原遺跡の本発掘調査の成果を収めました。地域の歴史解明の資料として広く活用されるとともに、文化財保護への一助となれば幸いです。

復興期の山元町は、通常時には想像も出来ぬほどの業務量増嵩を経験しました。本書の刊行に至るまでの長い年月には、数多くの方々から御支援を賜りました。とりわけ本書の刊行にあたっては、町が膨大な業務を抱えるなか、県教育庁文化財課の全面的な御協力のもと、執筆から編集に至るすべての工程を担っていただくという異例の厚遇を賜りました。その成果である本書が、被災地における文化財保護を巡る動向をありのままに伝える記録として震災復興史の片隅に刻まれ、長く語り継がれることを願ってやみません。

山元町の復旧・復興にあたり御尽力くださいました関係機関ならびに関係者の皆様に対して、全国から賜りました多大な御支援に対して、心より感謝申し上げます。

令和4年3月


山元町教育委員会

教育長 菊池 卓郎

8. 出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。

A：縄文土器、B：弥生土器、C：土師器、E：須恵器、K：石器

9. 本書の出土遺物のうち、土師器の調整技術については、ロクロを使用したものをロクロ調整、使用していないものを非ロクロ調整と呼称した。

10. 後世の攪乱については輪郭を破線で表し、その傾斜・段差が表示可能な場合は「」で示した。

11. 遺構配置図において、遺構の重複している部分について古い方の輪郭を破線で示した。

12. 遺構の重複関係を記述する際に、3つ以上の重複がある場合は矢印（→）を用いて「古い遺構→新しい遺構」のように表す。

13. 本書の執筆・編集は、山元町教育委員会と宮城県教育委員会の協議を経て、以下の分担で行った。
はじめに、復興事業に伴う発掘調査の経緯と概要、館の内遺跡・合戦原B遺跡、東部地区ほ場整備事業・防災公園事業・農産物出荷貯蔵施設整備事業関連確認調査の概要：佐藤憲幸（宮城県教育庁文化財課）

小平館跡・谷原遺跡：熊谷亮介（宮城県教育庁文化財課）

14. 発掘調査の記録や出土遺物は、山元町教育委員会が保管している。

目次

序文

例言

目次

はじめに	1
復興事業に伴う発掘調査の経緯と概要	2
小平館跡	13
1 調査に至る経過	
2 遺跡の概要と地理的環境	
3 調査の方法	
(1) 現地調査 (2) 室内整理	
4 基本層序	
5 発見された遺構と遺物	
(1) 竪穴建物跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 土坑 (4) 溝跡 (5) 柱穴・ピット	
6 総括	
(1) 遺物の特徴と年代 (2) 遺構の特徴と年代 (3) まとめ	
谷原遺跡	93
1 調査に至る経過	
2 遺跡の概要と地理的環境	
3 調査の方法	
(1) 現地調査 (2) 室内整理	
4 基本層序	
5 発見された遺構と遺物	
(1) 竪穴建物跡 (2) 掘立柱建物跡・柱穴列 (3) 土坑 (4) 溝跡 (5) 柱穴・ピット	
6 総括	
(1) 遺物の特徴と年代 (2) 遺構の特徴と年代 (3) まとめ	
館の内遺跡・合戦原B遺跡	151
東部地区ほ場整備事業・防災公園整備事業・農産物出荷貯蔵施設整備事業関連確認調査	163
引用・参考文献	170
報告書抄録	171

図版目次

【はじめに】

第1図 遺跡の位置 ……………5

【小平館跡】

第1図 小平館跡の位置……………15
第2図 発掘区の位置……………17
第3図 基本層序模式図……………19
第4図 発掘区全体図……………20
第5図 遺構配置図(1)……………21
第6図 遺構配置図(2)……………22
第7図 遺構配置図(3)……………23
第8図 遺構配置図(4)……………24
第9図 SI1 竪穴建物跡……………27
第10図 SI1 竪穴建物跡出土遺物 ……27
第11図 SB4 掘立柱建物跡……………28
第12図 SB5～7 掘立柱建物跡……………30
第13図 SB8～10 掘立柱建物跡……………32
第14図 SB11～12 掘立柱建物跡……………33
第15図 SK13～17 土坑……………34
第16図 SK18～21 土坑……………36
第17図 SK22～32 土坑……………38
第18図 SK33～39 土坑……………40
第19図 SK40～44 土坑、
土坑出土遺物……………43
第20図 SK45～50 土坑……………45
第21図 SK51～57 土坑……………47
第22図 SK58～61 土坑……………49
第23図 SK62～64 土坑……………50
第24図 SD3・4・9・14 溝跡、
SK41 土坑……………53
第25図 SD2・5～17 溝跡(1)……………55
第26図 SD2・5～17 溝跡(2)……………56
第27図 SD2～17 溝跡、
SK28 土坑 断面……………57

第28図 SD2～3 溝跡出土遺物……………59
第29図 SD4・6・9 溝跡出土遺物……………60
第30図 SD11・17 溝跡出土遺物……………62
第31図 柱穴・ビット・
遺構外出土遺物……………63
第32図 柱穴・ビット断面図(1)……………69
第33図 柱穴・ビット断面図(2)……………70
第34図 柱穴・ビット断面図(3)……………71
第35図 柱穴・ビット断面図(4)……………72
第36図 柱穴・ビット断面図(5)……………73
第37図 柱穴・ビット断面図(6)……………74
第38図 小平館跡 出土土師器集成……………76
第39図 掘立柱建物跡の配置……………77
第40図 各遺構の年代……………79
写真図版1～9……………83～91

【谷原遺跡】

第1図 谷原遺跡の位置……………95
第2図 発掘区の位置……………97
第3図 2次調査区の基本層序……………101
第4図 4～6次調査区の本層序……………101
第5図 遺構配置図(1)……………102
第6図 遺構配置図(2)……………103
第7図 遺構配置図(3)……………104
第8図 遺構配置図(4)……………105
第9図 遺構配置図(5)……………106
第10図 SI6 竪穴建物跡出土遺物……………106
第11図 SB 掘立柱建物跡、
SA37 柱穴列配置図……………107
第12図 SB214～216 掘立柱建物跡……………109
第13図 SB217～220 掘立柱建物跡……………111
第14図 SB219 掘立柱建物跡……………112
第15図 SB221～222 掘立柱建物跡……………113
第16図 SB 掘立柱建物跡出土遺物……………114
第17図 SA35・36 柱穴列……………115

第 18 図	SA37 柱穴列	116
第 19 図	SK234 ~ 237 土坑	117
第 20 図	SK238 ~ 242 土坑	118
第 21 図	SD1・2 溝跡	121
第 22 図	SD16 溝跡	122
第 23 図	SD1・2・16 溝跡断面	124
第 24 図	SD16 溝跡出土遺物	125
第 25 図	SD2a・2b 溝跡出土遺物 (1)	126
第 26 図	SD2a・2b 溝跡出土遺物 (2)	127
第 27 図	柱穴・ビット出土遺物	129
第 28 図	柱穴・ビット断面図	130
第 29 図	谷原遺跡 4 ~ 6 次調査出土 土師器・須恵器集成	133
第 30 図	掘立柱建物跡の変遷	136
第 31 図	谷原遺跡 古代の遺構分布	138
写真図版 1 ~ 9		142 ~ 150

【館の内遺跡】

第 1 図	遺構配置図	153
写真図版		154

【合戦原 B 遺跡】

第 1 図	SK1 平・断面図	156
第 2 図	SK1 出土遺物	156
第 3 図	遺構配置図	156
写真図版		157

【附編 合戦原 B 遺跡における放射性炭素年代】

第 1 図	暦年較正年代グラフ (参考)	160
-------	----------------	-----

【中道遺跡】

図版	中道遺跡出土遺物	161
図版	中道遺跡出土遺物写真	162

【確認調査】

第 1 図	地形分類と遺跡の位置	164
-------	------------	-----

表目次

【復興事業に伴う発掘調査】

第 1 表	調査実施一覧表 (公共事業)	3
第 2 表	山元町遺跡一覧	6
第 3 表	調査実施一覧表 (個人・零細企業)	11

【小平館跡】

第 1 表	小平館跡の調査で使用した遺構 の番号	18
第 2 表	小平館跡 2 次 ~ 5 次調査出土 遺物計数表	25
第 3 表	柱穴・ビット属性表	65 ~ 68

【谷原遺跡】

第 1 表	谷原遺跡の調査で使用した遺構 の番号	96
第 2 表	谷原遺跡 4 次 ~ 6 次調査出土 遺物計数表	98
第 3 表	柱穴・ビット属性表	128 ~ 129

【附編 合戦原 B 遺跡における放射性炭素年代】

第 1 表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	160
第 2 表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	160

はじめに

1 復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について

東日本大震災の復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の両立を図るため、文化庁は埋蔵文化財発掘調査の取り組みにおける基本方針、すなわち、発掘調査の弾力化、調査体制の強化、調査費用の確保等の骨子を示し、宮城県及び関係市町村は、この方針に沿って震災復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について、早急に対応することとなった。

本格化する復興調査に迅速かつ的確に対処するため、文化庁、被災3県1市（宮城県・岩手県・福島県・仙台市）および復興庁各県復興局、震災復興関係部局は、「東日本大震災に伴う埋蔵文化財保護に関する会議」（文化庁主催：平成26年度までに計19回）において協議を重ね、復興調査に係る情報共有を図るとともに重要な課題等を整理・検討した。また、宮城県内においても、宮城県教育委員会によって各市町村教育委員会の埋蔵文化財担当等を対象とした連絡調整会議が開催され、被災市町村との連携強化が図られた。

その結果、山元町における各種震災復興事業関連の発掘調査のうち、復興道路建設（常磐自動車道等）や鉄道移設（JR常磐線）等の大規模事業に伴う発掘調査は県が主体となって実施することとし、町の復興整備計画に基づく防災集団移転促進事業等については、試掘調査を県、確認・本発掘調査を町が主体となって行うこととなり、県教育委員会からは適宜、専門職員の派遣などの支援・協力を受けた。また、個人住宅や企業移転等に伴う調査は、町が主体となって実施した。

2 復興交付金事業について

復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、国の復興交付金事業の基幹事業に位置づけられ、復興調査費用は国の復興交付金で措置されることになった。

山元町では、確認調査と本発掘調査にかかる費用の交付を受け、復興調査に対応することとし、第1回目の申請で22,500千円（交付決定平成24年3月）、第7回目の申請で20,141千円、計42,641千円の交付を受けた。

本書は、この復興交付金をもって、復興事業計画に先立ち、山元町教育委員会が平成24～令和3年度に実施した確認調査及び本調査の結果を取りまとめたものである。調査は山元町委員会が主体となり、生涯学習課が担当して実施した。また、これらの調査及び報告書作成は、全国地方自治体からの自治法派遣による職員や県文化財保護課の支援・協力のもとに行われたものである。

3 調査方針と記録の方法

復興事業に係る発掘調査については、宮城県教育委員会が「東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて（通知）」（平成23年6月3日付け文第268号）において、「本発掘調査の実施は、工事による掘削が遺構を破壊する範囲までとし、建物の基礎などによる破壊が遺構に及ばない下

〔自治法派遣による支援体制〕

派遣年度	氏名	派遣元	期間
平成25年度	森 秀之	北海道東海市	H25.4.1～H26.3.31
	草場 晋一	福岡県筑紫野市	H26.12.1～12.31
	小籠野 亮	福岡県筑紫野市	H26.1.1～2.28
	日下 和寿	宮城県白石市	H25.12.1～H26.3.31
平成26年度	小南 晋一	福岡県北九州市	H27.1.1～2.28
	中村 晋平	福岡県春日市	H27.3.1～3.31

派遣年度	氏名	派遣元	期間
平成27年度	木下 晋一	香川県	H27.4.1～H28.3.31
	城門 義廣	福岡県	H27.4.1～H28.3.31、 H28.4.1～9.30
	熊代 昌之	福岡県久留米市	H27.6.1～7.31
	川口 陽子	福岡県筑紫野市	H27.8.1～10.9
平成28年度	星野 恵美	福岡県福岡市	H28.4.1～9.30
	板倉 有太	福岡県福岡市	H28.10.1～H29.3.31
平成29年度～ R3年度	藤本 正志	神奈川県	H29.4.1～R4.3.31

層については本発掘調査を要しない」という発掘調査基準の弾力的運用方針を示しており、山元町教育委員会もこれに準じた調査を実施した。

各遺跡の調査は、遺跡の内容と広がりを確認し、遺構の記録保存を目的に行った。対象地内にトレンチまたは調査区を設定し、重機または人力で遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げ、さらに人力による遺構確認作業を行った。調査区は遺構確認状況に応じて、計画地範囲内で適宜拡張した。

調査区や遺構等の平面図の実測に際しては任意の測量原点を設定し、電子平板あるいは手実測による測量作業を行った。掘り下げを行った遺構については、適宜1/20の縮尺で断面図を作成した。併せてデジタル一眼レフカメラを使用し写真撮影を行った。遺構番号は、遺構の種類に関係なく1から通し番号を付け、堅穴建物跡や掘立柱建物跡に属するピットは、その遺構内でP1から番号を付けている（例：SI102-P1）。それ以外のピットは遺構番号とは別に1から通し番号を付けている。

4 報告書作成方針

山元町教育委員会では、復興事業に伴う発掘調査報告書作成にあたっては、調査を早期に終了させるため、宮城県教育委員会が平成26年2月に定めた「復興調査に限り報告書の内容を必要最小限に止める」方針に基づいて作成することとしている。

本報告書では、年代・性格不明の遺構や盛土等により工事で削平を受けない遺構については個別図を示さず、全体の遺構配置図のみを掲載した。また、時期がわかる遺構・遺物が確認されなかったものについては原則として調査概要、または一覧表のみを掲載した。

復興事業に伴う発掘調査の経緯と概要

山元町教育委員会が実施した復興事業関連確認調査を第1・3表に示した。これらは、山元町教育委員会生涯学習課と宮城県教育委員会文化財保護課が、円滑な事業実施と埋蔵文化財保護との調整を目的として埋蔵文化財の取り扱いについて各事業者と協議を重ねた結果、遺跡外への換地等、大規模な

第1表 調査実施一覧表（公共事業）

No.	事業名	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	主な発見遺構・遺物
1	山元町東部園場整備	新浜遺跡	高瀬字新浜一 67・68-2・77・78・80・81・82・83-1・84・85・89・93・98-2・98-3・99	2015/05/11~22	2,335 m ²	[遺構・遺物] なし
2		孤須賀遺跡	高瀬字孤須賀 44-1・59・60・69・72-1・85・93・99-1、字南中須賀 159-2・161-2・162・164-1・175・177	2015/05/21~06/30	1,260 m ²	[遺構・遺物] なし
3		北中須賀遺跡	高瀬字北中須賀 81・83・99・105-1・112-1、字南中須賀 39・42-1・43	2015/06/03~08	514 m ²	[遺構・遺物] なし
4		浜遺跡	山寺字浜 147-1・149-1・151-1・151-2	2015/06/16~19	343 m ²	[遺構・遺物] なし
5		西北谷内A遺跡	高瀬字西北谷地 146-7・146-8・148	2015/06/22	114 m ²	[遺構・遺物] なし ※全体に湿地性堆積
6		西北谷内B遺跡	高瀬字西北谷地 137-1	2015/06/23	128 m ²	[遺構・遺物] なし
7		西須賀遺跡	高瀬字西須賀 71-1・72-1・73-1・75・78・80・81-1・126・127-1	2015/06/24~29	526 m ²	[遺構・遺物] なし
8		北泥沼遺跡	山寺字北泥沼 79-3・79-5	2016/02/15~16	200 m ²	[遺構・遺物] なし
9		畑合遺跡	山寺字畑合 4・5-2・11・12・55・59-1・73-1、字泥沼 33	2016/02/16~18	246 m ²	[遺構・遺物] なし ※削平により旧表土なし。
10		笠浜遺跡	高瀬字笠浜 29・30・32、字笠野 148・67・148・68・148-84	2016/02/18~22	167 m ²	[遺構・遺物] なし
11		北頭無遺跡	山下字花釜	2017/07/26~29	176 m ²	[遺構・遺物] なし
12		笠野B遺跡	高瀬字笠野	2017/09/25~10/05	98 m ²	[遺構・遺物] なし
13	防災公園整備	浜遺跡	山寺字浜 142-1	2015/06/16~19	190 m ²	[遺構・遺物] なし
14		笠野A遺跡	高瀬字笠野 70・71・73・74-1・75・75-1	2015/06/10~15	389 m ²	[遺構・遺物] なし
15	農産物出荷貯蔵施設整備	西須賀遺跡・北中須賀遺跡隣接地	高瀬字北中須賀 3	2015/12/14~17	420 m ²	[遺構・遺物] なし
16	消防無線基地局	孤塚遺跡	坂元字山作1 外	2012/07/26	14 m ²	[遺構・遺物] なし
17	南保育所放射線除染	合戦原遺跡	高瀬字合戦原 100-1	2012/10/18	20 m ²	[遺構・遺物] なし ※工事範囲は盛土・表土内におさまる。
18	避難道路町道山下花釜線改修	畑合遺跡	山寺字畑合 33 番 外	2017/10/26~30	50 m ²	[遺構・遺物] なし
19	主要地方道県道相馬互理線改良	西須賀遺跡	高瀬字西須賀 84	2016/10/3	8 m ²	[遺構・遺物] なし
20		北中須賀遺跡	高瀬字北中須賀 81	2016/10/3	72 m ²	[遺構] 溝跡（時期不明） / [遺物] なし
21		新浜遺跡	高瀬字新浜一 52	2016/10/3	20 m ²	[遺構・遺物] なし
22		頭無遺跡	山寺字頭無 178-1	2016/10/4	14 m ²	[遺構・遺物] なし
23		北頭無遺跡隣接地	山寺字北頭無 229-2	2016/10/4	27 m ²	[遺構] ビット（時期不明） / [遺物] なし
24	北泥沼遺跡	山寺字北泥沼 84 番 外	2018/10/2~10	320 m ²	[遺構] なし / [遺物] 土師器下半部 1 ※工事範囲は盛土・表土内におさまる。	
25	県道山下停車場線整備	新田遺跡	山寺字新田 13・50 外	2018/09/11~14 2021/6/10	62 m ² 4 m ²	[遺構] なし / [遺物] 土師器小片 1

計画変更は困難であると判断し、事業が遺跡に与える影響の有無や規模を把握するための確認調査が必要と判断されたものである。以下、各事業の調査に至る経緯と概要を記す。

1 山元町東部地区ほ場整備事業

山元町は、宮城県国土利用計画を基本とする第四次国土利用計画（平成25年4月22日山元町議会承認）において、津波による甚大な被害を受けた旧JR常磐線東側の沿岸部を中心とした土地の利用構想を定めた。この構想では、被災した沿岸部の集落を含む区域は建築基準法に基づく災害危険区域に指定され、集落は内陸部の3ヶ所に移転、移転元の住宅跡地は防災集団移転促進事業により町が買い取り、事業計画区域にあたる保安林（海岸から200mライン）区域の西側から旧JR常磐線までの650ヘクタールについて、換地によって大規模ほ場整備を行うこと等が盛り込まれた。

本事業は宮城県仙台地方振興事務所が主体となって実施するもので、計画立案にあたり、新浜遺跡・狐須賀遺跡・北中須賀遺跡・浜遺跡・西北谷地A遺跡・西北谷地B遺跡・西須賀遺跡・北泥沼遺跡・畑合遺跡・笠浜遺跡・北頭無遺跡・笠野B遺跡の計12遺跡（第1表）が計画地内に含まれていたことから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、宮城県仙台地方振興事務所、山元町農業基盤整備推進室と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、確認調査を行うこととした。

【協議及び発掘通知】

平成26年11月5日	宮城県仙台地方振興事務所長から協議書の提出（仙振第2993号）
平成26年11月7日	町教委から県教委へ進達（山教委発第1293号）
平成26年11月21日	県教委から確認調査実施の回答（文第2190号）
平成27年3月18日	埋蔵文化財発掘通知の提出（仙振第5133号）
平成27年3月20日	町教委から県教委へ進達（山教委発第2006号）
平成27年4月10日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第123号）

確認調査は、第1表にしめす日程で実施したが、すべての遺跡で遺構・遺物は発見されなかったことから本調査は不要と判断し、調査を終了した。各遺跡の調査担当者は下記の通りである。

〔北頭無遺跡・笠野B遺跡〕

調査担当：山元町教育委員会 田村大器

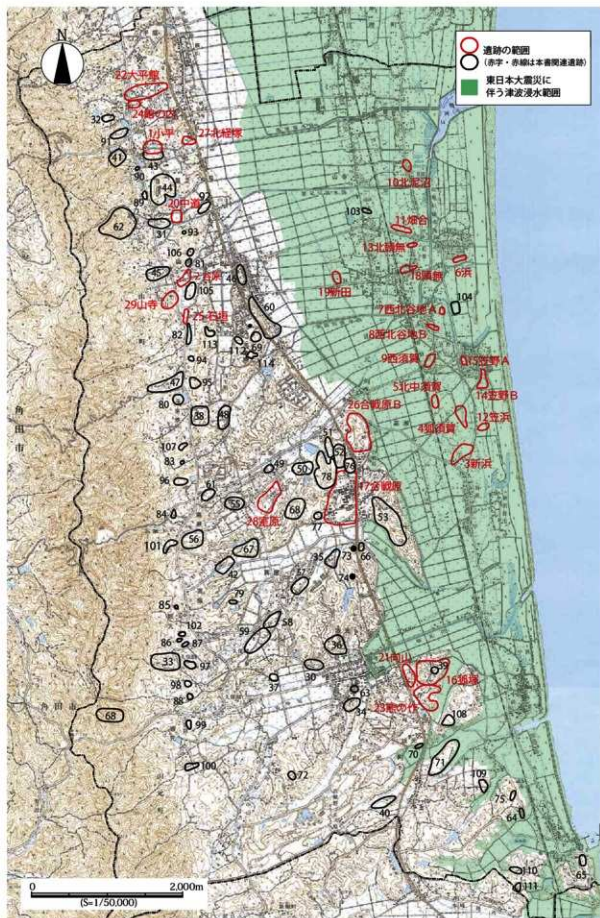
〔その他の遺跡〕

調査担当：山元町教育委員会 木下晴一（香川県派遣）

調査協力：宮城県教育委員会 伊藤智樹（千葉県派遣）・長内祐輔・佐藤則之

2 防災公園整備事業

山元町は「震災復興計画基本構想」において、「大津波に対し十分な避難時間を確保できない場合を想定した津波避難施設を整備する」ことを重点プロジェクトとして位置付けており、多重防御施設の2線となる県道相馬互理線より海側を対象に、津波襲来時に避難が遅れた者の一時避難場所として、避難築山を含む防災公園（花釜公園、笠野公園）の整備を計画した。計画立案にあたり、両公園



第1図 遺跡の位置

第2表 山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	小平遺跡	城郭・散布地	古墳前・古代・中世	57	藤遺跡	散布地	古墳
2	谷津遺跡	集落	縄文後・弥生～中世	58	湊生遺跡	散布地	古代
3	新浜遺跡	散布地	古代	59	南塚環遺跡	散布地	縄文早・前・古墳
4	狐浜賀遺跡	散布地	古代	60	山下館跡	城郭	中世
5	北中須賀遺跡	散布地	古代	61	石山原遺跡	散布地	縄文
6	浜遺跡	散布地	古代	62	賀足館跡	城郭	中世
7	西北谷地A遺跡	散布地	古代	63	榎下遺跡	散布地	弥生
8	西北谷地B遺跡	散布地	古代	64	大塚小塚十三塚	塚	近世
9	西須賀遺跡	散布地	古代	65	唐杉倉跡跡	委所	近世
10	北芝沼遺跡	散布地	古代	66	貝吹城跡	城郭	中世
11	都合遺跡	散布地	古代	67	真盛館跡	城郭	中世
12	笠浜遺跡	散布地	古代	68	新城山古館跡	城郭	中世
13	北須賀遺跡	散布地	古代	69	日向家跡	家跡	古代
14	笠野B遺跡	散布地	古代	70	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後
15	笠野A遺跡	散布地	古代	71	駒塚原遺跡	散布地	古代
16	狐塚遺跡	集落・生産	古墳中～古代	72	川内遺跡	製鉄	古代
17	合戦原遺跡	集落・横穴墓 須恵部窯・製鉄	古墳中・後・古代	73	跡舟崎塚	塚	中世・近世
18	藤兼遺跡	散布地	古代	74	北塚塚	塚	中世・近世
19	新田遺跡	散布地	古墳後・古代	75	東作跡塚	跡塚	中世
20	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後	76	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
21	向山遺跡	集落・生産	古墳・古代	77	北名生家B家跡	家跡	古代
22	大平館跡	集落・城郭	平安・中世	78	大久保B遺跡	散布地	古代
23	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代	79	北塚環遺跡	製鉄	古代
24	榎の内遺跡	集落	古代	80	山王遺跡	製鉄	古代?
25	石塚遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世	81	日向遺跡	集落	古墳後～中世
26	合戦原B遺跡	製鉄	古代	82	的場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
27	北経塚遺跡	集落・古墳・結塚	縄文前・古墳前・中世	83	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
28	笠原遺跡	散布地	古代	84	北山神遺跡	散布地	縄文
29	山寺館跡	城郭	中世	85	新田B遺跡	散布地	古代
30	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後	86	新倉B遺跡	散布地	縄文
31	中島貝塚	貝塚	縄文～中世	87	新倉C遺跡	散布地	古代
32	味野野横穴墓群	横穴墓	古墳後	88	南塚環遺跡	散布地	縄文
33	新倉遺跡	散布地	縄文後・前	89	北遺跡	散布地	古代
34	新宮城跡	城郭	中世・近世	90	北ノ入遺跡	散布地	古代
35	上台遺跡	散布地	弥生・平安	91	味野野遺跡	散布地	古代
36	栗岩山館跡	城郭	中世	92	中筋遺跡	水田・勾合堀 堀城?	縄文後・弥生中 古墳前
37	日向遺跡	散布地	古墳中・後	93	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
38	湊生遺跡	散布地	縄文中・後・中世	94	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
39	狐塚古墳群	古墳	古墳後	95	内平遺跡	製鉄・生産	平安
40	一の沢遺跡	散布地	弥生	96	西山山原遺跡	集落	縄文前・中・平安
41	清水遺跡	散布地	弥生	97	新倉D遺跡	製鉄	古代
42	北芝野遺跡	散布地	古墳	98	南塚環B遺跡	散布地	古代
43	榎塚六墓群	横穴墓	古墳後	99	上小山遺跡	散布地	古代・中世
44	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後	100	法羅遺跡	散布地	縄文
45	石堂遺跡	散布地	古代	101	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代
46	作田山館跡	城郭	中世	102	新倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
47	入山遺跡	散布地	縄文・古代	103	黒沼遺跡	散布地	古代
48	下大沢遺跡	散布地	縄文前	104	花笠遺跡	散布地	古代
49	宮後遺跡	散布地	古代	105	溝沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
50	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	106	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
51	榎下遺跡	須恵部窯	古代	107	上宮前北遺跡	集落	古代
52	中島館跡	城郭	中世	108	大塚遺跡	製鉄	古代
53	戸花山遺跡	古墳・須恵部窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代	109	新中水窪遺跡	集落・須恵部窯 製鉄	古代
54	北名生家跡	須恵部窯	古代	110	雲神遺跡	集落・生産	古代
55	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後	111	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
56	南山神遺跡	散布地	縄文早・前	112	作田山遺跡	製鉄	古代
				113	内平B遺跡	製鉄・須恵部窯	古代
				114	作田山B遺跡	生産	古代

網掛け部は本書関連遺跡

が、それぞれ派遣跡（花釜公園）、笠野 A 遺跡（笠野公園）の範囲に含まれることから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、事業主体である山元町事業調整計画室と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、確認調査を行うこととした。

【協議書及び発掘通知】

平成 26 年 12 月 5 日	山元町長（事業調整計画室）から協議書の提出（山元発第 4675 号）
平成 26 年 12 月 5 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1428 号）
平成 26 年 12 月 19 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 2448 号）
平成 27 年 6 月 26 日	埋蔵文化財発掘通知の提出（山元発第 1998 号）
平成 27 年 6 月 26 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 517 号）
平成 27 年 7 月 8 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 1003 号）

確認調査は第 1 表にしめす日程で実施し、両遺跡において遺構・遺物は発見されなかったことから本調査は不要と判断し、調査を終了した。調査担当者は下記の通りである。

調査担当：山元町教育委員会 木下晴一（香川県派遣）

調査協力：宮城県教育委員会 伊藤智樹（千葉県派遣）・長内祐輔・佐藤則之

3 農産物出荷貯蔵施設整備事業

山元町は被災地域の農業復興を支援するために、農産物出荷貯蔵施設の建設を計画した。工事は約 20,000 m²の事業計画区域全面に 0.5 m の盛土造成を行った後、荷貯蔵施設（建物面積は約 4,400 m²）及び格納庫（建物面積約 1,600 m²）を建設するものである。計画立案にあたり、計画地が西須賀遺跡および北中須賀遺跡に隣接することから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、事業主体である山元町産業振興課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、確認調査を行うこととした。

【協議及び発掘通知】

平成 27 年 11 月 19 日	山元町長（産業振興課）からの協議書の提出（山元発第 4533 号）
平成 27 年 11 月 19 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1308 号）
平成 27 年 11 月 25 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 2314 号）
平成 27 年 11 月 27 日	埋蔵文化財発掘通知の提出（山元発第 4670 号）
平成 27 年 11 月 27 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1351 号）
平成 27 年 12 月 4 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 2419 号）

なお、確認調査は第 1 表にしめす日程で実施し、遺構・遺物は発見されなかったことから本調査は不要と判断し、調査を終了した。調査担当者は下記の通りである。

調査担当：山元町教育委員会 木下晴一（香川県派遣）

調査協力：宮城県教育委員会 伊藤智樹（千葉県派遣）・長内祐輔・佐藤則之

4 消防防災施設災害復旧費補助事業 消防救急無線（デジタル方式）工事

亙理地区行政事務組合消防本部の消防無線が東日本大震災によって被災したことから、デジタル通

信方式による復旧工事が、同組合によって計画された。工事は10m×10mの用地内に無線用鉄塔、基地局舎、発電機を設置するもので、特に鉄塔基礎については現地盤から5mほど掘削される計画であった。計画地が狐塚遺跡の範囲に含まれていたことから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、事業主体である亘理地区行政事務組合と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、事業と遺跡との関わりの把握を目的とした確認調査を行うこととした。

【協議及び発掘通知】

平成24年1月10日	亘理地区行政事務組合からの協議書の提出（亘消警発第4号）
平成24年1月10日	町教委から県教委へ進達（山教委発第831号）
平成24年1月18日	県教委から確認調査実施の回答（文第1928号）
平成24年2月10日	埋蔵文化財発掘通知の提出（亘消警発第13号）
平成24年2月10日	町教委から県教委へ進達（山教委発第987号）
平成24年2月24日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第2278号）

なお、確認調査は第1表にしめす日程で実施し、遺構・遺物は発見されなかったことから本調査は不要と判断し、調査を終了した。調査担当者は下記の通りである。

調査担当：山元町教育委員会 山田隆博

5 南保育所放射能除染

山元町は東日本大震災に係る南保育所グラウンド（旧老人憩いの家グラウンド）の放射能除染工事を計画した。除染方法は、グラウンドの表土を3cm漉きとった後、3cm覆土し、漉きとった土をグラウンド敷地内に掘削した穴（幅約10m×10m・深さ3m）に埋設するもので、計画立案にあたり、計画地が合戦原遺跡の範囲に含まれることから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、事業主体である山元町保険福祉課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、事業と遺跡との関わりの把握を目的とした確認調査を行うこととした。

【協議及び発掘通知】

平成24年7月13日	山元町長（保険福祉課）からの協議書の提出（山元発第2132-3号）
平成24年7月13日	町教委から県教委へ進達（山教委発第676号）
平成24年7月27日	県教委から確認調査実施の回答（文第1207号）
平成24年7月31日	埋蔵文化財発掘通知の提出（山元発第2133-3号）
平成24年8月1日	町教委から県教委へ進達（山教委発第772号）
平成24年8月17日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第1424号）

なお、確認調査は第1表にしめす日程で実施し、遺構・遺物は発見されなかったことから本調査は不要と判断し、調査を終了した。調査担当者は下記の通りである。

調査担当：山元町教育委員会 丹野修太

6 山下花釜線復興関連道路新設改良事業

山元町では、震災復興計画に基づく避難路の整備事業として山下花釜線の新設改良工事を計画した。工事は、現道の山下花釜線を北側に拡幅するもので、拡幅範囲の工法は、用地内に盛土を行い、その上に路床及び路盤を敷設後、歩道舗装工を行うものであった。計画地が畑合遺跡の範囲に含まれることから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、事業主体である山元町震災復興整備課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、道路拡幅部を対象に事業と遺跡との関わりの把握を目的とした確認調査を行うこととした。

【協議及び発掘通知】

平成 29 年 6 月 27 日	山元町長（震災復興整備課）からの協議書の提出（山元発第 2306 号）
平成 29 年 6 月 29 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 545 号）
平成 29 年 7 月 26 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 1015 号）
平成 29 年 7 月 28 日	埋蔵文化財発掘通知の提出（山元発第 2306 号）
平成 31 年 2 月 22 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1770 号） 調査後提出につき同日付で始末書提出（山教委発 1758 号）
平成 31 年 3 月 15 日	県教委から文書收受の通知（文第 3226 号）

確認調査は第 1 表にしめす日程で実施し、遺構・遺物は発見されなかったことから本調査は不要と判断し、調査を終了した。調査担当者は下記の通りである。

調査担当：山元町教育委員会 田村大器

7 主要地方道相馬互理線改良

平成 26 年 3 月、宮城県仙台土木事務所より県道相馬・互理線改良工事に係る埋蔵文化財との関わりについて照会があった。計画は県道のルート変更及び嵩上げ工を行うもので、計画地は西須賀遺跡・北中須賀遺跡・新浜遺跡・頭無遺跡・北泥沼遺跡の計 5 遺跡の範囲に含まれ、北頭無遺跡の範囲に隣接していた。このことから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、事業主体である宮城県仙台土木事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、事業と遺跡との関わりの把握を目的とした確認調査を行うこととした。

【協議及び発掘通知】

平成 26 年 4 月 23 日	宮城県仙台土木事務所長からの協議書の提出（仙土第 199 号）
平成 26 年 4 月 23 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 160 号）
平成 26 年 9 月 10 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 1524 号）
平成 28 年 9 月 15 日	埋蔵文化財発掘通知の提出（仙土第 199 号）
平成 28 年 9 月 27 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 981 号）
平成 28 年 10 月 5 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 1799 号）

なお、確認調査は第 1 表にしめす日程で実施した。調査の結果、遺構は北中須賀遺跡遺跡・北頭無遺跡で時期不明の溝跡 1 条やビット敷基が確認され、北泥沼遺跡では自然の落ち込みから土師器甕が

出土したものの、盛土工法により遺構の損壊は免れること、他の遺跡では遺構・遺物は発見されなかったことから、復興事業における発掘調査基準の弾力的運用方針により、本調査は不要と判断し、調査を終了した。調査担当者は下記の通りである。

調査担当：山元町教育委員会 田村大器

8 一般県道山下停車場線整備事業

平成 28 年 2 月、宮城県仙台土木事務所より県道山下停車場線拡幅工事に係る埋蔵文化財との関わりについての協議書が提出された。計画は現道を約 6 m 拡幅し、排水溝を設置するもので、計画地が新田遺跡の範囲に隣接していたことから、山元町教育委員会と宮城県教育委員会は、事業主体である宮城県仙台土木事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、遺跡の広がりの把握を目的とした確認調査を行うこととした。

【協議及び発掘通知】

平成 28 年 2 月 16 日	宮城県仙台土木事務所長からの協議書の提出（仙土第 3874 号）
平成 28 年 2 月 16 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1747 号）
平成 28 年 3 月 2 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 3186 号）
平成 28 年 3 月 7 日	埋蔵文化財発掘通知の提出（仙土第 4245 号）
平成 28 年 3 月 7 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1868 号）
平成 28 年 3 月 23 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 3368 号）

なお、確認調査は第 1 表にしめす日程で実施したが、遺構確認面から土師器甕の小破片 1 点が出土したのみであったことから本調査は不要と判断し、調査を終了した。調査担当者は下記の通りである。

調査担当：山元町教育委員会 田村大器・山田隆博

9 被災個人住宅・零細企業再建事業

被災した個人住宅や零細企業再建等に関わる工事については、14 遺跡 22 件の調査を行った（第 3 表）。これらは各事業者との事前協議において、地盤改良や柱状改良、切土造成等により遺構の損壊が予想されたことから、確認調査を行うこととしたものである。その他、遺構の損壊を免れると判断されたものについては工事立会、慎重工事の対応としている。

確認調査は、第 3 表にしめす日程で実施した。谷原遺跡・小平館跡における 2 件の調査については、遺構・遺物が確認され、工法変更等による遺構の保存が困難であったことから本調査を実施することとした。その他については、遺構・遺物が発見されなかったこと、遺構は確認されたものの確認面が深く、工事による遺構の損壊を免れることなどから本調査は不要と判断し、調査を終了した。各遺跡の調査担当者は下記の通りである。※ [] 内の数字は第 3 表に対応する

[1・2・5・6・8 ～ 10・13] 山元町教育委員会 山田隆博

[3・4・7・11・12・16 ～ 22] 山元町教育委員会 丹野修太

[14・15] 山元町教育委員会 森秀之（北海道恵庭市派遣）

第3表 調査実施一覧表（個人住宅・零細企業）

No.	調査原因	遺跡名	所在地	〔発掘届提出日〕 通知日・番号	調査期間	調査面積	調査対象部と主な発見遺構・遺物
1							
2	零細企業 個人住宅	小平館跡 (2～5次)	小平字館 1-1・ 63-7-10-11、 小平字北 80-5	報文参照	2013/3/21～29、 4/26、6/4・14、 2016/1/21～2/19	1,441㎡	宅地造成部・住宅部等 〔遺構〕竪穴建物跡1・掘立柱建物跡9・溝跡 16・土坑 62・ピット多数 〔遺物〕弥生土器、土師器、須恵器、かわらけ、 中世陶器、近世陶器、石器
4							
5	零細企業 個人住宅	谷原遺跡 (4～6次)	谷原 84-9-10、 89-9-92-1・ 93-96-1	報文参照	2013/11/27～28、 12/5～20、 2014/4/25～26	584㎡	宅地造成部・住宅部等 〔遺構〕竪穴建物跡1・掘立柱建物跡9・土坑 10・溝跡6・ピット多数 〔遺物〕土師器・須恵器・石器
8	零細企業	向山遺跡	坂元字並松 16・17の各一部	〔2011/11/18〕 2011/11/30・ 文第 1577 号	2011/12/05	20㎡	事務所建物部 〔遺構・遺物〕なし ※過去の造成により大きく削平
9	個人住宅	中道遺跡	鷺足字中道 4-3-25-26の各 一部、4-28・30	〔2012/1/12〕 2012/1/20・ 文第 1957 号	2012/02/22	2㎡	浄化槽部 〔遺構・遺物〕なし
10	個人住宅	大平館跡	大平字馬場 1-1	〔2012/3/2〕 2012/3/14・ 文第 2433 号	2012/04/11	10㎡	浄化槽部・擁壁部 〔遺構〕ピット 1(時期不明) 〔遺物〕なし ※工事による遺構の損壊なし
11	個人住宅	大平館跡	大平字掘 32-9	〔2012/2/28〕 2012/3/23・ 文第 2494 号	2012/04/18	94.5㎡	住宅部・浄化槽部 〔遺構〕ピット 24(時期不明) 〔遺物〕なし ※工事による遺構の損壊なし
12	個人住宅	大平館跡	大平字館ノ内 16-1	〔2012/6/6〕 2012/6/15・ 文第 783 号	2012/07/19	48.8㎡	住宅部・浄化槽部 〔遺構〕ピット 4(時期不明) 〔遺物〕なし ※工事による遺構の損壊なし
13	個人住宅	館の内遺跡	大平字館ノ内 4-3	〔2013/10/30〕 2013/11/13・ 文第 2064 号	2013/11/20	104㎡	宅地造成部 〔遺構〕土坑・ピット 〔遺物〕土師器小片 ※工事による遺構の損壊なし
14	個人住宅	中道遺跡	鷺足字中道 19-1	〔2013/10/31〕 2013/11/13・ 文第 2071 号	2013/11/28 12/3	96㎡	住宅部 〔遺構〕なし 〔遺物〕縄文土器・弥生土器 ※工法変更により現状保存。
15	個人住宅	熊の作遺跡・ 狐塚遺跡	坂元字熊ノ作 38-1の一部	〔2013/12/12〕 2014/1/8・ 文第 2573 号	2013/12/17～18	160㎡	住宅部 〔遺構〕竪穴建物跡・溝跡・柱穴 〔遺物〕土 師器片・須恵器片 ※工法変更により遺構の 損壊なし
16	個人住宅	合戦原 B 遺跡	高瀬字額下 12-1・13-1	〔2014/5/19〕 2014/5/30・ 文第 563 号	2014/06/02・03	95㎡	住宅部・浄化槽部 〔遺構〕木炭焼成土坑 1 〔遺物〕土師器片
17	個人住宅	山寺館跡	山寺字石垣 55-6	〔2014/6/13〕 2014/6/25・ 文第 858 号	2014/07/16	10㎡	住宅部 〔遺構・遺物〕なし ※2m以上の盛土造成地
18	個人住宅	室原遺跡	高瀬字室原 5-1・4-5の各一 部	〔2014/7/16〕 2014/7/25・ 文第 1155 号	2014/08/13	10.5㎡	浄化槽部 〔遺構・遺物〕なし
19	個人住宅	石垣遺跡	山寺字石垣 17-8	〔2014/8/13〕 2014/8/20・ 文第 1334 号	2014/09/02	44㎡	住宅部・浄化槽部 〔遺構〕ピット多数 〔遺物〕なし ※工事による遺構の損壊なし
20	個人住宅	北経塚遺跡	小平字北 92	〔2014/8/27〕 2014/9/3・ 文第 1462 号	2014/12/26	32㎡	住宅部 〔遺構・遺物〕なし ※旧表土なし。過去の植林により削平か?
21	個人住宅	大平館跡	大平字館ノ内 25	〔2015/12/3〕 2015/12/9・ 文第 2468 号	2015/12/11	6㎡	浄化槽部 〔遺構・遺物〕なし
22	個人住宅	合戦原 B 遺跡	高瀬字赤坂 33-8	〔2020/8/20〕 2020/8/26・ 文第 1441 号	2020/11/26	2㎡	浄化槽部 〔遺構・遺物〕なし

以下では、確認調査の結果、本調査に至った小平館跡・谷原遺跡（註1）、遺構や遺物が確認されたものの、工事による遺構の損壊が部分的であったことから、一部の遺構精査のみを行った館の内遺跡・合戦原 B 遺跡について詳細を報告する。また、遺構・遺物は確認されなかったが、事業規模が大きく調査対象面積が広範となった山元町東部地区ほ場整備事業、防災公園整備事業、農産物出荷貯蔵

施設整備事業に伴う調査については調査概要のみを示すこととする。

なお、第3表-14の個人住宅建設に伴う中道遺跡の確認調査では、遺構は確認されなかったものの、現地表から2mの深さにおいて縄文土器や弥生土器の小破片を含む2次堆積層が確認された。調査の際、サブトレンチ等から120点程の土器片が出土しており、これらの主なものについては本書161・162頁に掲載している。

註1：小平館跡・谷原遺跡においては、隣接する確認調査区（小平館跡3次調査区・谷原遺跡6次調査区）についても遺構・遺物の関連性を踏まえ併せて記載している。

こだいらたてあと 小平館跡

調査要項

遺跡名	小平館跡（宮城県遺跡登録番号：14020 遺跡記号：KD）
所在地	宮城県亶理郡山元町小平字館、字北
調査主体	山元町教育委員会
調査担当	山元町教育委員会生涯学習課 山田隆博、木下晴一、藤田佑、丹野修太、千尋美紀
調査期間	2次調査：平成25年3月21日～29日、3次調査：平成25年4月26日、 4次調査：平成25年6月4日～14日、5次調査：平成28年1月21日～2月19日
調査対象面積	約1,689㎡（2次：498㎡、3次：602㎡、4次：330㎡、5次：855㎡）
調査面積	約1,441㎡（2次：450㎡、3次：6㎡、4次：330㎡、5次：655㎡）

1 調査に至る経過

平成24年度から27年度にかけて、山元町小平地区において東日本大震災で被災した個人住宅建設にかかる宅地造成箇所と埋蔵文化財の関わりについて照会があった。これら4件の事業予定地は一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「小平館跡」に該当したため、事前の協議のうえ、それぞれ確認調査および本調査を実施した。

【協議及び発掘通知】

2次調査 所在地：山元町小平字館63-7、調査担当：丹野修太・藤田佑・山田隆博

平成25年2月28日	事業主からの協議書の提出
平成25年2月28日	町教委から県教委へ進達（山教委発第1843号）
平成25年3月6日	県教委から確認調査実施の回答（文第3471号）
平成25年3月13日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成25年3月13日	町教委から県教委へ進達（山教委発第1904号）
平成25年3月22日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第3647号）

3次調査 所在地：山元町小平字北80-5、調査担当：丹野修太

平成24年11月12日	事業主からの協議書の提出
平成24年11月12日	町教委から県教委へ進達（山教委発第1320号）
平成24年11月21日	県教委から確認調査実施の回答（文第2423号）
平成24年12月11日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成24年12月11日	町教委から県教委へ進達（山教委発第1464号）
平成24年12月21日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第2734号）

4次調査 所在地：山元町小平字館1-1、調査担当：丹野修太・藤田佑・山田隆博

平成25年5月20日	事業主からの協議書の提出
平成25年5月20日	町教委から県教委へ進達（山教委発第291号）
平成25年5月24日	県教委から確認調査実施の回答（文第484号）
平成25年5月29日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成25年5月29日	町教委から県教委へ進達（山教委発第348号）
平成25年6月7日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第605号）

5次調査 所在地：山元町小平字館63-10・11、調査担当：丹野修太・木下晴一・千尋美紀

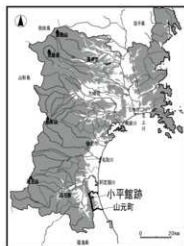
平成27年12月22日	事業主からの協議書の提出
平成27年12月22日	町教委から県教委へ進達（山教委発第1471号）

平成 28 年 1 月 8 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 2674 号）
平成 28 年 1 月 12 日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成 28 年 1 月 12 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1537 号）
平成 28 年 1 月 22 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 2825 号）

2 遺跡の概要と地理的環境

小平館跡は宮城県亶理郡山元町小平字館・北に所在し、山元町役場の北北西約 2.6 km に位置する（第 1 図）。遺跡は阿武隈山地から東に延びる標高 12 ～ 32 m の中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地し、同丘陵上には鳳仙寺がある（第 2 図）。遺跡の範囲は、東西 380 m、南北 150 m ほどの広がりをもつ。現況は山林、畑地、荒地、宅地、寺院、墓地である。遺跡の南側、段丘南面には古墳時代後期と目される館横穴墓群が立地している。

小平館跡の歴史的環境については 1 次調査の報告書（山元町教育委員会 2015c）に詳しい。延宝年間（1673 ～ 1681）編纂の『仙臺領古城書上』や享保 13 年（1728）編纂の『仙臺領古城書立之覚』によれば、小平館跡の規模は東西 34 間・南北 11 間の 374 坪、城主は小平兵衛とされている。また、大正 6 年（1917）に編纂された『亶理郡史』によれば、館主は亶理館主であった亶理宗隆とされる（渡部 1931）。仙台領内の古城・館についてまとめた紫桃正隆氏は、小平館跡に関して高さ 40 m ほどの独立形の円郭式山城で、東西 150 m、南北 50 m の平場が本丸をなし、5 ～ 6 段の壇がまわり、特に広い二の壇が二の丸にあたる可能性を指摘している（紫桃 1974）（第 2 図）。



第 1 図 小平館跡の位置

以上が小平館跡に関する史料・文献である。館主には小平兵衛や亙理宗隆などの説があり、年代的には16世紀半ば～後半の可能性が考えられるが、築造年代や館跡の構造・遺構については不明な点が多い。小平館跡の所在する丘陵は地形改変が著しく、丘陵頂部は雑木が生い茂る山林となっており、現状で当時の館にかかわる遺構を確認することは困難である。推定される館の構造・範囲(崇桃 前掲)と旧地形(国土地理院撮影1960年代の航空写真)との対応(第2図赤線)を考えると、今回の発掘調査範囲(2・4・5次)は館跡からみて東に位置し、もっとも外周の壇と接する。平成24年に実施された1次調査では遺跡範囲の東側から掘立柱建物跡3棟や柱穴・ピット多数が確認され(山元町教育委員会 前掲)、中世以降の小平館跡周辺における土地利用の在り方が検討されている。

3 調査の方法

(1) 現地調査

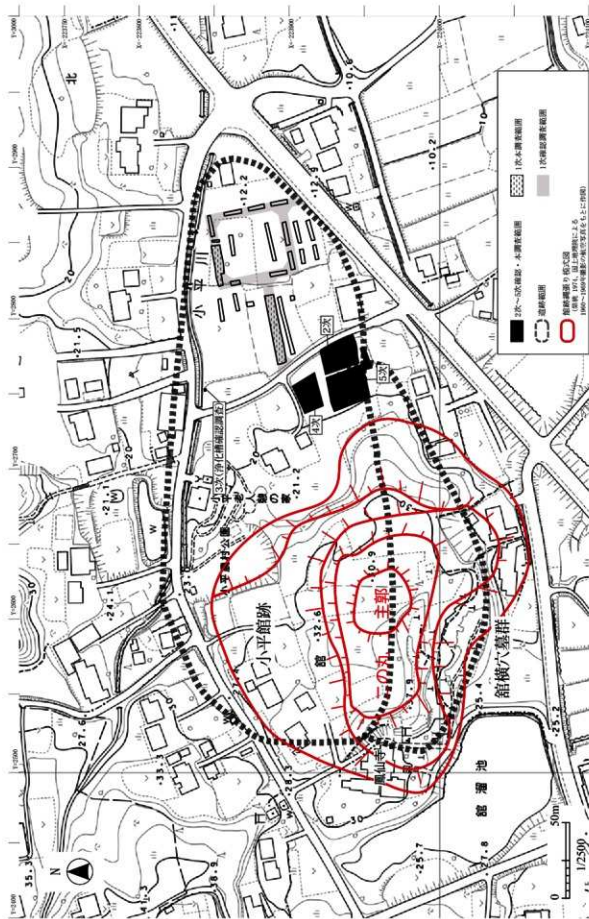
【概要】

2次調査にかかる工事範囲は、平成24年度に行われた1次調査範囲(第2図)から道路を挟んで南西の隣接地で、より館跡本体に近く、遺構が密に分布することが予想された。緩斜面である工事範囲西側では約0.6m、東側では約0.9mの切り土が見込まれたほか、住宅基礎部分と給水管接続・浄化槽設置部分などで掘削が計画されていた。そのため、範囲全体(約498㎡)の事前調査を行った結果、多数の柱穴や溝跡などが確認された。

3次調査にかかる工事範囲(602㎡)は、掘削を伴わない盛土造成であることから、給水管接続部分(22㎡)を工事立会、浄化槽を設置する3×2mの範囲のみ確認調査の対応とした。この調査で遺構・遺物は確認されていない。

4次調査にかかる工事範囲は、2次調査区の北西に隣接し、遺構の分布が予想された。盛土による宅地造成の前に地山面までの表土除去や擁壁の設置を行う計画であったため、範囲全体(約330㎡)について遺構の確認を目的とした調査を行った。この結果、多数の柱穴や溝跡などの遺構が確認されたため、同じ範囲を対象とした本調査を実施した。このうち、工事によって破壊される恐れのある外周の擁壁範囲の遺構については精査を行い、盛土とする範囲の遺構については重複関係や性格を把握するための調査にとどめた。

5次調査にかかる工事範囲は2次調査区の西、4次調査区の南に隣接する。緩斜面である範囲西側では約2.5m、東側では約0.3mの盛土が見込まれ、住宅基礎・車庫・浄化槽の設置部分では掘削が計画されていた。また、南側の町道から進入路を造成する部分についても掘削が予定され、範囲全体(約855㎡)で遺構に与える影響が大きいと判断し事前調査を行った。その結果、多数の柱穴、溝跡、竪穴建物跡1棟などが確認された。



第2図 発掘区的位置

【表土除去・遺構精査・遺構測量】

表土除去はバックホー（0.45㎡）、遺構確認作業は人力で行った。遺構確認面はすべての調査次で地山（IV層）である。遺構・調査区の図面作成・等高線作成はトータルステーション（SRX5X）及び電子平板システム（遺構くん cubic）、遺構断面図は手実測により縮尺 1/20 で実測した。その際、東日本大震災後の世界測地系に基づく基準杭を利用した。

【遺構の番号と記録作成】

遺構番号は現場段階では調査次ごとに独立し、遺構の性格ごとに 1 から番号を与えた。整理段階で報告書が既刊の 1 次調査で使用した番号から連番とし、遺構の性格ごとに振りなおした（第 1 表）。

【遺構遺物の記録・取り上げ・写真撮影】

今回の調査で確認した遺構のうち、事業によって破壊される遺構についてはすべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。保存される遺構については、性格を把握するための調査にとどめた。また、円滑な調査進行のため、中世以降の柱穴・ピット類の下場計測は底面標高の記録で代えるとともに、一定の基準（例言参照）に照らした記録を行っている。遺物の取り上げについては、原則として出土層位ごとに取り上げたが、半截時に出土したものについては「堆積土」として取り上げた。各種記録写真撮影には、一眼レフデジタルカメラ（Nikon D7000）を使用した。

（2）室内整理

小平館跡 2 次～5 次調査で出土した遺物・記録などの基礎整理は、各発掘調査終了後に山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。2 次・4 次調査分の成果については平成 25 年度内、5 次調査分については平成 28 年度内に遺物の洗浄・保存処理と計数、記録写真のネーミング、平面図・断面図の修正・トレースなどを終えている。遺物の図化・トレースは令和 2 年度に㈱シン技術コンサル東北支店に委託する形で開始し、報告書の作成・執筆は宮城県教育委員会が令和 2 年～3 年度に実施した。室内整理作業には遺構くん cubic、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5、Adobe InDesign CS5 のソフトウェアを使用した。

第 1 表 小平館跡の調査で使用した遺構の番号

記号	遺構種別	【町第 11 集】	【本報告】 復原事業	【本報告】 復原事業	【本報告】 復原事業	【本報告】 復原事業
		1 次 (425 ㎡)	2 次 (430 ㎡)	3 次 (6 ㎡)	4 次 (230 ㎡)	5 次 (505 ㎡)
SI	型穴建物跡	—	—	—	—	1(1)
SB	掘立柱建物跡	1～3(3)	5～12(8)	—	—	4(1)
SK	土坑	1～12(12)	13～39(27)	—	40～43(4)	44～64(21)
SD	溝跡	1(1)	2(1)	—	3～4(2)	5～17(13)
P	柱穴・ピット	1～92(92)	93～309(217)	—	310～416(106)	419～645(227)

（ ）内は調査次ごとの遺構数を示す。柱穴・ピットの数は掘立柱建物跡を構成するものも含む。

4 基本層序

今回の主な調査範囲（2・4・5次調査）は、標高16m～19mの段丘裾の緩やかな東向き斜面上に位置する。調査範囲西（5次調査区西端）が最も標高が高い。調査区の基本層序は、上から現代の表土・耕作土（I層）、現代の盛土（II層）、旧表土（III層）、地山（IV層）の順で構成される。盛土（II層）は4次調査区北側のみで見つかった。遺構確認面は地山（IV層）上面である。

遺構の残存状況から、今回の調査範囲は全体的に削平を受けていると考えられる。各層の概要は以下の通りである（第3図）。

I層：現代の表土・耕作土。I a層（表土）とI b層（耕作土）に細別される。

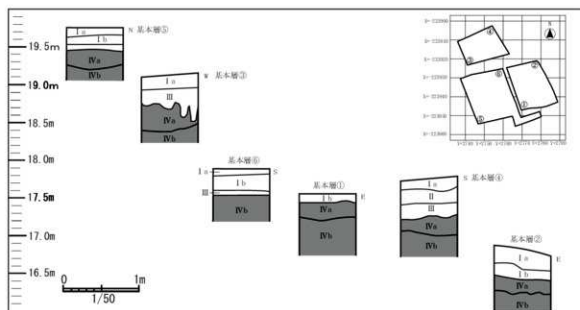
- ・ I a層：褐色（10YR4/4）シルト。層厚は10 cm前後である。
- ・ I b層：暗褐色（10YR3/4）シルト。層厚は10～15 cm前後である。

II層：明黄褐色（2.5YR）シルト。4次調査区北東側のみで認められた。層厚は20 cm前後。地山由来の粒子を多く含む。現代の土地利用に伴う盛土である。

III層：1次調査で近世陶器などを含むことが確認されており、近世以降に形成された旧表土と考えられる。調査範囲の西側・北側で残るが、南東側（2次調査区）では認められない。暗褐色（10YR3/4）のシルトで、焼土粒・炭化物片をわずかに含む。

IV層：地山。旧表土あるいは表土直下で確認された。各地点により異なる種類の地山が確認されたが、大別してIV b層→IV a層の順に堆積している。

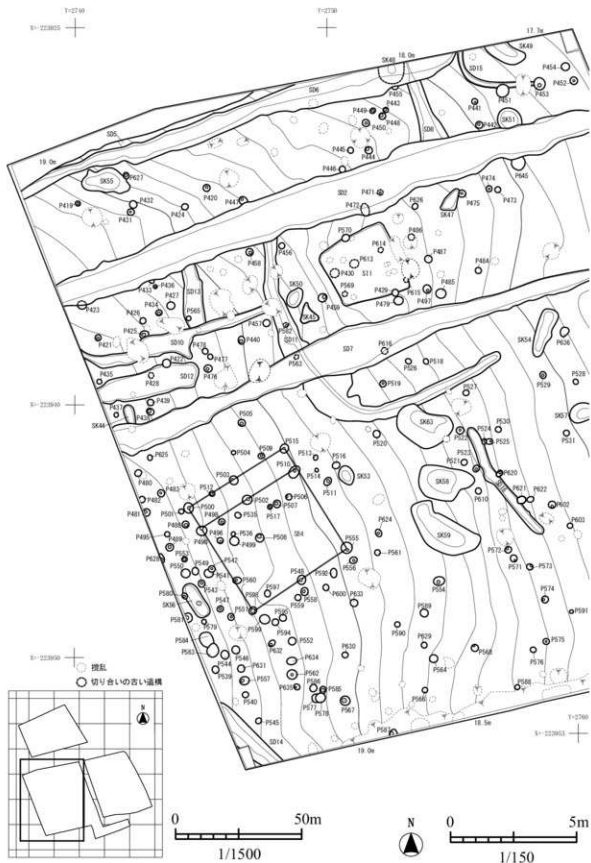
- ・ IV a層：褐色（10YR4/6）粘土質シルトによる均一な層。1次調査IV a層に対応。
- ・ IV b層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト。黄白色粘土、酸化鉄を含む。下層になるにしたがって酸化鉄が多くなる。1次調査IV c層に対応。



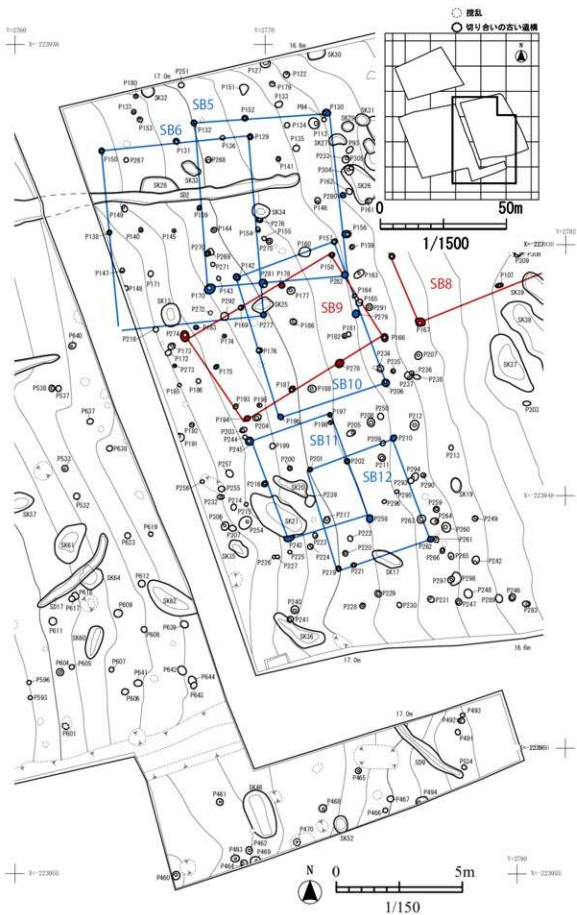
第3図 基本層序模式図



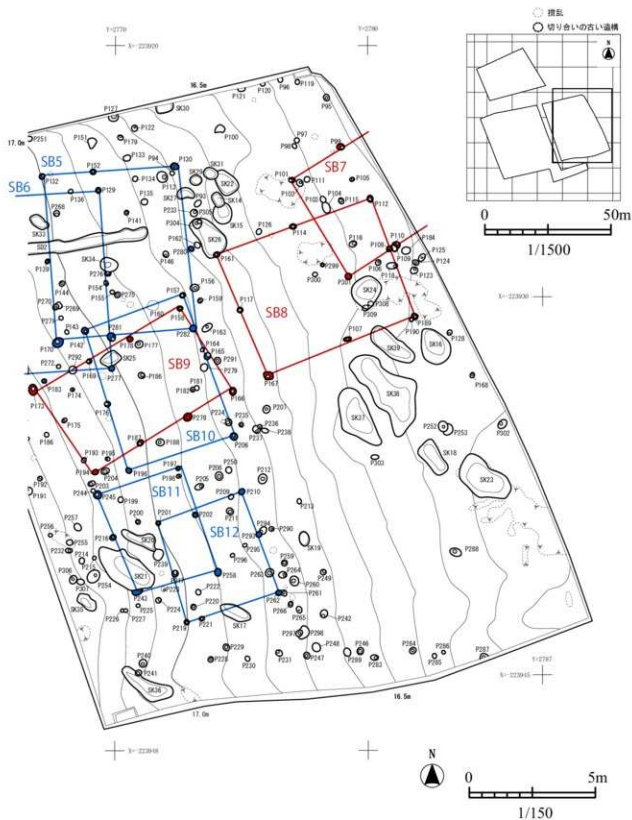
第4図 発掘区全体図



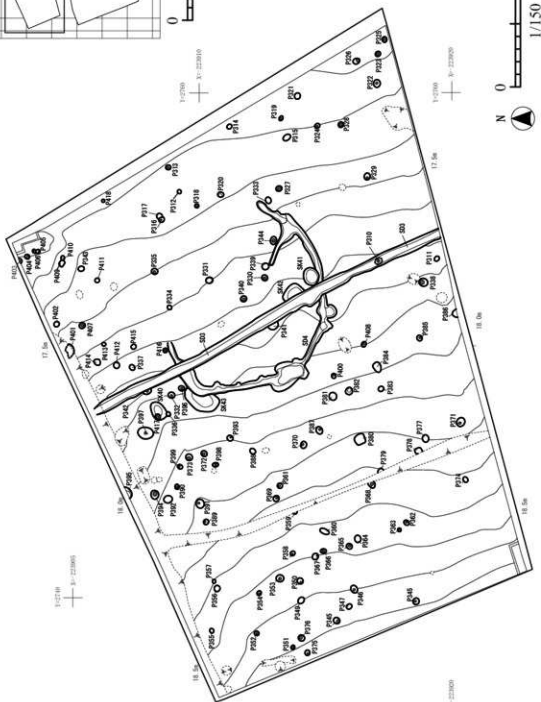
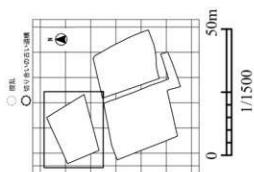
第5図 遺構配置図(1)



第6図 遺構配置図(2)



第7図 遺構配置図(3)



第 4 図 遺構記置図 (4)

第2表 小平館跡2次～5次調査出土遺物計数表

遺物	層位	採集土器	土師器										須恵器			小形 土師器	定規 陶器	石器	土製品	銅器 (重量(g))
			壺		鉢		高台付片	高坏	器台	盆	甌	壺	甌	瓶						
			コクロ	不明	コクロ	不明	コクロ	コクロ	コクロ	コクロ	コクロ				コクロ					
S11	準層土		12	5								1						19		
			(150)									(30)						(181, 1)		
S14	準層土	1				1												2		
		(5)				(10)												(15)		
S23	1層		26								1							27		
			(195)								(30)							(225)		
S24	1層		10															10		
			(205)															(209)		
S28	掘出面		1															1		
			(5)															(5)		
S34	準層土		1															1		
			(5)															(5)		
S41	1層	2			9												2	13		
		(10)			(20)												(20)	(50)		
S42	1層				3		1											4		
					(45)		(25)											(70)		
S44	1層											1						1		
												(315)						(315)		
S46	準層土				2													2		
					(5)													(5)		
S52	準層土		14									3				2		19		
			(150)									(100)				(10)		(390)		
S53	1層											2						2		
												(240)						(240)		
S54	1層	3			7							2					1	16		
		(15)			(35)							(225)					(270)	(470)		
S54	1層		2		13				1	2								18		
			(220)		(70)				(90)	(160)								(540)		
S55	準層土				3									1				4		
					(10)									(40)				(50)		
S56	準層土											3		1				4		
												(100)		(90)				(190)		
S57	準層土	1			1							3						5		
		(5)			(10)							(20)						(35)		
S58	2層		10															10		
			(50)															(50)		
S59	1層		74					1			1							76		
			(535)					(60)			(510)							(1105)		
S510	1層		10													1		11		
			(75)													(5, 6)		(80, 6)		
S511	準層土		91										1					92		
			(790)										(35)					(825)		
S511	2層		103															103		
			(810)															(810)		
S512	準層土		8															8		
			(25)															(25)		
S513	準層土		2															2		
			(15)															(15)		
S516	準層土		2															2		
			(25)															(25)		
S517	準層土		45															45		
			(530)															(530)		
S517	2層		80															80		
			(390)															(390)		
F139	掘出面		2															2		
			(5)															(5)		
F229	準層土		1															1		
			(5)															(5)		
F247	準層土	1																1		
		(5)																(5)		
F223	柱成跡				1													1		
					(10)													(10)		
F228	準層土				1													1		
					(5)													(5)		
F437	準層土	1																1		
		(5)																(5)		
F443	準層土		1															1		
			(5)															(5)		
F476	準層土				1													1		
					(5)													(5)		
F521	準層土		1															1		
			(15)															(15)		
F594	準層土											1						1		
												(25)						(25)		
F597	1層				4													5		
					(5)								1					(155)		
F607	準層土		1															1		
			(5)															(5)		
F609	準層土													1				1		
														(5)				(5)		
F610	準層土				1													1		
					(5)													(5)		
F623	準層土				1													1		
					(15)													(15)		
	掘出面				94			3										97		
					(400)			(25)										(425)		
	表土層孔	3			17		1	1	1	1	1	8		1	1			34		
		(20)			(85)		(15)	(40)		(5)	(5)	(185)		(10)	(5)			(370)		
	数量(重量(g))	1	5	6	497	5	158	1	2	5	1	3	26	2	2	3	3	2	728	
		(5)	(30)	(30)	(4935)		(10)	(40)	(125)	(90)	(705)	(150)	(230)	(1975)	(130)	(15)	(15)	(276, 7)	(8781, 7)	

5 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、土坑52基、溝跡16条、553基の柱穴・ピットである(第4～8図)。遺物は溝跡を中心に、土師器、須恵器、石器などが平箱で4箱ほど出土している(第2表)。

(1) 竪穴建物跡

【S11 竪穴建物跡】(第9・10図)

〔位置〕5次調査区(中央北)〔確認面〕地山〔重複〕P429・570と重複し、これらより古い。P430・569・613・614・615と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形〕長辺2.78m、短辺2.74mの隅丸方形である。東辺の一部は擾乱を受けている。

〔堆積土〕3層に細分される褐・黄褐色シルトなどで、すべて廃絶後の自然堆積土である。

〔壁〕地山を壁としている。壁は急に立ち上がっており、壁高は最も残りの良い西側(斜面上方)で約0.20m残存する。

〔床〕地山を床としている。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕12点、ロクロ調整の土師器甕5点(計150g)、須恵器甕1点(30g)、石器剥片1点(1.1g)が出土している。図示できたものは土師器甕1点(第10図1)、須恵器甕1点(2)である。土師器甕は底部からやや内湾しながら立ち上がる。器面の磨滅のため調整痕は明瞭でない。

〔そのほかの施設〕主柱穴・カマド・周溝・貯蔵穴などの施設は確認されていない。

(2) 掘立柱建物跡

【SB4 掘立柱建物跡】(第5・11図)

〔位置〕5次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔構造〕東西2間、南北2間の東西棟で、身舎の北側に廂が付く。廂部分の桁行は2間である。

〔柱穴〕直径0.25m～0.50mの円形で、深さは最も深いもので0.44mである。埋土は地山ブロック・炭化物片を多く含む褐・黄褐色シルトなどである。

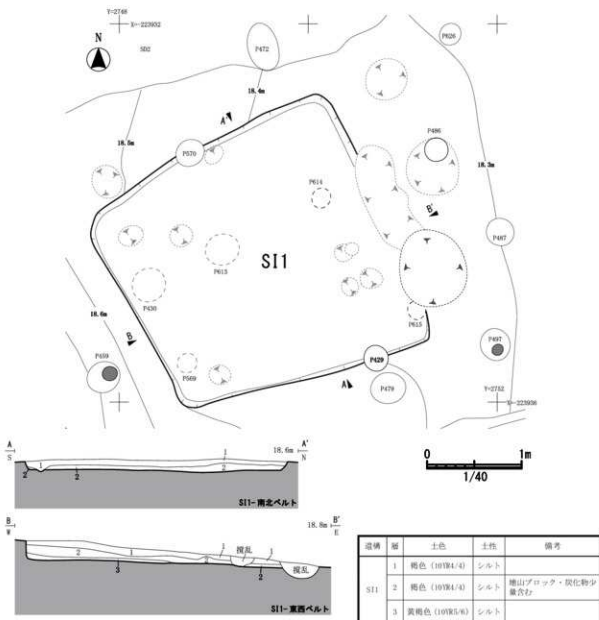
〔柱痕跡〕直径約9.0～16.0cmの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は南側柱列で西から2.17m・2.17mで、総長約4.34mである。梁行は身舎の西妻で3.70m、廂の出が1.0mで、総長約4.70mである。

〔出土遺物〕P510からロクロ調整の土師器坏1点(5g)、非ロクロ調整の土師器鉢1点(10g)が出土している。図示できたものはない。

【SB5 掘立柱建物跡】(第6・7図、第12図)

〔位置〕2次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕SB6・9・10と範囲が重複するが、柱穴の重複がな

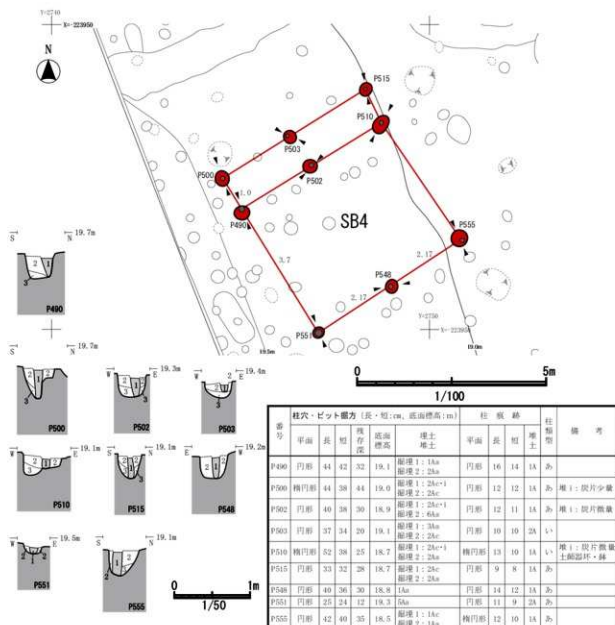


第9図 S11 竪穴建物跡



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	S11 層焼土	土師器	甕	底部	外面：ナデ(磨減)、内面：磨減、色調：外面・明褐色(T.5YR5/6)、内面・明褐色(T.5YR5/6)、法量：残存高3.7cm・底径7.61cm・器厚0.45~1.7cm	C-11
2	S11 層焼土	須恵器	甕	口縁部	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、内外面に自然釉付着、色調：外面・灰色(SA)、内面・灰黄色(T.5Y6/2)、法量：残存高2.9cm・器厚0.3~0.8cm	E-12

第10図 S11 竪穴建物跡 出土遺物



第 11 図 SB4 掘立柱建物跡

いため新旧関係は不明。

〔構造〕 東西 2 間、南北 2 間の南北棟である。

〔柱穴〕 直径 0.19 m ~ 0.40 m の円形で、深さは最も深いもので 0.18 m である。埋土は地山ブロック・炭化物粒を多く含む褐・黄褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕 直径約 0.10 ~ 0.18 m の円形・楕円形である。

〔規模・柱間〕 桁行は東側柱列で南から 3.17 m・3.48 m で、総長約 6.65 m である。梁行は南妻で西から 2.24 m・3.29 m で、総長約 5.53 m である。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SB6 掘立柱建物跡】(第 6-7、第 12 図)

〔位置〕 2 次調査区 (西) 〔確認面〕 地山 〔重複〕 SB5・9・10 と範囲が重複するが、柱穴の重複がな

いため新旧関係は不明。SB6:P276 がSK34 と重複し、これより古い。SB6:P277 がSK25 と重複し、これより新しい。

〔構造〕 東西2間、南北2間の南北棟である。南西隅は調査区外にある。

〔柱穴〕 直径0.18 m～0.25 mのやや不整な円形で、深さは最も深いもので0.16 mである。埋土は地山ブロックを多く含む褐・暗褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕 直径約0.10～0.13 mの円形である。

〔規模・柱間〕 桁行は東側柱列で南から3.83 m・3.30 mで、総長約7.13 mである。梁行は北妻で西から2.98 m・2.93 mで、総長約5.91 mである。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SB7 掘立柱建物跡】(第6・7図、第12図)

〔位置〕 2次調査区(東)〔確認面〕地山〔重複〕SB7:P110→P109→SB8:P108(SB8と重複し、これより古い)。

〔構造〕 東西1間以上、南北1間の東西棟と想定される。東側は調査区外にある。

〔柱穴〕 直径0.25 m～0.30 mのやや不整な円形で、深さは最も深いもので0.16 mである。埋土は地山ブロックを多く含む褐・暗褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕 直径約0.11～0.15 mの円形である。

〔規模・柱間〕 桁行は1間のみ調査区にかかり、北側柱列で西から2.25 mを測る。梁行は西妻で4.43 mである。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SB8 掘立柱建物跡】(第6・7図、第13図)

〔位置〕 2次調査区(東)〔確認面〕地山〔重複〕SB8:P108がP109と重複し、これより新しい。SB8:P161がSK26と重複し、これより新しい。SB8:P189がP190と重複し、これより古い。

〔構造〕 東西2間、南北2間の東西棟である。

〔柱穴〕 直径0.24 m～0.36 mのやや不整な円形・楕円形であり、深さは最も深いもので0.25 mである。埋土は地山ブロックを多く含む褐・黄褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕 直径約7.0～15.0 cmの円形である。

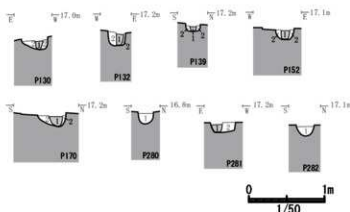
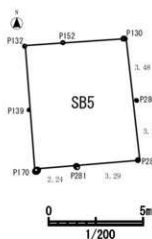
〔規模・柱間〕 桁行は北側柱列で西から3.25 m・3.30 mで、総長約6.55 mである。梁行は西妻で北から2.31 m・2.80 mで、総長約5.11 mである。

〔出土遺物〕 出土していない。

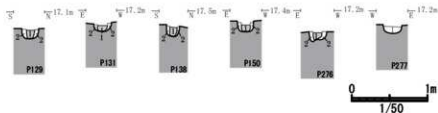
【SB9 掘立柱建物跡】(第6・7図、第13図)

〔位置〕 2次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SB5-6・10と範囲が重複するが、柱穴の重複がないため新旧関係は不明。

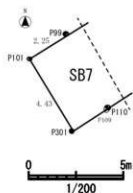
〔構造〕 東西3間、南北1間の東西棟である。



番号	柱穴・ピット形状 (長・短:cm, 底面標高:m)				柱 痕 跡			柱 指 型	備 考			
	平面	長	短	残存深	底面標高	埋土層土	平面			長	短	
P130	円形	32	24	12	16.5	5Aa	円形	10	9	3A	あ	
P132	円形	24	22	17	16.7	3Ab	円形	12	10	2A	あ	
P139	円形	19	15	8	16.9	6Aa	円形	9	8	3A	あ	
P152	円形	24	23	14	16.7	4Ab	円形	11	10	1A	あ	
P170	円形	40	32	18	16.9	6Aa	横円形	18	10	4A	あ	
P280	円形	21	20	13	16.5	5Ab	—	—	—	—	—	
P281	横円形	37	29	17	16.8	5Ac	円形	16	16	4A	あ	
P282	円形	24	24	14	16.6	5Aa	—	—	—	—	—	



番号	柱穴・ピット形状 (長・短:cm, 底面標高:m)				柱 痕 跡			柱 指 型	備 考			
	平面	長	短	残存深	底面標高	埋土層土	平面			長	短	
P129	円形	23	21	10	16.7	6Aa	円形	11	9	2A	あ	
P131	円形	22	22	6	16.9	5Aa	円形	13	12	2A	あ	
P138	円形	18	18	15	17.1	2Ac	円形	10	8	1A	あ	
P150	円形	22	21	12	17.0	5Aa	円形	11	9	1A	あ	
P153	円形	19	17	16	17.0	5Ac	—	—	—	—	—	
P126	円形	24	22	11	16.8	5Ab	円形	13	11	4A	あ	SB34より古
P127	円形	25	24	12	16.7	10Aa	—	—	—	—	—	SB35より新



番号	柱穴・ピット形状 (長・短:cm, 底面標高:m)				柱 痕 跡			柱 指 型	備 考			
	平面	長	短	残存深	底面標高	埋土層土	平面			長	短	
P99	円形	29	27	12	16.2	5Aa	円形	13	13	3A	あ	
P101	横円形	26	20	16	16.2	5Aa	円形	15	13	6A	あ	
P110	円形	30	30	12	16.1	3Aa	円形	11	11	3A	あ	P109より古
P101	円形	25	24	12	16.2	5Aa	—	—	—	—	—	

第12図 SB5～7掘立柱建物跡

〔柱穴〕直径0.19 m～0.33 mのやや不整な円形・楕円形で、深さは最も深いもので0.24 mである。

埋土は地山ブロックを多く含む褐・暗褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕直径約0.13～0.19 mの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は北側柱列で西から2.37 m・1.78 m・2.35 mで、総長約6.50 mである。梁行は西妻で3.98 mである。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SB 10 掘立柱建物跡〕(第6・7図、第13図)

〔位置〕2次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SB5・6・9と範囲が重複するが、柱穴の重複がないため新旧関係は不明。

〔構造〕東西1間、南北2間の南北棟である。

〔柱穴〕直径0.24 m～0.31 mの円形で、深さは最も深いもので0.29 mである。埋土は地山ブロック・炭化物片を含む褐・暗褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕直径約9.0～17.0 cmの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は西側柱列で北から2.80 m・3.03 mで、総長約5.83 mである。梁行は北妻で4.10 mである。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SB 11 掘立柱建物跡〕(第6・7図、第14図)

〔位置〕2次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕SB12と範囲が重複するが、柱穴の重複がないため新旧関係は不明。SB11:P243がSK21と重複し、これより古い。SB11:P245がP244と重複し、これより古い。

〔構造〕東西1間、南北2間の南北棟である。

〔柱穴〕直径0.19 m～0.40 mの円形・楕円形で、深さは最も深いもので0.23 mである。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐・黄褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕直径約0.10～0.20 mの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は西側柱列で南から2.27 m・1.82 mで、総長約4.09 mである。梁行は北妻で3.37 mである。

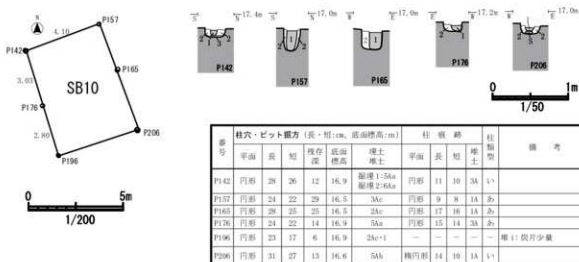
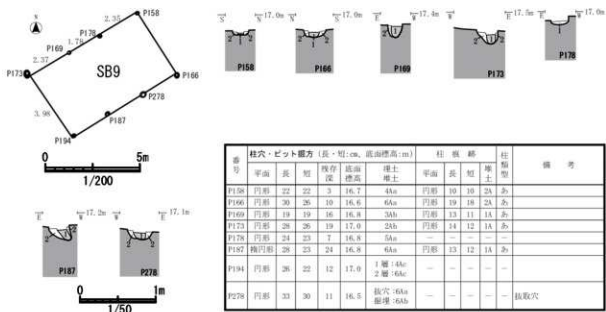
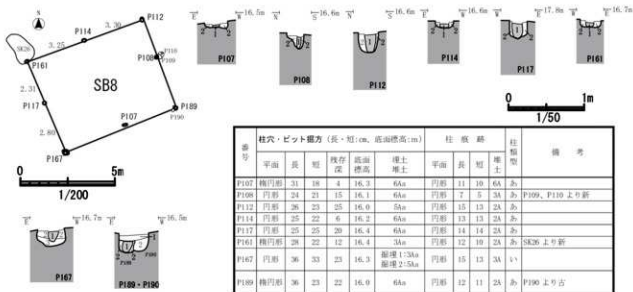
〔出土遺物〕出土していない。

〔SB 12 掘立柱建物跡〕(第6・7図、第14図)

〔位置〕2次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕SB11と範囲が重複するが、柱穴の重複がないため新旧関係は不明。SB12:P262・293がそれぞれP261・294と重複し、これらより新しい。

〔構造〕東西1間、南北2間の南北棟である。

〔柱穴〕直径0.18 m～0.28 mの円形・楕円形で、深さは最も深いもので0.22 mである。埋土は地山ブロック・炭化物片を多く含む暗褐・黄褐色シルトなどである。



第13図 SB8～10掘立柱建物跡



第14図 SB11～12掘立柱建物跡

〔柱痕跡〕 直径約0.10～0.12mの円形である。

〔規模・柱間〕 桁行は西側柱列で南から2.02m・2.15mで、総長約4.17mである。梁行は北妻で3.53mである。

〔出土遺物〕 出土していない。

(3) 土坑

【SK13土坑】(第15図)

〔位置〕 2次調査区(西)〔確認面〕 地山〔重複〕 なし

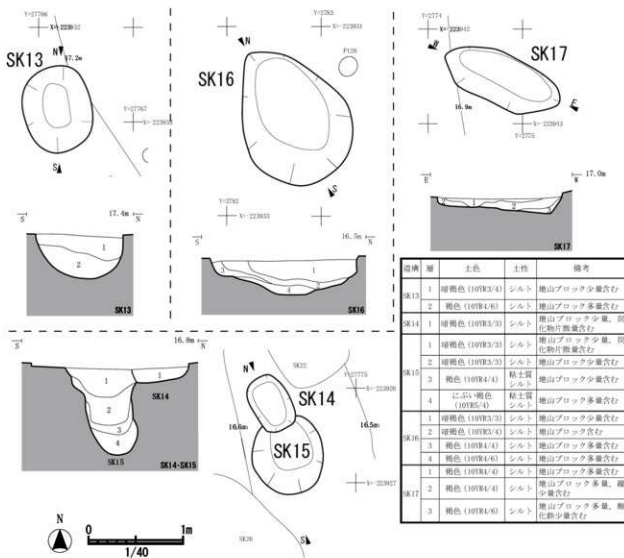
〔形状・規模〕 平面形は長径約0.93m、短径約0.70mの円形で、深さ0.43mを測る。断面はU字形を呈する。

〔堆積土〕 2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SK14土坑】(第15図)

〔位置〕 2次調査区(北東)〔確認面〕 地山〔重複〕 SK15と重複し、これより新しい。



第15図 SK13～17 土坑

〔形状・規模〕 平面形は長径約0.65m、短径約0.35mの楕円形で、深さ0.10mを測る。断面は平坦な底面に対し、両側の壁が湾曲しつつほぼ垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕 1層のみであり、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SK15土坑】(第15図)

〔位置〕 2次調査区(北東)〔確認面〕地山〔重複〕SK14と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕 平面形は長径約0.75m、短径約0.65mの円形で、深さ0.85mを測る。断面は中ほどに段のつく深いU字形を呈する。基本層IV b層(地山)まで掘り込まれており、深さと形状からみて、井戸跡の可能性も考えられる。

〔堆積土〕 4層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルト、地山ブロックを含むにぶい褐色粘土質シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SK 16 土坑】(第 15 図)

〔位置〕2次調査区(東)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.56m、短径約1.20mの南側が膨らむ不整形で、深さ0.41mを測る。断面は中央が深い不整な底面に対し、両側の壁がほぼ垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕4層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 17 土坑】(第 15 図)

〔位置〕2次調査区(南)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.3m、短径約0.58mのやや不整な楕円形で、深さ0.20mを測る。断面は東側に向かって上向きに傾斜する底面に対し、両側の壁が急に立ち上がる。

〔堆積土〕3層に細分され、地山ブロック・酸化鉄を含む褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 18 土坑】(第 16 図)

〔位置〕2次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.4m、短径約0.75mの隅丸長方形で、深さ0.32mを測る。断面は凹凸がある底面に対し、両側の壁が湾曲しつつ立ち上がる。

〔堆積土〕3層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 19 土坑】(第 16 図)

〔位置〕2次調査区(南)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約0.62m、短径約0.50mの円形で、深さ0.13mを測る。断面は平坦な底面に対し、両側の壁が垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを多量に含む褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 20 土坑】(第 16 図)

〔位置〕2次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕P239と重複し、これより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.45m、短径約0.50mの不整形で、深さ0.17mを測る。断面は凹凸のある底面に対し、両側の壁が湾曲しつつほぼ垂直に立ち上がる。

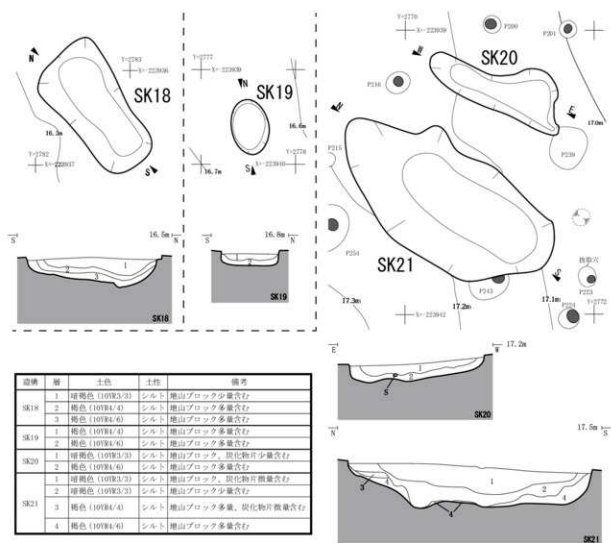
〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 21 土坑】(第 16 図)

〔位置〕2次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕SB11:P243と重複し、これより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約2.6m、短径約1.15mの不整な楕円形で、深さ0.45mを測る。断面



第 16 図 SK 18 ~ 21 土坑

は西側に凹部があるほかは平坦な底面に対し、両側の壁が湾曲しつつほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土] 4層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 22 土坑】(第 17 図)

[位置] 2次調査区(東) [確認面] 地山 [重複] SK31と重複し、これより古い。

[形状・規模] 平面形は長径約 0.95 m、短径約 0.84 m の寸詰まりの楕円形で、深さ 0.12 m を測る。

断面は平坦な底面に対し、南側の壁が垂直に立ち上がる。北側は失われている。

[堆積土] 2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 23 土坑】(第 17 図)

[位置] 2次調査区(南東) [確認面] 地山 [重複] なし

[形状・規模] 平面形は長径約 2.2 m、短径約 1.14 m の不整形で、深さ 0.30 m を測る。断面は平坦

な底面に対し、東側の壁が垂直に、西側の壁が急に立ち上がる不整な台形を呈する。

【堆積土】3層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

【出土遺物】1層から非ロクロ調整の土師器甕26点(195g)、壺1点(30g)が出土している。図示できたものは壺の口縁部破片1点(第19図1)である。口縁下部が肥厚する複合口縁部であり、その上にヨコナデが施される。

【SK 24 土坑】(第17図)

【位置】2次調査区(東) [確認面] 地山 [重複] P308・309と重複し、これより新しい。

【形状・規模】平面形は長径約1.30m、短径約1.20mのやや不整な円形で、深さ0.26mを測る。断面は底面の西側が深い皿状を呈し、東側にやや高く平坦な段が付く。両側の壁は垂直に立ち上がる。

【堆積土】2層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

【出土遺物】1層から非ロクロ調整の土師器壺あるいは甕10点(205g)が出土している。図示できたものは甕の口縁部～頸部破片1点(第19図2)である。頸部～口縁部が短く外反し、胴部は長胴形を呈する。胴部ヘラケズリ、内外面の口縁部はヨコナデで調整されている。

【SK 25 土坑】(第17図)

【位置】2次調査区(西) [確認面] 地山 [重複] SB6:P277と重複し、これより古い。

【形状・規模】平面形は長径約0.80m、短径約0.50mの不整な楕円形で、深さ8.0cmを測る。断面は細かな凹凸のある底面に対し、両側の壁が湾曲しつつ立ち上がる。

【堆積土】1層のみであり、地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

【出土遺物】出土していない。

【SK 26 土坑】(第17図)

【位置】2次調査区(北) [確認面] 地山 [重複] SB8:P161、P304・305と重複し、これより古い。

【形状・規模】平面形は長径約1.70m、短径約1.20mの不整形で、深さ0.10mを測る。断面は凹凸のある底面に対し、南側の壁が急に立ち上がる。北側は失われている。

【堆積土】2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

【出土遺物】出土していない。

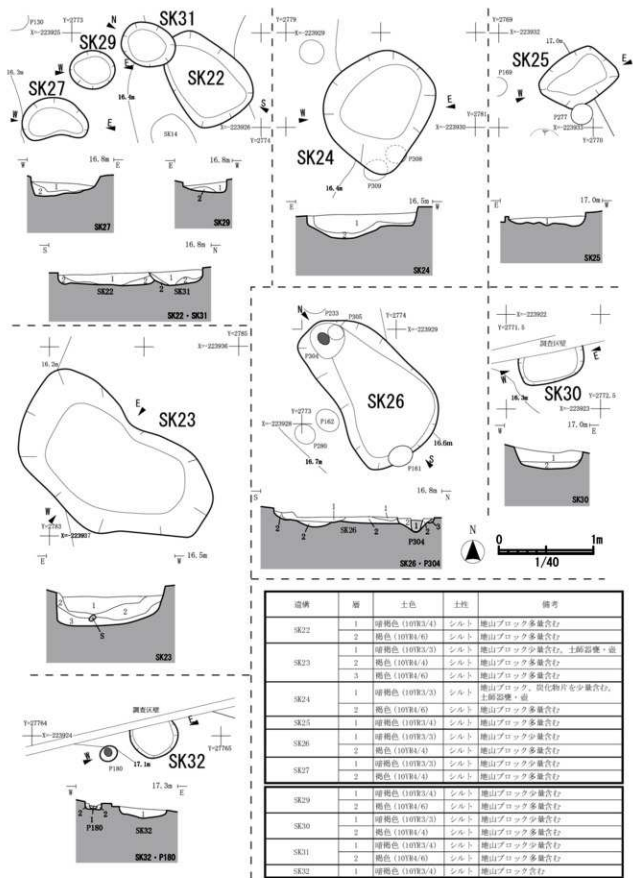
【SK 27 土坑】(第17図)

【位置】2次調査区(北) [確認面] 地山 [重複] なし

【形状・規模】平面形は長径約0.65m、短径約0.4mの不整形で、深さ0.15mを測る。断面は東側へ上向きに傾斜する底面に対し、西側の壁が急に立ち上がり、東側では緩やかに立ち上がる。

【堆積土】2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

【出土遺物】出土していない。



第17図 SK 22 ~ 32土坑

【SK 28 土坑】(第 26・27 図)

〔位置〕2次調査区(北西)〔確認面〕地山〔重複〕SD2と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.50 m、短径約0.70 m以上の楕円形で、深さ8.0 cmを測る。断面は凹凸のある底面に対し、両側の壁が緩やかに立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕1層から非ロクロ調整の土師器甕1点(5g)が出土している。図示できたものはない。

【SK 29 土坑】(第 17 図)

〔位置〕2次調査区(北)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約0.48 m、短径約0.43 mの円形で、深さ約0.13 mを測る。断面は平坦な底面に対し、両側の壁が垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 30 土坑】(第 17 図)

〔位置〕2次調査区(北)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約0.80 m、短径約0.32 m以上の円形あるいは楕円形とみられ、深さ0.13 mを測る。土坑北側は調査区外に延びる。断面は台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 31 土坑】(第 17 図)

〔位置〕2次調査区(北)〔確認面〕地山〔重複〕SK22と重複し、これより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約0.58 m、短径約0.53 mの円形で、深さ約0.14 mを測る。断面は浅いU字形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 32 土坑】(第 17 図)

〔位置〕2次調査区(北西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約0.50 m、短径約0.36 m以上の円形とみられ、深さ9.0 cmを測る。土坑北側は調査区外に延びる。断面は浅い皿状を呈する。

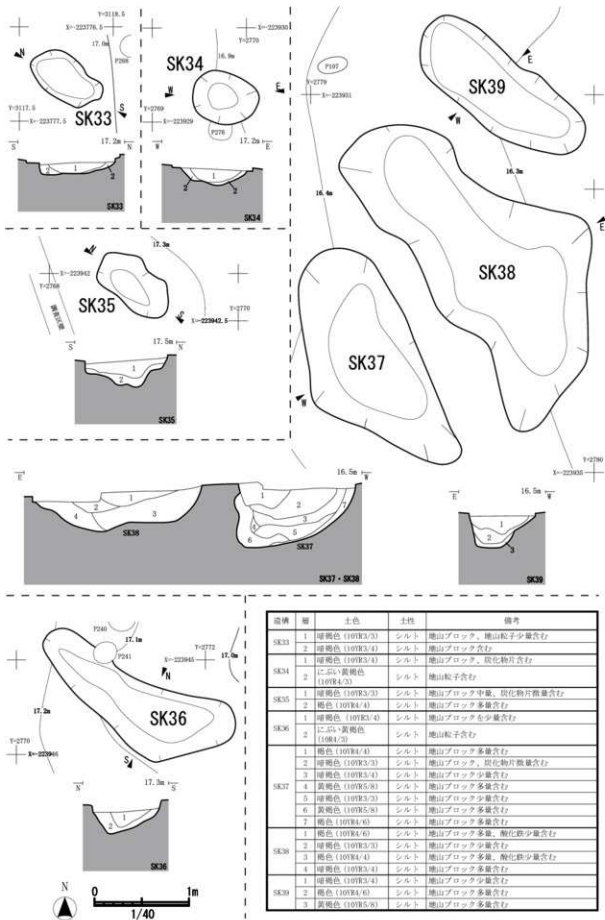
〔堆積土〕1層のみであり、地山ブロックを含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 33 土坑】(第 18 図)

〔位置〕2次調査区(北西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約0.81 m、短径約0.44 mの不整な楕円形で、深さ約0.10 mを測る。



第18図 SK33～39土坑

断面は平坦な底面に対し、南側の壁が垂直に、北側の壁が緩やかに立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロック・地山粒子を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 34 土坑】(第 18 図)

〔位置〕2次調査区(北西)〔確認面〕地山〔重複〕SB6:P276と重複し、これより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約0.70m、短径約0.56mの円形で、深さ0.18mを測る。断面は皿状を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロック・炭化物粒を含む暗褐色シルトや地山粒子を含むにぶい黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕1点(5g)が出土している。図示できたものはない。

【SK 35 土坑】(第 18 図)

〔位置〕2次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約0.84m、短径約0.50mの不整形で、深さ約0.30mを測る。断面は不整形で、底面中央が深く、両側の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 36 土坑】(第 18 図)

〔位置〕2次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕P241と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約2.25m、短径約0.72mの南側に張出す不整形で、深さ0.30mを測る。断面は両側の壁が斜めに立ち上がるV字形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐色シルトや地山粒子を含むにぶい黄褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 37 土坑】(第 18 図)

〔位置〕2次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約2.60m、短径約1.25mのやや不整な楕円形で、深さ約0.70mを測る。断面は東側の壁が外湾気味に立ち上がり、底面～西壁は緩やかに湾曲しつつ立ち上がる。

〔堆積土〕7層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 38 土坑】(第 18 図)

〔位置〕2次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約3.64m、短径約1.78mの不整形で、深さ0.50mを測る。断面形は東側の底面が深い皿状を呈し、西側に平らな段がつく。両側の壁は内湾しつつ緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 4層に細分され、地山ブロック・酸化鉄を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 39 土坑】(第 18 図)

[位置] 2次調査区(西) [確認面] 地山 [重複] なし

[形状・規模] 平面形は長径約 2.50 m、短径約 0.70 m の楕円形で、深さ約 0.32 m を測る。断面は不整な台形を呈する。

[堆積土] 3層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 40 土坑】(第 19 図)

[位置] 4次調査区(北) [確認面] 地山 [重複] P336・417 と重複し、これらより古い。

[形状・規模] 平面形は長径約 0.75 m、短径約 0.50 m の円形で、深さ 0.10 m を測る。断面は平坦な底面に対し、東側の壁が内湾気味に、西側では斜めに立ち上がる不整な台形を呈する。

[堆積土] 2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 41 土坑】(第 24 図)

[位置] 4次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] SD4 と重複し、これより新しい。

[形状・規模] 平面形は長径約 0.65 m、短径約 0.55 m の楕円形で、深さ約 0.20 m を測る。断面は台形を呈する。

[堆積土] 3層に細分され、地山ブロック・炭化物片・焼土などを含む黒褐色シルトや地山ブロックを含む褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 1層から調整不明の土師器坏 2点(10g)、甕 9点(20g)、不明土製品 2点(20g)などが出土している。図示できたものはない。

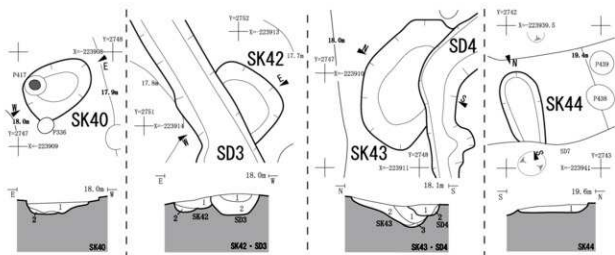
【SK 42 土坑】(第 19 図)

[位置] 4次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] SD3 と重複し、これより古い。

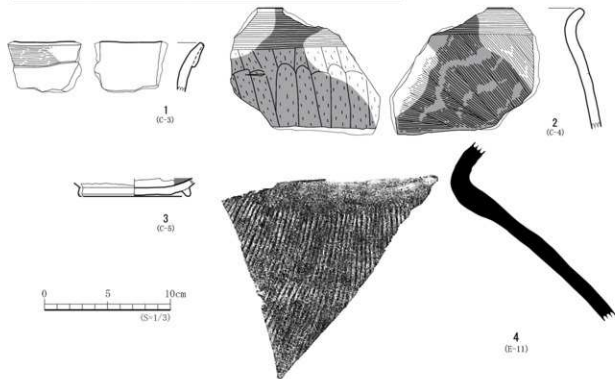
[形状・規模] 平面形は長径約 0.85 m、短径約 0.40 m 以上の円形あるいは隅丸方形とみられ、深さ 0.10 m を測る。断面は東側の壁が内湾しつつ立ち上がるが、西半は失われている。

[堆積土] 2層に細分され、地山ブロック・炭化物片・焼土などを含む黒褐色シルトや地山ブロックを含む褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 1層から調整不明の土師器壺あるいは甕 3点(45g)、ロクロ調整の土師器高台付坏 1点(25g)が出土している。図示できたものは高台坏底部 1点である(第 19 図 3)。ロクロ調整され、底部切り離し後に 1.0 cmほどの高台が外側に開きつつ貼り付けられる。底部は手持ちヘラケズリによって調整され、内面は黒色処理が施される。



遺構	層	土色	土性	備考
SK40	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	礫山ブロッタ少量含む
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	礫山ブロッタ多量含む
SK41	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物片、焼土微塵含む、土師器片・燧石製品
	2	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	礫山ブロッタ、炭化物片、焼土粒子少量含む
	3	褐色 (10YR4/6)	シルト	礫山ブロッタ少量含む
SK42	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	礫山ブロッタ、炭化物片、焼土少量含む、土師器器片・燧石高台付坪
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	礫山ブロッタ多量含む
SK43	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	礫山ブロッタ少量含む
	2	褐色 (10YR4/4)	シルト	礫山ブロッタ多量含む
	3	褐色 (10YR4/6)	シルト	礫山ブロッタ多量含む
SK44	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	礫山ブロッタ少量、炭化物片微量含む、遺器器片



No.	遺構名・層	種類	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・法量→その他の特徴の順に記載】	参照
1	SK23 1層	土師器	甕	口縁部	外面：口縁部ヨコナデ(磨滅)、頸部磨滅。内面：磨滅。色調：外面・にぶい黄褐色(10YR6/4)、内面・褐色(5YR6/6)。法量：残存高3.9cm・器厚0.5~1.0cm、履合口縁	C-3
2	SK24 1層	土師器	甕	口縁部 ~胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ。色調：外面・にぶい褐色(5YR6/4)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR7/4)/灰褐色(7.5YR6/2)。法量：残存高8.7cm・器厚4.9~6.8cm	C-4
3	SK42 1層	土師器	高台付坪	底面	外面：口縁部ナデによる高台張り付付、底面手持ちヘラケズリ。内面：磨滅、黒色地肌。色調：外面・褐色(5YR6/6)、内面・褐色(10YR4/1)。法量：底径9.0cm・残存高1.4cm・器厚0.4~0.6cm	C-5
4	SK44 1層	須恵器	甕	胴部 ~胴部	外面：胴部ヨコナデ、胴部平行タタキ、胴部自然輪付内。内面：胴部ヨコナデ・胴部同心円状当て具痕→ナデ。色調：外面・オリーブ褐色(10YR3/1)/灰黄色(2.5YR6/1)、内面・灰色(10Y4/1)。法量：残存高13.1cm・器厚0.9~1.6cm	E-11

第19図 SK40~44土坑、土坑出土遺物

【SK 43 土坑】(第 19 図)

〔位置〕4次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SD4と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.40m、短径約0.70m以上のやや不整な楕円形とみられ、深さ約0.23mを測る。断面は底面中央が深く、北側の壁が緩やかに立ち上がる。南側は失われている。

〔堆積土〕3層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 44 土坑】(第 19 図)

〔位置〕5次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕SD7と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約0.78m以上、短径約0.42mの楕円形とみられ、深さ0.10mを測る。断面形は平坦な底面に対し、北側の壁が急に立ち上がる。南側は失われている。

〔堆積土〕1層のみであり、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕1層から須恵器甕1点(315g)が出土しており、これを図示した(第19図4)。頸部が外に向かって直角に開く。器面調整は外面に平行タタキが幅5cmほどの単位で器面を巡り、内面には同心円状の当て具痕の上からナデ調整した跡がみられる。

【SK 45 土坑】(第 20 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長軸約0.84m、短軸約0.70mの三方に張出す不整形で、深さ約0.22mを測る。断面は平坦な底面に対し、両側の壁が垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロック・地山粒・焼土などを含む暗褐色シルトや地山粒を含む黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 46 土坑】(第 20 図)

〔位置〕5次調査区(南)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.95m、短径約1.06mの楕円形で、深さ1.24mを測る。断面は平坦な底面に対し、両側の壁がほぼ垂直に立ち上がる。南壁は、一部外側へ張出す。

〔堆積土〕5層に細分され、地山ブロックを含む黒褐・暗褐色シルトなどの人為堆積である。

〔出土遺物〕出土していない。

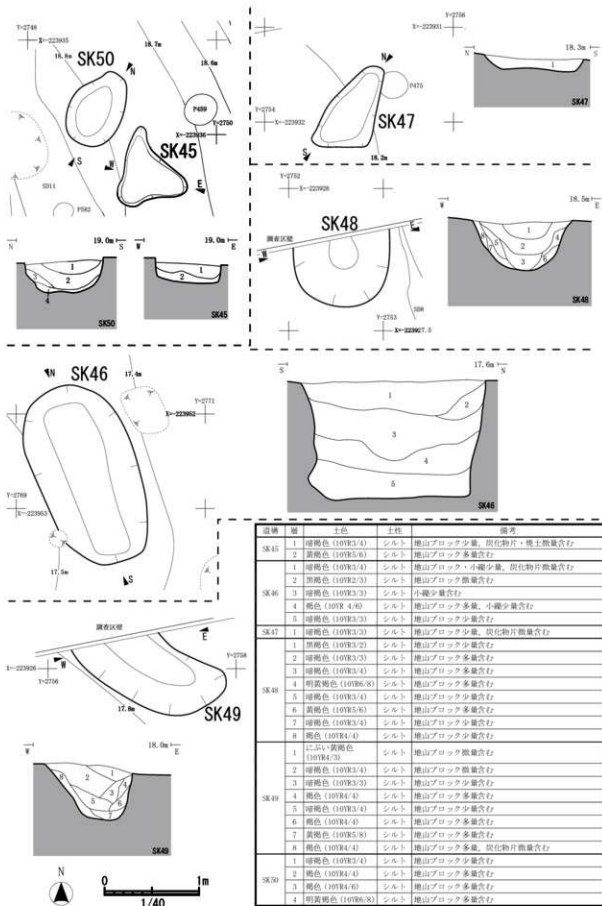
【SK 47 土坑】(第 20 図)

〔位置〕5次調査区(北)〔確認面〕地山〔重複〕P475と重複し、これより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.05m、短径約0.6mのやや南東に張出す不整な楕円形で、深さ約0.12mを測る。断面は浅い台形を呈する。

〔堆積土〕1層のみであり、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない



第 20 図 SK 45 ～ 50 土坑

【SK 48 土坑】(第 20 図)

[位置] 5次調査区(北) [確認面] 地山 [重複] SD6と重複し、これより古い。

[形状・規模] 平面形は長径約1.26 m、短径約1.0 m以上の楕円形あるいは円形とみられ、深さ0.50 mを測る。断面はU字形を呈する。土坑北側は調査区外に延びる。

[堆積土] 8層に細分され、地山ブロックを含む黒褐・暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 49 土坑】(第 20 図)

[位置] 5次調査区(北東) [確認面] 地山 [重複] なし

[形状・規模] 平面形は長径約1.0 m以上、短径約0.93 mの不整形とみられ、深さ約0.58 mを測る。断面は深い台形を呈する。土坑北側は調査区外に延びる。

[堆積土] 8層に細分され、地山ブロックを含む黄褐・暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 50 土坑】(第 20 図)

[位置] 5次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] なし

[形状・規模] 平面形は長径約0.86 m、短径約0.60 mの寸詰まりな楕円形で、深さ0.34 mを測る。断面は浅いU字形を呈する。

[堆積土] 4層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・明黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 51 土坑】(第 21 図)

[位置] 5次調査区(北東) [確認面] 地山 [重複] SD2と重複し、これより古い。

[形状・規模] 平面形は長径約0.94 m、短径約0.75 m以上の円形とみられ、深さ約0.16 mを測る。断面は凹凸のある底面に対し、両側の壁が緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 3層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 52 土坑】(第 21 図)

[位置] 5次調査区(南) [確認面] 地山 [重複] なし

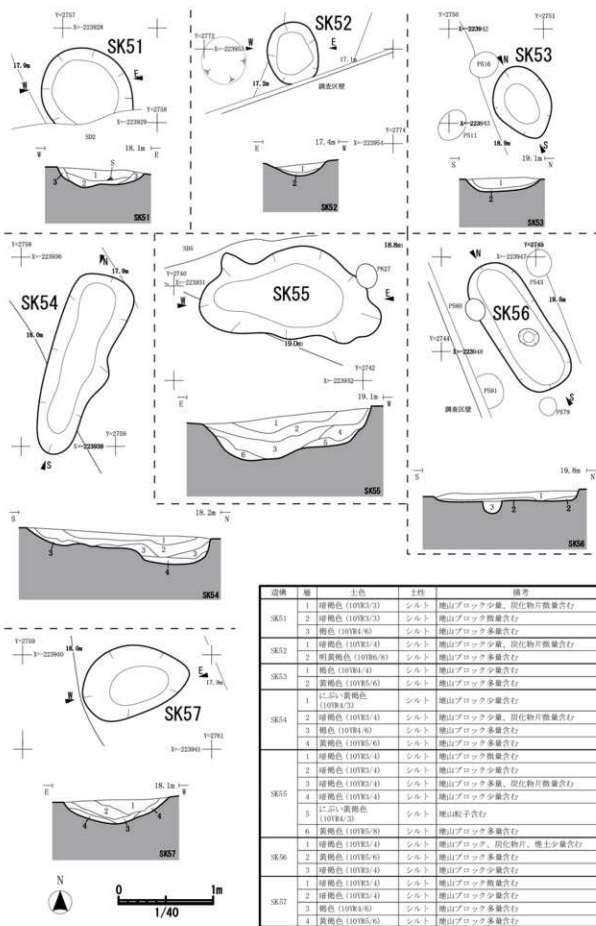
[形状・規模] 平面形は長径約0.70 m以上、短径約0.60 mの円形とみられ、深さ0.12 mを測る。土坑南側は調査区外に延びる。断面は浅い皿状を呈する。

[堆積土] 2層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルトや地山ブロックを含む明黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 出土していない。

【SK 53 土坑】(第 21 図)

[位置] 5次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] なし



第 21 図 SK 51 ～ 57 土坑

〔形状・規模〕平面形は長径約0.80 m、短径約0.60 mの寸詰まりな楕円形で、深さ約0.12 mを測る。

断面は平坦な底面に対し、両側の壁が緩やかに立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SK 54 土坑〕(第 21 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約2.13 m、短径約0.60 mのやや不整な楕円形で、深さ0.30 mを測る。

断面は北側が深い台形を呈し、南側に浅い段がつく。南側の壁は緩やかに立ち上がる。

〔堆積土〕4層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルトや地山ブロックを含む黄褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SK 55 土坑〕(第 21 図)

〔位置〕5次調査区(北西)〔確認面〕地山〔重複〕P627と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.77 m、短径約0.97 mの不整形で、深さ約0.43 mを測る。断面は両側の壁が斜めに立ち上がり、東側が深く、西側に浅い段がつく。

〔堆積土〕6層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SK 56 土坑〕(第 21 図)

〔位置〕5次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕P580と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.22 m、短径約0.75 mの楕円形で、深さ0.25 mを測る。断面は底面が平坦な浅い台形を呈する。中央にビット状の落ち込みを有する。

〔堆積土〕3層に細分され、地山ブロック・炭化物片・焼土を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。3層は中央にあるビット状の落ち込みに堆積する。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SK 57 土坑〕(第 21 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.22 m、短径約0.75 mの楕円形で、深さ約0.25 mを測る。断面は皿状を呈する。

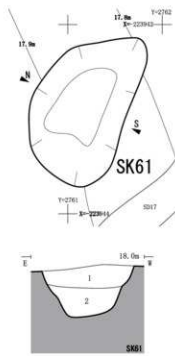
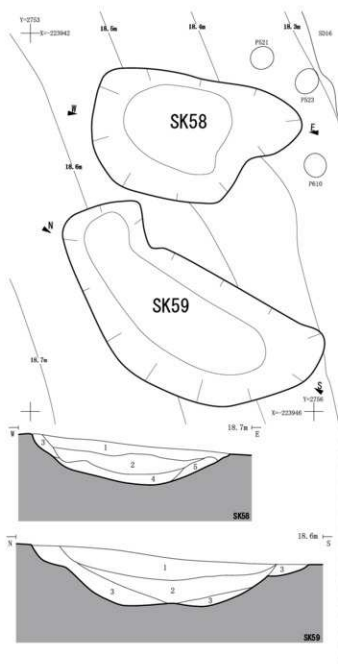
〔堆積土〕4層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

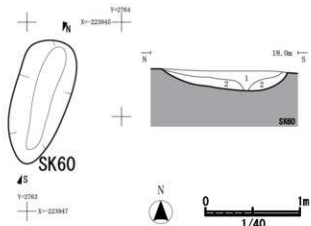
〔SK 58 土坑〕(第 22 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約2.08 m、短径約1.30 mの東側に一部張出した不整形で、深さ0.41



遺構	層	土色	土性	備考
SK58	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片、焼土少量含む
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片、焼土少量含む
	3	褐色 (10YR4/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック多量含む
	5	褐色 (10YR4/4)	シルト	堆山ブロック多量含む
SK59	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片少量含む
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック少量含む
	3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
SK60	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック少量含む
	2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
SK61	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山粒子、炭化物片少量含む
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山粒子、炭化物片少量含む



第22図 SK 58 ~ 61 土坑

mを測る。断面は深い皿状を呈する。

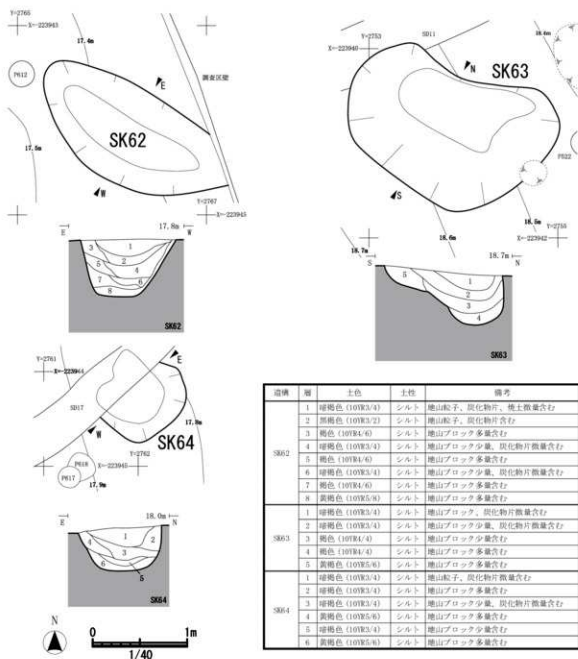
〔堆積土〕5層に細分され、地山ブロック・炭化物片・焼土を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から調整不明の土師器甕2点(5g)が出土している。図示できたものはない。

【SK 59 土坑】(第 22 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約2.94m、短径約1.35mの不整形で、深さ約0.57mを測る。断面は底面に凹凸のある不整形を呈する。



第 23 図 SK 62 ~ 64 土坑

〔堆積土〕3層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 60 土坑】(第 22 図)

〔位置〕5次調査区(南)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.28 m、短径約0.60 mの楕円形で、深さ0.21 mを測る。断面は皿状を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 61 土坑】(第 22 図)

〔位置〕5次調査区(南東)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.56 m以上、短径約0.98 mのやや不整な楕円形で、深さ約0.52 mを測る。断面は深い台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山粒・炭化物片を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 62 土坑】(第 23 図)

〔位置〕5次調査区(南東)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約2.14 m以上、短径約1.0 mの楕円形とみられ、深さ0.60 mを測る。断面は深い台形を呈する。土坑東側は調査区外に延びる。

〔堆積土〕8層に細分され、地山ブロック・炭化物片・焼土を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 63 土坑】(第 23 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SD11と重複し、これより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約2.12 m、短径約1.25 mの不整形で、深さ約0.52 mを測る。断面は北側がU字形に深く、南側に向かって緩やかに浅くなる形状を呈する。

〔堆積土〕5層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 64 土坑】(第 23 図)

〔位置〕5次調査区(南東)〔確認面〕地山〔重複〕SD17と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.0 m、短径約0.87 mの円形で、深さ0.45 mを測る。断面は平坦な底面に対し、両側の壁が湾曲しつつほぼ垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕6層に細分され、地山ブロック・地山粒子・炭化物片を含む暗褐色・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

(4) 溝跡

【SD2 溝跡】(第25～28図)

〔位置〕2次・5次調査区〔確認面〕地山〔重複〕SD8・11・13、P423・433・446・447・471・472・645、SK28と重複し、これより新しい。

〔規模・方向・断面形〕西南西から東北東へ延びており、検出長は約33.77mである。上幅約0.30～0.50m、下幅0.20～0.30m、深さ約0.30mで、断面は浅いU字形を呈する。

〔堆積土〕5層に細分され、地山ブロックを含む褐色シルトや炭化物粒を少量含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土および1層から非ロクロ調整の土師器甕14点(150g)、須恵器甕5点(340g)、確認面から近世陶器2点(10g)などが出土している。図示できたものは1層から出土した須恵器甕胴部破片2点(第28図1・2)である。外面に平行タタキが施され、内面の平行状の当て具痕の上からナデ調整が施されるもの(2)と当て具痕が完全にナデ消されるもの(1)がある。

【SD3 溝跡】(第24・28図)

〔位置〕4次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕P341・342、SK42と重複し、これらより新しい。

〔規模・方向・断面形〕北西から南東へ延びており、検出長は約15.0mである。上幅約0.50m、下幅約0.30m、深さ約0.20mで、断面は平坦な底面に対し、両側の壁が湾曲しつつ立ち上がる。

〔堆積土〕1層のみであり、炭化物片を少量含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

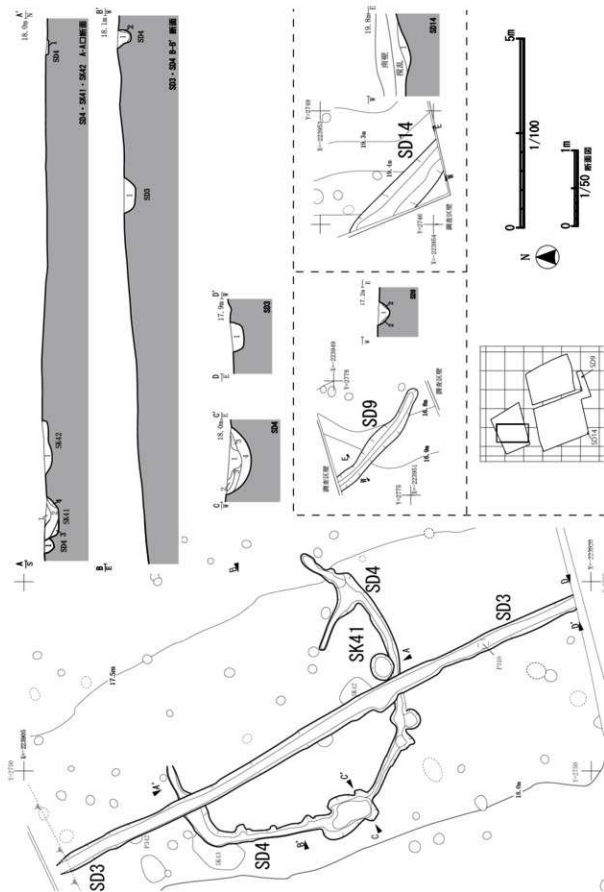
〔出土遺物〕1層から調整不明の土師器坏3点(15g)、甕7点(35g)、須恵器壺2点(225g)、甕3点(925g)、砥石1点(270g)などが出土している。図示できたものは1層から出土した須恵器壺2点(第28図3・4)、甕3点(5・6・7)、砥石1点(8)である。須恵器壺の体部資料(4)は外面ヘラケズリ、内面ハケメ調整が施される。須恵器甕のうち(7)は大型の甕胴部資料であり、外面格子状タタキ、内面は平行状の当て具痕の上からナデ調整が施される。砥石は使用度の弱い砥石面を2面もち、自然礫を素材としている。

【SD4 溝跡】(第24・29図)

〔位置〕4次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SK41と重複し、これより古い。SK43と重複し、これらより新しい。

〔規模・方向・断面形〕北東に開く円弧状を呈し、検出長は約14.2mである。上幅約0.3～0.6m、下幅約0.15～0.20m、深さ約0.18mで、断面は半円形を呈する。

〔堆積土〕4層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色・褐色シルトなどの自然堆積土である。



第24圖 SD3、4、9、14溝跡 SK41土坑

[出土遺物] 1層から土師器器台1点(90g)、非ロクロ調整の土師器甕2点(220g)、調整不明の甕あるいは壺13点(70g)、非ロクロ調整の壺2点(160g)が出土している。図示できたものは1層から出土した器台脚部1点(第29図1)、壺3点(2・4)、甕1点(3・5)である。

土師器はすべて非ロクロ調整である。土師器器台脚部(1)は緩やかに裾の開く形状で、三方向に透かし孔が設けられている。甕は小型で球胴形と推測される底部資料(3)と、外湾し口唇部に連続した刻み目が施される口縁部資料(5)がある。底部外面にヘラケズリ調整、底面に木葉痕が残り、内面はヘラナデ調整が施される。土師器壺は小型で頸部が短くやや外に開くもの(2)と複合口縁を呈するもの(4)がある。前者は底部外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデ調整が施される。後者は折り返した段をヨコナデによって接着することで口縁部を肥厚させている。

【SD5 溝跡】(第25・26図)

[位置] 5次調査区(北西) [確認面] 地山 [重複] SD6と重複し、これより新しい。

[規模・方向・断面形] 西南西から東北東へ延びており、検出長は約9.30mである。幅約0.80m、深さ約0.80m以上で、断面形の全体は不明だが、南側の壁は直線的に傾斜しつつ立ち上がる。

[堆積土] 3層に細分され、炭化物片を多量に含む暗褐色シルトや地山ブロックを含む褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 堆積土から調整不明の土師器甕3点(10g)、須恵器瓶類1点(40g)が出土している。図示できたものはない。

【SD6 溝跡】(第25・26・29図)

[位置] 5次調査区(北西) [確認面] 地山 [重複] SD5と重複し、これより古い。P455、SD8、SK48と重複し、これらより新しい。

[規模・方向・断面形] 西南西から東北東へ延びており、検出長は約18.20mである。上幅約0.80～1.0m、下幅約0.40m、深さ約0.30mで、断面は半円形を呈し、南側に浅く平坦な段がつく。

[堆積土] 4層に細分され、地山ブロック・地山粒子を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 堆積土から須恵器甕3点(100g)・瓶類1点(90g)などが出土している。図示できたものは須恵器甕1点(第29図6)、瓶類1点(7)である。瓶類底部資料(7)は外面を回転ヘラケズリ調整され、底部に高台が付く。

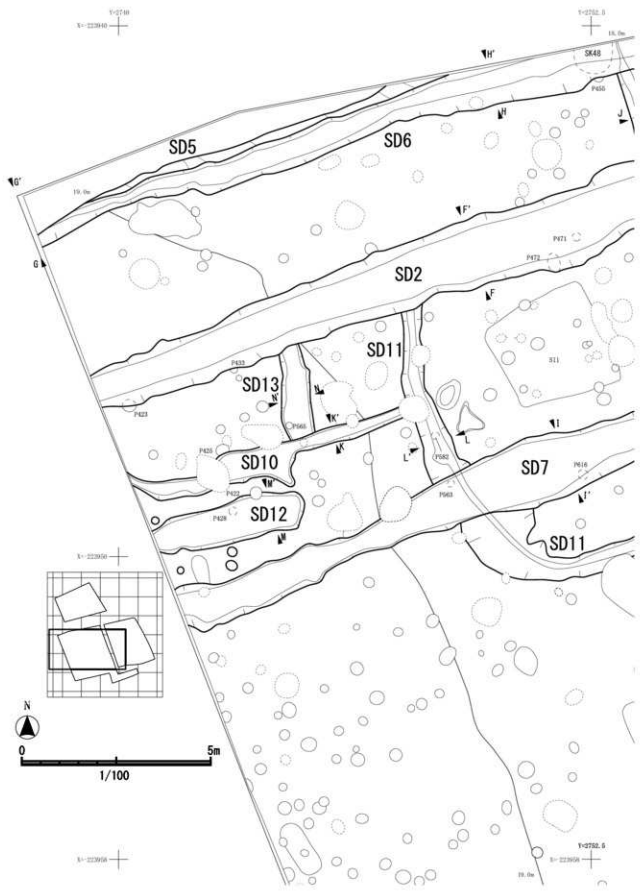
【SD7 溝跡】(第25・26図)

[位置] 5次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] SD11、SK44、P563・616と重複し、これらより新しい。

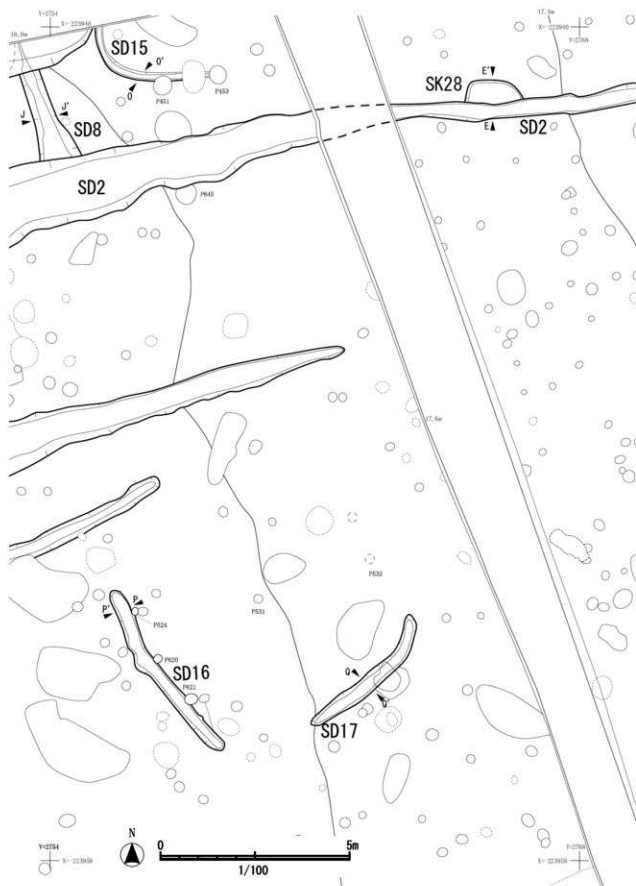
[規模・方向・断面形] 西南西から東北東へ延びており、検出長は約21.20mである。上幅約0.80～1.70m、下幅約0.50～1.50m、深さ約0.25mで、断面は隅の丸い台形を呈し、南側に浅い段がつく。

[堆積土] 4層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

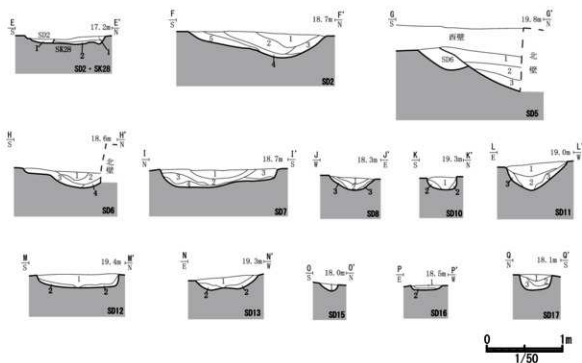
[出土遺物] 堆積土から調整不明の土師器坏1点(5g)、甕1点(10g)、須恵器甕3点(20g)が出土



第25図 SD 2, 5~17溝跡(1)



第 26 図 SD 2, 5 ~ 17 清跡 (2)



遺構	層	土色	土性	備考
SD2	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック少量、炭化物片多量含む。須恵器燼
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック少量含む
	3	褐色 (10YR4/4)	シルト	堆山ブロック多量含む
	4	褐色 (10YR4/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
	5	明黄褐色 (10YR6/8)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD3	1	茶褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック、炭化物片微量含む。土師器灰・須恵器燼
SD4	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック、炭化物片少量含む。土師器燼・器台痕
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
	3	褐色 (10YR4/4)	シルト	暗褐色ブロック少量含む
	4	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物片少量含む
SD5	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物片微量含む
	2	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山粒子微量含む
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	堆山ブロック少量含む
SD6	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック微量含む
	2	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック少量含む
	3	褐色 (10YR4/4)	シルト	堆山ブロック多量含む
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山粒子少量含む
SD7	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック少量、炭化物片微量含む
	2	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック少量含む
	3	褐色 (10YR4/4)	シルト	堆山ブロック多量含む
	4	明黄褐色 (10YR6/8)	シルト	堆山ブロック多量含む
SK28	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	堆山ブロック少量含む。土師器燼・器
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	堆山ブロック多量含む

遺構	層	土色	土性	備考
SD8	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック微量含む
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック少量含む。土師器燼
	3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD9	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック少量含む。土師器燼・器台・砥
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD10	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片微量含む。土師器燼、石器剥片
	2	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD11	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック少量含む
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	堆山ブロック少量含む。土師器燼
	3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD12	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック少量含む
	2	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD13	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片少量含む
	2	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD14	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片少量含む
	2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD15	1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山ブロック少量含む
	2	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD16	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片少量含む
	2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	堆山ブロック多量含む
SD17	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片少量含む
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山ブロック、炭化物片少量含む。土師器燼
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	堆山粒子多量含む

第 27 図 SD 2～17 溝跡、SK 28 断面

している。図示できたものはない。

【SD 8 溝跡】(第 25・26 図)

[位置] 5次調査区(北東) [確認面] 地山 [重複] SD2・6と重複し、これらより古い。

[規模・方向・断面形] 北北西から南南東へ延びており、検出長は約3.20mである。上幅約0.90m、下幅約0.50m、深さ約0.15mで、断面はU字形を呈する。

[堆積土] 3層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 2層から非ロクロ調整の土師器甕10点(50g)が出土している。図示できたものはない。

【SD 9 溝跡】(第 24・29 図)

[位置] 5次調査区(南西) [確認面] 地山 [重複] なし

[規模・方向・断面形] 北西から南東へ延びており、検出長は約3.30mである。上幅約0.40m、下幅約0.20m、深さ約0.15mで、断面はU字形を呈する。

[堆積土] 2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 1層から非ロクロ調整の土師器壺1点(510g)、甕あるいは壺74点(535g)、高坏1点(60g)が出土している。図示できたものは1層から出土した土師器壺2点(第29図8・10)、甕1点(9)、高坏脚部1点(11)である。

土師器はすべて非ロクロ調整である。壺(8)は球状の体部から頸部が「く」の字に開き、口縁部は複合口縁を呈する。器面調整は体部から底部の外表面がヘラケズリ、頸部にハケメが施される。甕(9)は外側にまっすぐ開く口縁部をもつ。調整は磨滅のため確認できない。高坏脚部(11)は緩やかに裾の開く形状を呈し、三方向に透かし孔が設けられている。外表面はヘラミガキ、内表面はナゲ調整される。坏部底面はヘラミガキ調整である。内外表面の全体に赤彩が施される。

【SD 10 溝跡】(第 25・26 図)

[位置] 5次調査区(西) [確認面] 地山 [重複] P425と重複し、これより新しい。SD11とは重複すると思われるが、間に攪乱があるため関係は不明である。

[規模・方向・断面形] 西南西から東北東へ延びており、検出長は約7.30mである。上幅約0.50～0.70m、下幅約0.30～0.60m、深さ約0.17mで、断面は両側の壁が緩やかに立ち上がる台形を呈する。

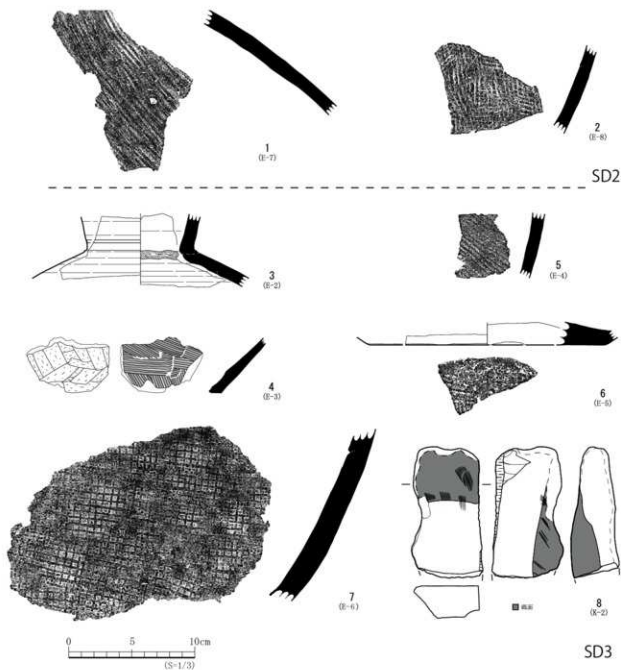
[堆積土] 2層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土遺物] 1層から非ロクロ調整の土師器甕10点(75g)、頁岩製の剥片1点(5.6g)が出土している。図示できたものはない。

【SD 11 溝跡】(第 25・26・30 図)

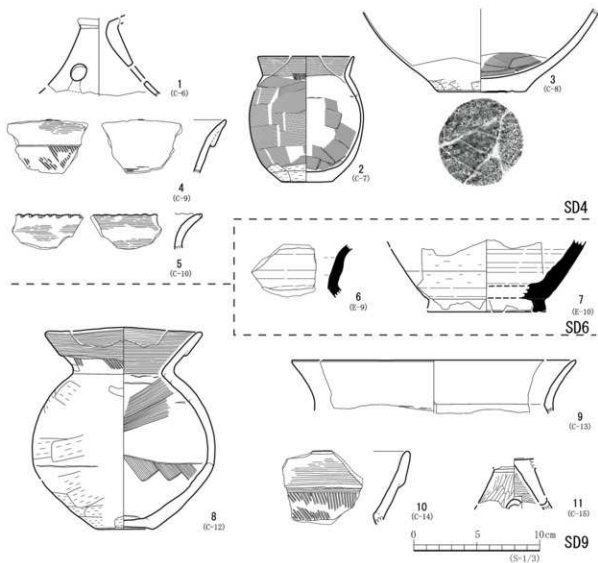
[位置] 5次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] SD2・7、SK63と重複し、これらより古い。P582と重複し、これより新しい。

[規模・方向・断面形] 北東に開く円弧状を呈し、検出長は約14.10mである。上幅約0.60～1.70m、下幅約0.20～0.30m、深さ約0.35mで、断面は両側の壁が内湾ぎみのV字形を呈する。



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SD2 1層	瓦器器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：ナデ、色調：外面・灰色(1075/1)、内面・灰色(94/1)、法量：残存高8.3cm・器厚0.9～1.1cm	E-7
2	SD2 1層	瓦器器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具痕→ナデ、色調：外面・緑灰色(93/1)、内面・灰色(916/1)、法量：残存高7.1cm・器厚0.8～0.9cm	E-8
3	SD3 1層	瓦器器	甕	胴部	外面：胴部ロクロナデ→沈線、体部ロクロナデ→自然輪付着、内面：ナゲ→ロクロナデ、色調：外面・灰色(1076/1)/灰白色(1077/2)、内面・灰白色(97/1)、法量：残存高5.8cm・器厚0.8～1.1cm	E-2
4	SD3 1層	瓦器器	甕	体部	外面：ヘラケズリ、内面：ハケメ、色調：外面・灰色(95/1)、内面・灰色(1074/1)、法量：残存高4.4cm・器厚0.4～0.8cm	E-3
5	SD3 1層	瓦器器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具痕→ナデ、色調：外面・緑灰色(93/1)、内面・灰色(915/1)、法量：残存高5.1cm・器厚0.8～0.9cm	E-4
6	SD3 1層	瓦器器	甕	胴部	外面：胴部ナデ→底部平行タタキ→ナデ、内面：ナデ、色調：外面・灰色(95/1)、内面・灰色(7,936/1)、法量：残存高1.8cm・直径(18.6)cm、内面にタール状の物質(漆?)付着	E-5
7	SD3 1層	瓦器器	甕	胴部	外面：輪子状タタキ→自然輪付着、内面：当て具痕→ナデ、色調：外面・緑赤灰色(2,5393/1)/赤灰色(2,9393/1)、内面・赤褐色(10785/4)、法量：残存高13.7cm・器厚1.5～1.7cm	E-6
8	SD3 1層	石器	砥石	—	垂直線を素材とし、平滑な砥面2面からなる、法量：長さ9.6cm・幅4.7cm・厚さ3.2cm	E-2

第28図 SD2～3清跡 出土遺物



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SD4 1層	土師器	器台	脚部 ～底部	外面：ナデ(磨減)、内面：磨減。色調：外面・明褐色(10YR5/6)、内面・褐色(10YR6/6)。法量：残存高6.2cm・器厚0.4～0.8cm。3方向の透かし孔。	C-6
2	SD4 1層	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：底部ナデ・体部下平～底部ヘラケズリ・体部ナデ。胴部は曲面上ハケメ→胴部口縁部ヨコナデ。内面：ヘラナデ、輪積痕。色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)。法量：底径3.6cm・器高9.9cm・器厚0.5～0.9cm。	C-7
3	SD4 1層	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：胴部下平ヘラケズリ・底部本葉版。内面：ヘラナデ。色調：内外面・褐色(10YR6/6)。法量：底径6.7cm・残存高6.2cm・器厚0.9～1.1cm。底部タール状物質(漆?)付着。	C-8
4	SD4 1層	土師器	甕	口縁部	外面：口縁部ヨコナデ(磨減)・胴部ハケメ。内面：口縁部ナデ(磨減)・胴部ハケメ。色調：内外面・名津褐色(5YR5/6)。法量：残存高4.2cm・器厚0.3～0.8cm。複合口縁。	C-9
5	SD4 1層	土師器	甕	口縁部	外面：口唇部斜み目・口縁部ヨコナデ(磨減)。内面：口縁部ヨコナデ(磨減)。色調：外面・明赤褐色(10YR6/6)、内面・にぶい黄褐色(10YR6/4)。法量：残存高2.8cm・器厚0.4～0.6cm。口唇部斜み目。	C-10
6	SD6 埴埴土	埴埴器	甕	胴部	外面：ロケロナデ。内面：ロケロナデ。色調：外面・灰色(5N7)。内面・灰色(10Y4/3)。法量：残存高4.2cm・器厚0.5～0.8cm。外面胴部・内面口縁部に自然粘着。	E-9
7	SD6 埴埴土	埴埴器	甕	体部	外面：体部回転ヘラケズリ→底部ロケロナデによる高右面を付け。内面：ロケロナデ。色調：外面・灰色(10Y5/1)、内面・灰色(5N7)。法量：底径19.4cm・残存高5.7cm・器厚0.8～1.3cm。	E-10
8	SD9 1層	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ・体部・底部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ・体部ヘラナデ。色調：外面・黄褐色(10Y5/8)、内面・明褐色(7.5YR5/0)。法量：口径12.2cm、底径4.5cm、器高16.0cm・器厚0.6～0.8cm。全体に器面磨減。	C-12
9	SD9 1層	土師器	甕	口縁部	外面：磨減。内面：口唇部ヨコナデ(磨減)。色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい褐色(7.5YR6/4)。法量：口径12.2cm、残存高4.2cm・器厚0.3～0.7cm。	C-13
10	SD9 1層	土師器	甕	口縁部	外面：口唇部ヨコナデ・胴部ハケメ。内面：磨減。色調：内外面・明褐色(7.5YR5/6)。法量：残存高5.8cm・器厚0.5～0.9cm。複合口縁。	C-14
11	SD9 1層	土師器	高坏	脚部	外面：ヘラミガキ。内面：ナデ。有部内面ヘラミガキ。色調：外面・明赤褐色(10YR5/6)、内面・褐色(10YR6/6)。法量：残存高24.9cm・器厚0.6～1.1cm。3方向の透かし孔。垂直み目。	C-15

第29図 SD4・6・9溝跡 出土遺物

〔堆積土〕3層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕91点(790g)、須恵器甕1点(35g)、2層から非ロクロ調整の土師器甕103点(810g)が出土している。図示できたものは2層から出土した土師器甕2点(第30図1・2)である。

土師器はすべて非ロクロ調整である。土師器甕(1・2)は同一個体であり、やや外反しながら「く」の字に立ち上がる口縁部をもち、その口唇部には刻み目が施される。底部外面はヘラケズリ調整、胴部から頸部までは内外面はナデ調整が施される。頸部から口縁部の内外面はヨコナデによって調整される。底部には木葉痕が残る。

【SD 12 溝跡】(第 25・26 図)

〔位置〕5次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕P428と重複し、これより新しい。P422と重複し、これより古い。

〔規模・方向・断面形〕南西から北東へ延びており、検出長は約2.40mである。上幅約1.20m、下幅約1.0m、深さ約0.17mで、断面は平坦な底面に対し、両側の壁がほぼ垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕8点(25g)が出土している。図示できたものはない。

【SD 13 溝跡】(第 25・26 図)

〔位置〕5次調査区(西)〔確認面〕地山〔重複〕SD2・10、P565と重複し、これらより古い。

〔規模・方向・断面形〕南から北へ延びており、検出長は約2.80mである。上幅約0.80m、下幅約0.50m、深さ約0.20mで、断面は底面中央がやや高い不整形な台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕2点(15g)が出土している。図示できたものはない。

【SD 14 溝跡】(第 24 図)

〔位置〕5次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔規模・方向・断面形〕北西から南東へ延びており、検出長は約3.90mである。上幅約0.85m、下幅約0.50m、深さ約0.15mで、断面は浅い皿状を呈する。

〔堆積土〕1層のみであり、地山ブロックを微量に含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SD 15 溝跡】(第 25・26 図)

〔位置〕5次調査区(北東)〔確認面〕地山〔重複〕P451・453と重複し、これらより古い。

〔規模・方向・断面形〕北東に開く円弧状を呈し、検出長は約5.10mである。上幅約0.25m、下幅約0.20m、深さ約0.10mで、断面はU字形を呈する。

〔堆積土〕1層のみであり、地山ブロックを含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SD 16 溝跡】(第 25・26 図)

[位置] 5次調査区 (中央) [確認面] 地山 [重複] P524・620・621 と重複し、これより古い。

[規模・方向・断面形] 北西から南東へ延びており、検出長は約 3.80 m である。上幅約 0.55 m、下幅約 0.40 m、深さ約 6.0 cm で、断面は浅い台形を呈する。

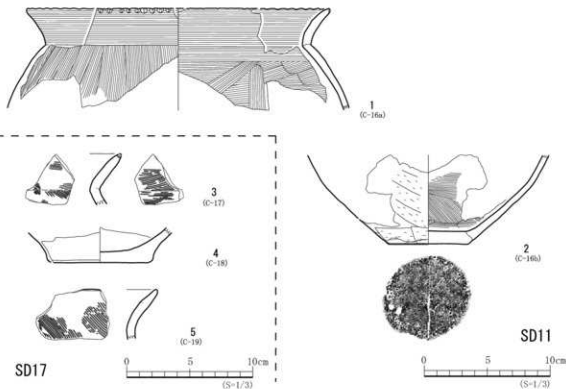
[堆積土] 2層に細分され、地山ブロックや炭化物片を含む暗褐色・黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

[出土物] 堆積土から非ロクロ調整の土師器甕 2 点 (25g) が出土している。図示できたものはない。

【SD 17 溝跡】(第 25・26・30 図)

[位置] 5次調査区 (南東) [確認面] 地山 [重複] SK64 と重複し、これより新しい。

[規模・方向・断面形] 南西から北東へ延びており、検出長は約 3.60 m である。上幅約 0.50 m、下幅約 0.42 m、深さ約 0.20 m で、断面は台形を呈する。



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SD11 2層	土師器	甕	口縁部	外面:口唇部刻み目・頸部ココナデ。 内面:口唇部~頸部ココナデ・体部ナデ。色調:外面・にぶい赤褐色(土5YR7/4)、内面・明赤褐色(土5YR5/4)。法量:口径(24.0)cm・残存高8.1cm・器厚0.5~0.7cm。口唇部刻み目。外面口縁部に僅附着。C-16bと同一個体	C-16a
2	SD11 2層	土師器	甕	胴部 ~底面	外面:ヘラケズリ(磨滅)。底部木炭灰。内面:ナデ(磨滅)。色調:外面・赤褐色(土5YR4/3)、内面・暗褐色(土5YR3/3)。残存高7.2cm・器厚0.4~0.9cm。内面底部に僅附着。C-16aと同一個体	C-16b
3	SD17 堆積土	土師器	甕	胴部	外面:ハケメ。内面:ハケメ。色調:内外面・にぶい褐色(土5YR5/3)。法量:残存高8.1cm・器厚0.3~0.8cm	C-17
4	SD17 堆積土	土師器	甕	底面	外面:磨滅。内面:磨滅。色調:外面・暗褐色(土5YR3/2)、内面・明褐色(土5YR5/4)。法量:残存高2.8cm・器厚0.5~1.5cm	C-18
5	SD17 2層	土師器	甕	胴部	外面:口唇部磨滅・口縁部ハケメ。内面:ナデ・ハケメ。色調:外面・にぶい褐色(土5YR6/4)、内面・にぶい褐色(土5YR7/4)。法量:器厚0.4~0.7cm	C-19

第 30 図 SD 11-17 溝跡 出土遺物

〔堆積土〕3層に細分され、地山ブロックや炭化物片を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕 45 点 (530g)、2層から非ロクロ調整の土師器甕 80 点 (390g) が出土している。図示できたものは土師器甕 3 点 (第 30 図 3～5) である。

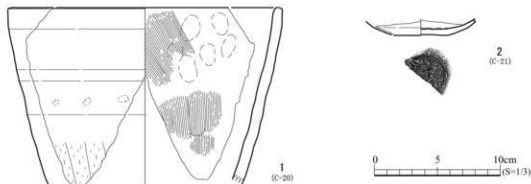
土師器はすべて非ロクロ調整である。甕の口縁部資料 (3・5) は「く」の字に開き、内外面がハケメ調整される。底部資料 (4) は平底で、内外面ともに磨滅しており調整を確認できない。

(5) 柱穴・ピット (第 3 表、第 31～37 図)

調査区全域において、柱穴・ピット 553 基を確認した。確認面は基本層Ⅳ層 (地山) である。それぞれの規模、柱痕跡の有無、堆積土・埋土、重複関係などの特徴について第 3 表に示す。一部に柱痕跡を確認できるものもあり、これらは概ね掘り方は径 0.20～0.30 m の円形・楕円形を呈し、地山ブロックを多く含む褐・黄褐色シルトなどで人為的に埋め戻されている。柱痕跡は径 10 cm 程度の円形で、堆積土は自然堆積の黒褐・暗褐色シルトなどである。

これらについては、本来は掘立建物や柱列などを構成していたと考えられるが、掘立柱建物跡として認識できたのは先述の S B 4～12 掘立柱建物跡 9 棟のみである。

出土遺物は、非ロクロ調整の土師器甕が P159 確認面から 2 点 (5g)、P229 堆積土から 1 点 (5g)、P443 堆積土から 1 点 (5g)、P607 堆積土から 1 点 (5g)、P531 堆積土から 1 点 (15g)、ロクロ調整の土師器甕が P437 堆積土から 1 点 (5g)、調整不明の土師器甕が P323 柱痕跡から 1 点 (10g)、P428 堆積土から 1 点 (5g)、P476 堆積土から 1 点 (5g)、P597 堆積土から 4 点 (5g)、P610 堆積土から 1 点 (5g)、P623 堆積土から 1 点 (15g)、ロクロ調整の土師器甕が P597 堆積土から 1 点 (150g)、須恵器甕が P594 堆積土から 1 点 (25g)、かわらけ皿が P509 堆積土から 1 点 (5g) 出土している。



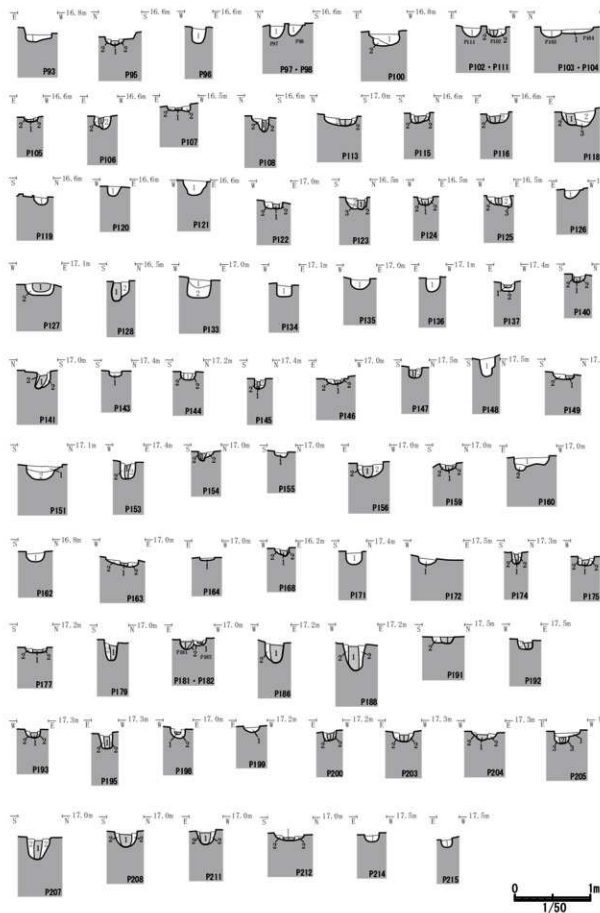
No.	遺構名・層	種別	部種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	P97 1層	土師器	甕	口縁 ～ 体部	外面：口縁部～体部ロクロナデ・体部下半ヘラケズリ。内面：口縁部～体部上半オサエーナデ・体部下半サデ。色調：外面→にぶい黄褐色 (0.03R7.4)。内面→にぶい褐色 (1.0YR5/4)。法量：口径 20.0 cm・残存高 14.0 cm・器厚 0.6～0.9 cm	C-20
2	5次調査区 表土	かわらけ	皿	体部 ～ 底部	外面：ロクロナデ・底部回転車切。内面：ロクロナデ。色調：内外面・明赤褐色 (3.0R5/8)。法量：底径 14.2 cm・残存高 1.3 cm・器厚 0.3～0.5 cm。ロクロ回転器周リ	C-21

第 31 図 柱穴・ピット・遺構外出土遺物

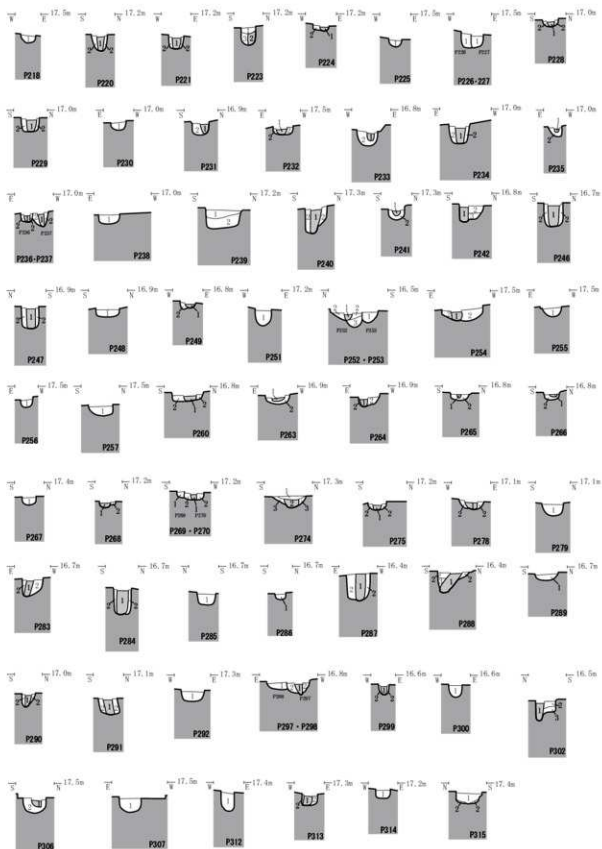
図示したのは P597 出土の土師器甕 1 点 (第 31 図 1) である。内外面ともにロクロ調整され、口縁部から体部まで直線的に落ちる形状を呈する。口唇部断面が四角く、平坦な面が作り出される。

【遺構外の出土遺物】

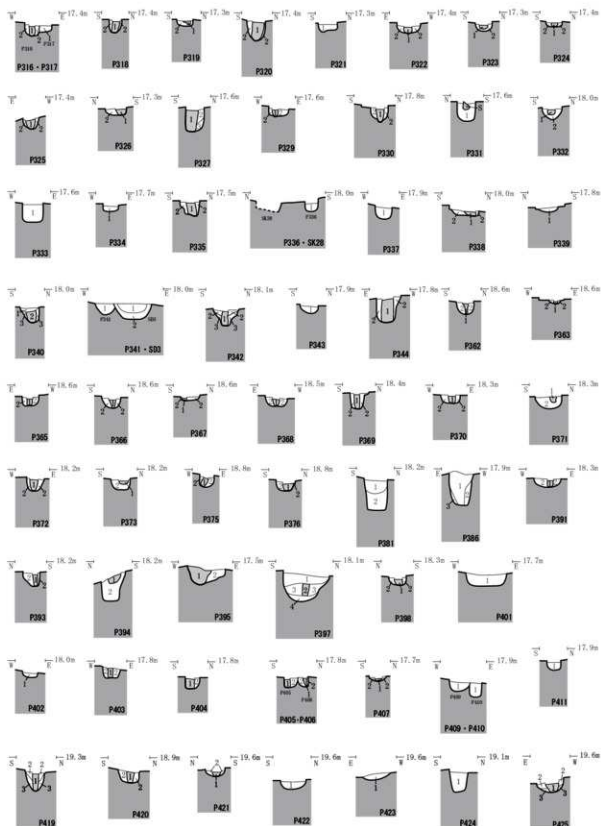
遺構の確認作業時に土師器甕 94 点 (400 g)、高坏 3 点 (25g)、表土・耕作土および攪乱中から土師器坏 3 点 (20g)、甕 17 点 (85g)、高台付坏 1 点 (15g)、高坏 1 点 (40g)、壺 1 点 (5g)、須恵器壺 1 点 (5g)、甕 8 点 (185g)、かわらけ皿 1 点 (10g)、近世陶器 1 点 (5g) が出土している。図示したのはかわらけ 1 点 (第 31 図 2) である。ロクロ調整されたかわらけの皿で、底部に回転糸切痕が残る。



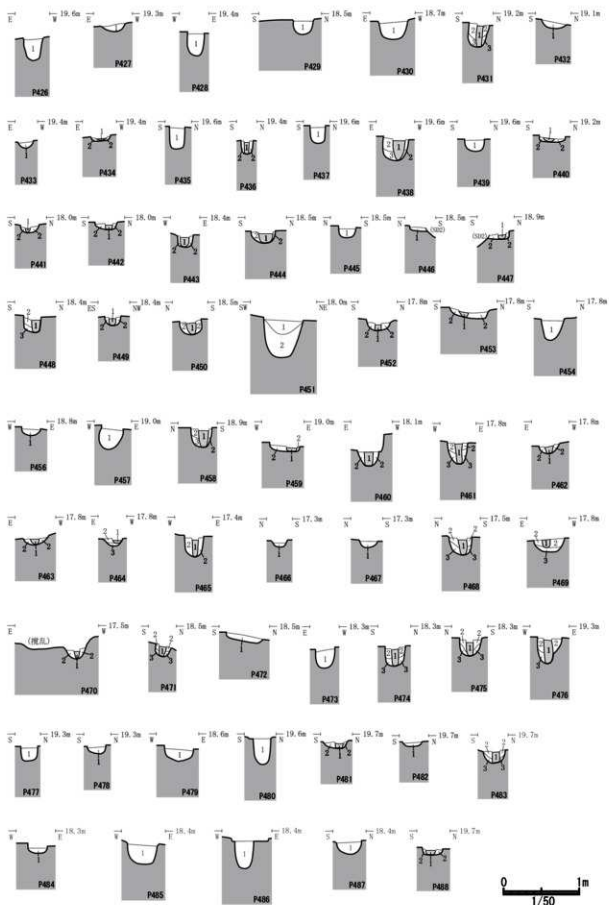
第32図 柱穴・ピット 断面図(1)



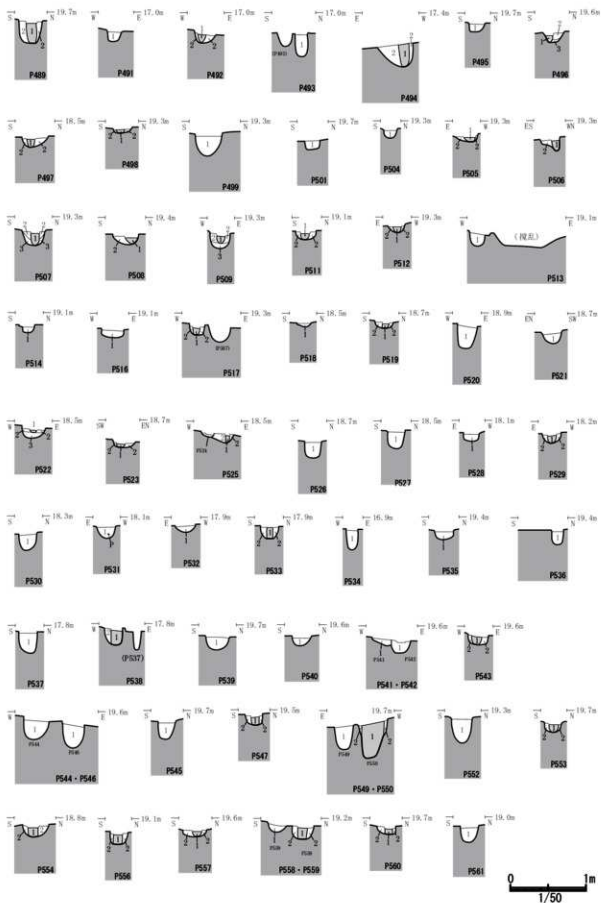
第33図 柱穴・ピット 断面図(2)



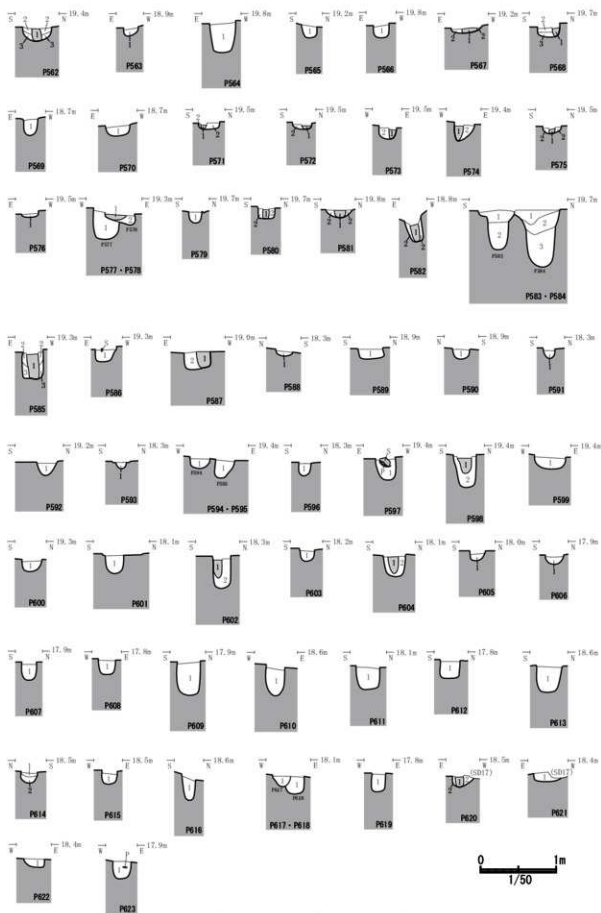
第34図 柱穴・ピット 断面図(3)



第35図 柱穴・ピット 断面図(4)



第36図 柱穴・ピット 断面図(5)



第 37 図 柱穴・ピット 断面図 (6)

6 総括

(1) 遺物の特徴と年代

出土した遺物は、弥生土器、土製品、土師器、須恵器、かわらけ、近世陶器、石器である。出土した土器類の総数は723点(約8,485g)で、内訳は弥生土器1点(約5g)、土師器686点(約6,115g)、須恵器31点(約2,335g)、かわらけ2点(約15g)、近世陶器3点(約15g)である。土師器は古墳時代前期と推定されるものと、古代(奈良～平安時代)と推定されるものに分かれる。ほかに砥石1点(270g)と剥片2点(6.7g)、土製品2点(20g)が出土している。図示する遺物の抽出に際しては、遺構出土の遺物を優先し、残存状態の良いもの、文様や器形に分かるものを抽出した。

出土状況としては、小破片が多く、遺構毎のまとまりは希薄で帰属年代等の厳密な検討は困難である。土器組成を示す資料はないことから、分類等を行わず、以下では各資料の特徴と近隣での類例などをもとにおおよその年代的位置づけを試みることにする。

①弥生土器

2次調査区南側に位置するP247の堆積土から小破片が1点出土しているが、図示していない。器面には平行沈線が施される。

②土師器

20点を図示した。器種は坏・高坏・器台・高台付坏・壺・甔・甕・皿であり、便宜上かわらけもここに含む。非ロクロ調整のものとロクロ調整のものに分かれる。

【非ロクロ調整】高坏・器台・壺・甕が出土している。SD3・9・11・17、SK23などから出土している複合口縁壺(第38図5～8)、刻み目のある口縁部をもつ甕類(10・11)、三方向に透かし孔をもつ高坏脚部(1)や赤彩された器台脚部(2)などは、器形・製作技術の諸点から東北地方南部土師器編年における古墳時代前期塩釜式(氏家1957)に比定される。

【高坏・器台脚部】

中空でやや内湾しながらハの字に開き、大きな透かし孔があり、入念なミガキによって内外面を調整される。これらは塩釜式でも初期の特徴を有し、これまでの研究によって、丹羽茂氏は1段階(宮城県教育委員会1985)、青山博樹氏は塩釜1式古相(青山2010)として位置づけている。

【壺】

複合口縁下部が肥厚するもの(第38図5～8)であり、高坏・器台と同様の時期にあるものと考えられる(宮城県教育委員会 前掲)。

【甕】

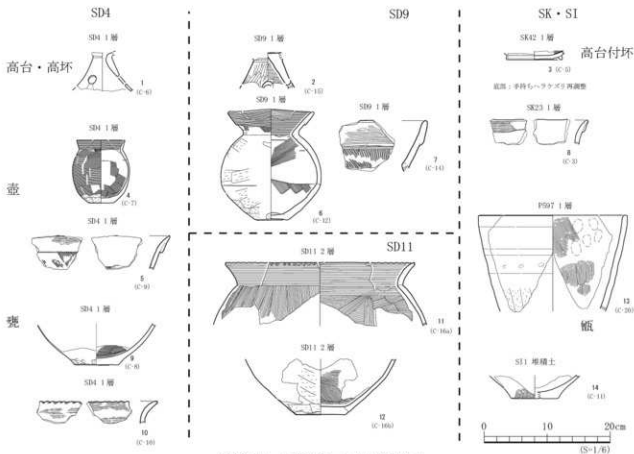
口唇部に連続する刻み目の裝飾が施されるものがある(第38図10・11)。これらは胴部が球胴状で、「くの字」に開く短い頸部を特徴とする。口唇部の刻み目は、丹羽編年では塩釜式Ⅰ段階を中心として、後続するⅡA段階までに位置づけられる。全国的には主に関東地方の古墳時代前期にみられる裝飾要素とされ(宮城県教育委員会 前掲)、宮城県内では名取市今熊野遺跡(小井川 1978)・仙台市今泉城跡(仙台市教育委員会 1980)・六反田遺跡(仙台市教育委員会 1981)・下飯田遺跡(仙台市教育委員会 1995)などに類例がみられる。刻み目はないが同様の形状の甕口縁部で、ハケメ調整が施される資料(第30図3・5)も出土している。

SK24出土の長胴甕(第19図2)は、器面調整の特徴から古墳時代前期から古代に属する可能性があるが、破片資料のため厳密な時期推定は難しい。

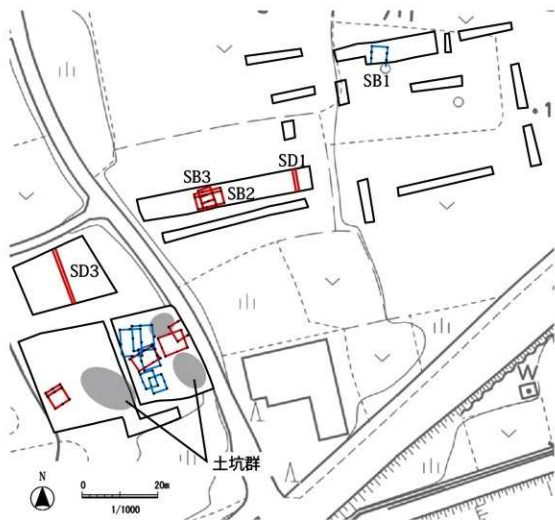
【ロク口調整】 坏・甕・高台付坏・甗が出土しているが、全体の出土量からみて少数である。図示できたのは高台付坏・甗である。

【高台付坏】

SK42から出土している(第38図3)。高台が外側に開く底部より低い疑似高台を呈し、器面・底部には手持ちヘラケズリ調整が施される。類例は涌沢遺跡SX29土器集積遺構(宮城県教育委員会 2015)に求められ、10世紀後半の年代が見込まれる。



第38図 小平館跡 出土土器集成



第39図 掘立柱建物跡の配置

【椀】

P597から体部破片が出土している（第38図13）。体部下半に向かってやや窄まる形状で、外面下半はヘラケズリ、内面はナデ調整される。口縁部端部は平坦に作り出される。

【かわらけ】

表土から出土している（第31図2）。底径およそ4cm前後、厚さは5mm以下の小形・薄手の皿とみられ、底部は回転糸切無調整である。器形の復元は困難であるが、町内の日向遺跡（山元町教育委員会 2015a）・谷原遺跡2次調査（山元町教育委員会 2016b）および近隣の互理郡館南園遺跡（宮城県教育委員会 1991）などの出土例を参考にすると、およそ13世紀後半以降に位置づけられるものと考えられる。

③須恵器

11点を図示した。器種は瓶・甕・壺である。

【瓶類】

SD6 から高台が付く瓶類底部（第29図7）が出土している。体部が回転ヘラケズリで調整され、底面にロクロナデによって高台が接着される。

【甕・壺】

器形を復元できるものはなく、多くは奈良・平安時代に属するものと推定される。甕の胴部資料については外面平行タタキ（第19図4、第28図1・2・5）と、外面格子タタキ（第28図7）を残すものがあり、内面の当て具痕は上からナデ調整が施されるものと、ナデ調整痕のみ残るものがある。

SD3の1層から須恵器壺と思われる破片が出土しているが、器形の復元は難しく、図示していない。須恵器はいずれも破片資料のため器形の復元が困難であることや、共伴遺物が乏しいことから、詳細な時期決定は難しい。

④近世陶器

3点出土し、図示はしていない。表土から1点、溝跡（SD2）の確認面から2点出土しているが、いずれも小破片のため器種不明である。

⑤石器

1点を図示した。安山岩の亜角礫を利用した砥石であり、きわめて使用度の弱い砥面が2面、節理面で剥離した平坦面が2面ある（第28図8）。図化していない頁岩製剥片2点も含めて、不定形な石器であり、帰属する時期を推定することは困難である。

（2）遺構の特徴と年代

今回の調査では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、土坑52基、溝跡16条、柱穴・ピット553基を確認した。以下では、これらの遺構の特徴・重複関係・出土遺物などから年代について検討する。

①竪穴建物跡

竪穴建物跡1棟（SI1）を確認した。平面形はやや不整な隅丸方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっており、斜面上方（西側）が最も残りが良い。地山を床としており、柱穴・貼床土・炉・カマド・周溝などの構造・施設は確認できない。

自然堆積土中から土師器・須恵器の甕破片（第10図）、剥片などが出土している。土師器甕は非ロクロ調整・ロクロ調整のものが混在し、図示した資料は底部資料で器形・器面調整などが不明のため、帰属する時期も不明である。須恵器甕は奈良・平安時代に属するものと想定されるが、遺構に伴うものではなく、埋没過程の二次的な流れ込みと考えられる。

したがって構造・形状や遺物から竪穴建物跡の時期を明確にすることは難しいが、隅丸方形を呈す

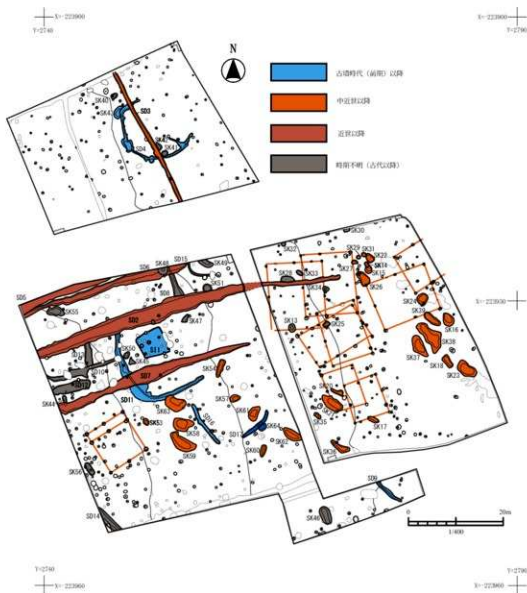
る堅穴建物跡は、県内では主に古墳時代～奈良・平安時代の堅穴建物跡にみられる特徴であり、カメラ施設がないこと、外周溝とみられる SD11 から古墳時代前期の土師器が出土することなどから、SI1 の帰属時期として古墳時代前期の可能性を考慮しておきたい。

② 掘立柱建物跡および柱穴・ピット

掘立柱建物跡 9 棟 (SB4～12) と、その他に柱穴・ピット類 485 基 (計 553 基) を確認した。

5 次調査区で確認された掘立柱建物 (SB4) は 2 間×2 間で身舎北側に廂がつき、主軸が北西を向く。

2 次調査区では 8 棟の掘立柱建物跡 (SB5～12) が確認され、2 間×2 間あるいは 3 間×1 間の東西棟建物跡 (SB7～9) と南北棟建物跡 (SB5・6・10・11・12) に分かれる (第 39 図)。建物方向は、前者は SB4 とおおよそ同様で北東を向き、後者は地形の傾斜に合わせた向きとなっている。明瞭に向き



第 40 図 各遺構の年代

の異なる建物跡が重複しているが、柱穴の直接的な重複がないため建物跡の新旧関係については不明である。南北に並ぶ南北棟建物跡群の東西両側、および東西に並ぶ東西棟建物跡群の南北両側には土坑群が配置され、ピットの分布が希薄な空間が広がっている。周辺の空間利用との兼ね合いから、限定された場所で幾度か建て直しを行った結果、これら柱穴・ピットの集中箇所が形成されたものと考えられる。

過去に1次調査(山元町教育委員会 2015c)で確認された3棟の掘立柱建物跡は、いずれも桁行が3間以上あり、方向は等高線に直交あるいは平行する。これらは柱穴の特徴や規模・構造・方向の点で今回報告分の南北棟建物跡群および東西棟建物後群と類似した特徴を備えており、後述する区画溝(SD1・3)などと合わせて一体のものであったと考えておきたい(第39図)。

SB4掘立柱建物跡のP510埋土からロクロ調整の土師器甕、非ロクロ調整の土師器鉢などが出土しているが、小破片のため図示していない。

前回・今回の調査で確認された掘立柱建物跡からは時期推定が可能な遺物が出土しておらず、厳密な時期の推定は困難であるが、建物跡を構成する柱穴・ピット類が比較的小規模で簡易な構造であることなどを考慮し、小平館に伴う中近世以降の建物跡の可能性のあるものとして捉えておきたい。

③土坑

土坑は52基確認した。平面形、断面形、深さなどのバリエーションに富むが、円形・楕円形の平面形、浅い皿状の断面形を基本とし、その他に深い方形や台形を呈するもの(SK16・17・18・23・39・46・48・54・56・62)がある。平面楕円形で断面形が方形・台形を呈するSK46については、1次調査で土壌墓の可能性が指摘されたものと類似する。また、中央にピット状の落ち込みを持つSK56は陥し穴であった可能性がある。

これらは南北棟掘立柱建物跡の並び(SB5・6・10・11・12)の東西を挟むように、あるいは5次調査区画のSB4の東に分布し(第39図)、土坑の周囲では柱穴・ピット類の分布が希薄になる。

遺構の重複関係をみると、SK21・24・47は重複する柱穴・ピット類より新しい。SK14はSK15と重複し、これより新しい。また、SK43は円弧状を呈する溝跡(SD4)より古く、SK64は円弧状を呈するとみられるSD17よりも古い。SK28・44・51は直線的な溝跡(SD2・7)よりも古い。

出土遺物は、SK23から古墳時代前期の特徴をもつ土師器壺・甕が出土している。SK28・34・58からは土師器甕、SK41からは土師器壺・甕・坏、SK42からは土師器高台付坏、SK44から須恵器甕が出土している。遺物はすべて自然堆積土あるいは確認面からの出土である。

以上、SK43・64は後述するSD4・17との重複関係から古墳時代前期以降、SK28・44・51は出土遺物やSD2・7との重複関係から近世以降と考えられるが、その他の土坑については、遺物は出土しておらず、重複関係が希薄であるため機能・時期等の詳細は不明である。掘立柱建物跡との位置関係や遺構の重複関係から、その多くは中近世以降に属するものと考えておきたい。

④溝跡

溝跡は16条(SD2～17)確認した。平面的な特徴からは、東北東に傾く向きで揃う直線的で長大なSD2・5・6・7、北北西に傾く直線的で狭長なSD3、北東に開く円弧状を呈するSD4・11、そのほか形状・向きともに不規則なもの(SD8・9・10・12・14)に分かれる。なお、SD16・17は本来一体のもので、円弧状を呈していた可能性がある。溝跡の断面形は概ね皿状を呈し、人為的に埋め戻されたものはない。

遺構の重複関係をみると、円弧状を呈する溝跡はSK42より新しく、その他の重複する遺構よりも古い。東北東方向に直線的に延びる溝跡SD2・5・6・7は重複する土坑・柱穴・ピットよりも新しく、SD3はSK42より新しい。

出土遺物は、東北東方向に直線的に延びるSD2からは土師器甕、須恵器甕・瓶類、近世陶器、SD5・6・7からは主に土師器甕、須恵器甕・瓶類などが出土した。円弧状を呈するSD4・11からは古墳時代前期に属する土師器壺・甕・高坏が溝跡底面から比較的まとまって出土している(図版2-5、5-7)。

SD3からは磨滅した土師器杯・甕、須恵器壺・甕、砥石が出土している(図版2-2・3)。SD9からは古墳時代前期に属する土師器壺・甕・器台などが出土している。(図版4-4～7)。SD17からは古墳時代前期に属する土師器甕が出土している。SD8・13・14・16からは非クロコ調整の土師器甕が主に出土し、SD14・15からは遺物が出土していない。

以上のことから、円弧状を呈するSD4・11(16・17)については古墳時代前期に属し、SD9についても、調査区外に延びるため形状は把握できないが、出土遺物から同時期と考えられる。

SD11はその位置関係から堅穴建物跡(SI1)の外周溝と考えられるが、同様の平面形を呈するSD4やSD16・17についても本来は堅穴建物跡の外周溝であり、建物跡は削平によって失われたものと捉えておきたい。

また、SD3は1次調査で確認されているSD1(山元町教育委員会2015a)と類似した幅・方向などの特徴があり、中近世以降に属する区画溝の類と考えておきたい。直線的に並ぶSD2・5・6・7については、近世以降として捉えることが可能である。

⑤遺跡の空間利用と北経塚遺跡との関連

【古墳時代】

上記の検討で、SI1 堅穴建物跡、SD4・9・11 溝跡は出土遺物の特徴から古墳時代前期に位置づけられ、SD16・SD17 溝跡についても、円弧状を呈する形態の特徴と出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。

町内で古墳時代前期の遺構・遺物が出土した遺跡としては、方形周溝・堅穴建物跡などが確認された北経塚遺跡(山元町教育委員会2013)、堅穴建物跡・溝跡などが確認された的場遺跡(山元町教育委員会2014a)、石垣遺跡(山元町教育委員会2014b)などが挙げられる。とくに近接する北経塚遺

跡とは墓域・生活域などと関連した場の利用の区別が考えられるが、北経塚遺跡では塩釜式Ⅱ～Ⅲ段階（宮城県教育委員会 1985）相当の土師器が出土しており、塩釜式の中期から後期にあたる。後続する古墳時代中期の遺構・遺物も確認されている。的場遺跡・石垣遺跡も塩釜式Ⅱ～Ⅲ段階にあたり、Ⅰ段階の塩釜式初期と想定される小平館跡よりも新しい。また、関東地方の影響が伺える装飾要素（口唇部の刻み目）をもつ土師器甕は、町内では本遺跡以外で出土していない。古墳時代前～中期を通して継続的に営まれた北経塚遺跡と、それに先行するものの一時期のみで痕跡が希薄な本遺跡の関連は、人々の移動と定着の様子を示唆するものと考えておきたい。

【中世以降】

中世あるいは近世以降に位置づけられた遺構は、中世以降のものにSB4～12掘立柱建物跡・SD3溝跡・SK14～18、20～24、26・27・29・31・35～39、53・54、57～63土坑、近世以降のものにSD2・5・6・7溝跡がある。

中世以降になると、小規模な柱穴からなる掘立柱建物跡が一定の範囲に重複しながら分布するようになる。こうした様子は北経塚遺跡の中世掘立柱建物跡ほどに密集しないものの、共通する傾向である。北経塚遺跡では出土遺物から13世紀後半～14世紀前半の存続期間が想定され、さらに建物跡の向きで細分された3時期のそれぞれに井戸跡や空間の配置が推定されている。小平館跡では当該時期の遺物が出土しないことから具体的な時期の推定は困難だが、配置について同様の想定をするならば、東西棟建物跡と南北棟建物跡で少なくとも2時期あり、それぞれ周囲に土坑群を配置していたものと考えられる。

今回報告した調査範囲は、小平館跡の主郭想定位置からみて東の隣接地にあたる。そうした場にもとまった数の掘立柱建物群が見つかったことは、中近世における館跡周辺の利用を考える上で大きな成果だが、その具体的な時期と館跡との関係については今後の課題として資料の増加を待ちたい。

（3） まとめ

- ・小平館跡は、阿武隈山地から東に延びる標高12～32mの中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する。今回の調査（2～5次調査）では、館跡本体の東側で竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、土坑52基、溝跡16条、柱穴・ピット553基を確認し、主に土師器、須恵器が出土した。
- ・竪穴建物跡（SI1）と隣接する溝跡（SD11）、および円弧状を呈する溝跡（SD4・9・16・17）は出土遺物の特徴とその出土状況から古墳時代前期に属する遺構と考えられる。
- ・掘立柱建物跡およびそれ以外の柱穴・ピットは、その特徴や周辺の調査事例から中近世以降に属するものと考えられる。周辺の土坑、区画溝などを含め、館跡に関連する屋敷地を構成していた可能性がある。



- 1: 2次調査区完掘 (北西から)
 2: SK15 完掘 (東から)
 3: SK15 断面 (東から)
 4: SK23 完掘 (北から)
 5: SK23 断面 (北から)
 6: SK24 断面 (北から)
 7: SD2 断面 (西から)



図版 1

- 1: 4次調査区完掘
(南東から)
- 2: SD3 断面1 (北から)
- 3: SD3 断面2 (北から)
- 4: SD4・SK41 断面
(東から)
- 5: SD4 遺物出土状況
(南から)
- 6: SD4 完掘 (北から)
- 7: 基本層③ (北から)



図版 2



- 1 : 5次調査区発掘
(南東から)
- 2 : S11 完掘 (東から)
- 3 : S11 断面 (南から)
- 4 : S11 断面 (東から)
- 5 : SK44 断面 (東から)
- 6 : SD2 完掘 (東から)
- 7 : SD2 断面 (東から)



図版 3

- 1: 5次調査区道路部分
完掘（東から）
- 2: SD5 断面（東から）
- 3: SD6 断面（東から）
- 4: SD9 完掘（南から）
- 5: SD9 遺物出土状況
（南から）
- 6: SD11 完掘（南から）
- 7: SD11 遺物出土状況
（北から）



図版 4



- 1 : 2次調査区 SB 群 (東から)
 2 : SB4-P490 断面 (東から)
 3 : SB4-P500 断面 (東から)
 4 : SB4-P502 断面 (南から)
 5 : SB4-P503 断面 (北から)
 6 : SB4-P510 断面 (南から)
 7 : SB4-P515 断面 (東から)



図版 5



- 1: SB4 完掘 (東から)
- 2: SB4-P548 断面 (北から)
- 3: SB4-P551 断面 (南から)
- 4: SB4-P555 断面 (東から)
- 5: 作業風景 (3次)
- 6: 作業風景 (5次)
- 7: 作業風景 (5次)



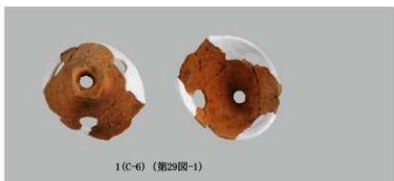
図版 6



図版 7



1(C-6) (第29圖-1)



1(C-6) (第29圖-1)



2(C-7) (第29圖-2)



3(C-8) (第29圖-3)



4(C-9) (第29圖-4)



5(C-10) (第29圖-5)

SD4 溝跡



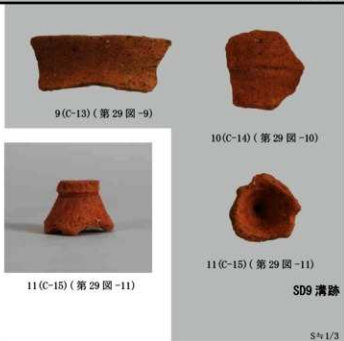
6(E-9) (第29圖-6)

7(E-10) (第29圖-7)

SD6 溝跡



8(C-12) (第29圖-8)



9(C-13) (第29圖-9)

10(C-14) (第29圖-10)



11(C-15) (第29圖-11)

11(C-15) (第29圖-11)

SD9 溝跡

SN 1/3



1(C-16a) (第30図-1)



2(C-16b) (第30図-2)

SD11 溝跡



3(C-17) (第30図-3)



4(C-18) (第30図-4)



5(C-19) (第30図-5)

SD17 溝跡

6(C-20) (第31図-1)
P597

7(C-21) (第31図-2)

遺構外 表土

S₁1/3

たにはら 谷原遺跡

調査要項

遺跡名	谷原遺跡（宮城県遺跡登録番号：14067 遺跡記号：TH）
所在地	宮城県亶理郡山元町山寺字谷原 92-1、93、96-1、89-9、84-9、84-10
調査主体	山元町教育委員会
調査担当	山元町教育委員会生涯学習課 山田隆博、丹野修太
調査期間	4次調査：平成25年11月27日～28日、5次調査：平成25年12月5日～20日、 6次調査：平成26年4月25～26日
調査対象面積	4次調査：約1,716㎡、5次調査：約604㎡、6次調査（確認）：約162㎡
調査面積	4次調査：約146㎡、5次調査：約345㎡、6次調査（確認）：約74㎡

1 調査に至る経過

平成 25 年度から 26 年度にかけて、山元町谷原地区において東日本大震災で被災した個人住宅および事務所建設にかかる造成箇所と埋蔵文化財の関わりについて、各事業者から照会があった。これら 3 件の事業予定地は一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「谷原遺跡」に該当し、工事内容に切土造成などを含むことから事前の協議のうえ、それぞれ確認調査および本調査を実施した。

【協議及び発掘通知】

4 次調査 所在地：宮城県亶理郡山元町山寺字谷原 92-1、93、調査担当：山田隆博

平成 25 年 11 月 7 日	事業主からの協議書の提出
平成 25 年 11 月 7 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1231 号）
平成 25 年 11 月 15 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 2144 号）
平成 25 年 11 月 19 日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成 25 年 11 月 19 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1280 号）
平成 25 年 11 月 22 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 2184 号）

5 次調査 所在地：山元町山寺字谷原 89-8、調査担当：山田隆博

平成 25 年 10 月 23 日	事業主からの協議書の提出
平成 25 年 10 月 23 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1151 号）
平成 25 年 10 月 30 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 1984 号）
平成 25 年 11 月 15 日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成 25 年 11 月 15 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1265 号）
平成 25 年 11 月 27 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 2241 号）

6 次調査 所在地：山元町山寺字谷原 84-9、84-10、調査担当：山田隆博・丹野修太

平成 26 年 3 月 11 日	事業主からの協議書の提出
平成 26 年 3 月 17 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1871 号）
平成 26 年 3 月 26 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 3299 号）
平成 26 年 4 月 8 日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成 26 年 4 月 8 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 60 号）
平成 26 年 4 月 16 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 145 号）

2 遺跡の概要と地理的環境

谷原遺跡は、宮城県亶理郡山元町谷原に所在し、山元町役場の北北西約 1.0 km に位置する（第 1 図）。遺跡は、阿武隈山地から東へ舌状に延びる丘陵東側の中位段丘・低位段丘上段に立地する。遺跡の範囲は谷原川と山寺川に挟まれた標高 17 ～ 25 m の地点にあり、東西 220 m、南北 140 m ほどの広がりをもつ。現況は、道路、宅地、店舗、畑地、荒地である。

遺跡は常磐自動車道建設工事に先立って平成 19～20 年度に行われた分布調査で発見され、平成 20 年度の 1 次調査から平成 26 年度の 8 次調査までを経て縄文時代～中世にわたる複合遺跡であることが明らかとなっている（第 1 表、第 2 図）。本報告はそのうち東日本大震災の復興事業に伴い平成 25 年度に行われた 4 次調査・5 次調査、平成 26 年度に行われた 6 次調査について報告するものである。

1 次調査（町道改修）および 2 次調査（常磐自動車道建設）（山元町教育委員会 2016a・b）は発掘面積も広く（第 1 表・第 2 図）、その成果から遺跡の性格を概ね把握することができる。

縄文時代の遺構は中期以降に属するものを主体とする。なかでも中期末葉～後期前葉の掘立柱建物跡 56 棟が丘陵頂部に分布し、中心に広場をもつ環状の建物群を形成する。その周辺を含めた集落跡のほぼ全城が調査された結果、建物群の北側に土器埋設遺構を伴う墓塚、南西に貯蔵穴群、南東に捨て場（遺物包含層の広がり）という丘陵上の集落における具体的な空間利用が明らかとなった。

古墳時代～平安時代の遺構には竪穴建物跡 5 棟、掘立柱建物跡 5 棟以上、土坑群などがあり、竪穴建物跡の年代は 7 世紀後半～9 世紀後半までが想定されている。これらの遺構は 1 次調査区東端および 5 次調査区を貫く溝跡（SD2）によって区画されており、溝跡より東側には竪穴建物跡と土坑群の散漫な分布が、西側には掘立柱建物跡のやや密集した分布（今回報告分）が確認される。こうした計画的な空間利用に加え、風字硯・円面硯などが出土していることから、一般的な集落とは異なる性格が想定されている。また、山寺川を挟んだ対岸には「田人」墨書土器や八稜鏡などが出土した涌沢遺跡（宮城県教育委員会 2015）が立地しており、両遺跡は同時期のものと考えられる。

中世の遺構としては掘立柱建物跡 150 棟以上、柱穴列跡、溝跡、井戸跡、土坑などがある。これらは屋敷を構成する遺構群と考えら



第 1 図 谷原遺跡の位置

第1表 谷原遺跡の調査で使用した遺構の番号

記号	遺構種別	【町 第12集】	【町 第13集】	未報告	【本報告】 復興事業	【本報告】 復興事業	【本報告】 復興事業	未報告	
		1次 (1,805 m ²)	2次 (5,740 m ²)	3次 (25 m ²)	4次 (165 m ²)	5次 (345 m ²)	6次 (70 m ²)	7次	8次
SE	堅穴建物跡	—	1～5 (5)	—	6(1)	—	—	未整理	
SB	掘立柱建物跡	1～6(6)	7～212 (206)	213 (1)	—	214～226 (12)	—		
SA	柱穴列	—	1～34 (34)	—	35～36(2)	37(1)	—		
SK	土坑	1～16 (16)	17～232(216)	233 (1)	—	234～242 (9)	243(1)		
SD	溝跡	1～3 (3)	4～13 (10)	—	14～15(2)	16,1・2a・2b (3)	—		
SE	井戸跡	—	1～8 (8)	—	—	—	—		
P	柱穴・ピット	1～167 (167)	168～5106 (4939)	5107～5114 (8)	5115～5203 (89)	5204～5355 (152)	5356～5357 (2)		

()内は調査ごとの遺構数を示す。柱穴・ピットの数は掘立柱建物跡を構成するものも含む。

れ、13世紀後半～14世紀前半から中世末まで継続したとみられる。四面箱建物跡や角柱を使用した建物跡、100 mを超える大型建物跡などが存在し、この地域における拠点的な性格を有していた可能性が指摘されている(山元町教育委員会 2016b)。

3 調査の方法

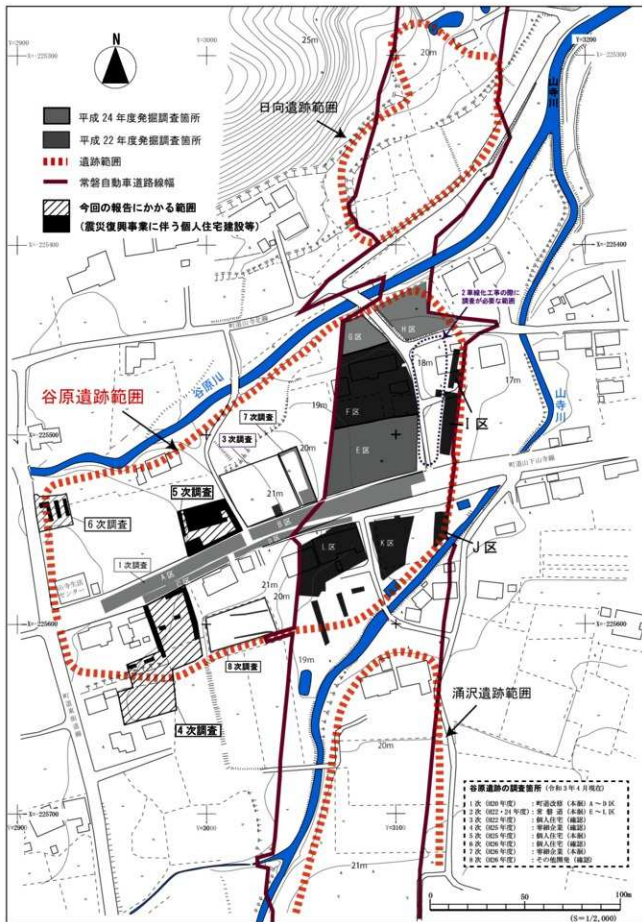
(1) 現地調査

【概要】

4次調査にかかる工事範囲は、1次調査C区(第2図)の南側隣接地であり、遺構の分布が予想された。工事は敷地内盛土ののちに住宅・事務所を造成するもので、外周に設置する擁壁部分のみ深さ約40 cmの掘削が予定されていた。そこで擁壁設置箇所・浄化槽設置箇所を対象にトレンチ6箇所(T-1～6)を設定した。結果、T-1からT-4において堅穴建物跡・溝跡・柱穴などが確認された。遺構確認面は工事範囲の北半で現地表から約50 cm、南半で約100 cm下の地山面である。浄化槽設置箇所(T-3・4)(掘削深2 m)で確認された遺構については、記録保存のため精査を行った。それ以外では遺構面まで掘削が及ばないことから、遺構の分布状況を記録し調査を終了した。

5次調査にかかる工事範囲は1次調査A区の北側隣接地であり、遺構の分布が予想された。工事は盛土の上から柱状改良杭を打つこと、外周に擁壁を設置(掘削深60 cm)すること、車両乗り入れ口部分が約40～60 cm切土される予定であることなどから、該当箇所の確認調査を実施した。結果、多数のピット類や溝跡などの遺構・遺物が確認されたため、同じ範囲を対象とした本調査を実施した。

6次調査にかかる工事範囲は遺跡範囲の北西隅にあたる。遺構の有無を確認するため、住宅基礎部分と浄化槽設置箇所に3箇所のトレンチ(T-1～3)を設定した。その結果、柱穴2基、土坑1基を



第2図 発掘区的位置

第2表 谷原遺跡4～6次調査出土遺物計数表

遺物種別	単位	調査区画	上層部							計	遺物種別											計						
			上層部								遺物種別																	
			層	種	高木	高木	高木	高木	高木		片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片		片	片	片	片		
PS231	1層	PS231	1	0							1	0										1	0					
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
			1	0								1	0										1	0				
PS232	1層	PS232	1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
PS233	1層	PS233	1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
PS234	1層	PS234	1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
PS235	1層	PS235	1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
			1	0							1	0										1	0					
1	0							1	0										1	0								

確認した。遺物は出土していない。土坑は浄化槽設置予定箇所位置しており、協議により設置箇所を変更して対応した。なお浄化槽の移動先についてはT-3トレンチを拡張し、遺構が確認されないことを確認している。柱穴2基は掘削深より下部に位置していたため影響はないと判断し、6次調査の遺構についてはすべて平面の記録にとどめている。

【方法】

現地調査の方法については、震災復興事業に伴う調査の基準に則り、前述の小平館跡の調査と同様の手順で行った。ただし、谷原遺跡は東日本大震災以前の平成20（2008）年からの継続的な調査のため、本報告の調査では基準杭に震災以前の世界測地系に基づく座標を使用している。

遺構番号は現場段階では調査次ごとに独立し、遺構の性格ごとに1から番号を与えた。整理段階で報告書が既刊の1次・2次調査で使用した番号（第1表）から連番として振りなおした。今回報告の対象としていない3次調査の遺構番号もあらかじめ与えている。

（2）室内整理

谷原遺跡4次～6次調査で出土した遺物、現地の記録などの基礎整理は、各発掘調査終了後に山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。遺構・遺物の記録保存を行った4・5次調査分の成果については平成25年度内に遺物の洗浄・保存処理と計数、記録写真のネーミング、平面図・断面図の修正・トレースなどを終えている。遺物の図化・トレースは令和2年度に株式会社シン技術コンサル東北支店に委託する形で開始し、報告書の作成・執筆は宮城県教育委員会が令和2年～3年度に実施した。なお、室内整理作業には遺構くん cubic、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5、Adobe InDesign CS5 のソフトウェアを使用した。

4 基本層序

今回の調査範囲（4次～6次調査）は、標高約17～25mの緩やかな東向き斜面上に位置する。北側には谷原川が東に向かって流れ、南東側には山寺川が南西から北方向に向かって流れる。6次調査のトレンチで標高24.4～24.7mを測り、そこから北・南西へ傾斜して両河川へいたる。5次調査区は標高21.0～23.0mの位置にあり、1次調査のA区と南辺で接する。4次調査のトレンチは1次調査区C区と北辺で接し、南北トレンチ（T-1・T-2）の南側では山寺川に向かって急激に傾斜する。

谷原遺跡の基本層序は、1次・2次調査において大別10層が確認されている。今回の調査範囲では、上から現代の表土・耕作土（I層）、近代以降の自然堆積層（II層）、洪水砂層（IV層）、古代の堆積層（V層）、地山（X層）の順で構成される。遺構確認面は地山（X層）上面である。遺構の残存状況から本来の地形が概ね残存し、比較的標高が低く河川に近い部分が河川由来の堆積で覆われているものと考えられる。確認された各層の概要と既往の調査との対応は以下の通りである（第3・4図）。

I層：現代の表土・耕作土・盛土。I a層～I d層に細別される。4次～6次調査ではI b～d層が確認された。

- ・I b層：近現代の表土・耕作土。黒褐色（10YR3/4）シルト。

- ・ I c 層：現代の碎石による盛土。6次調査区で確認した。
- ・ I d 層：近現代の表土。暗褐色（10YR3/3・3/4）シルト。6次調査区で確認した。

II層：近世以降の堆積層。暗褐色（10YR3/3・3/4）、4次調査区ではにぶい黄褐色（10YR5/3）シルト。小礫を少量含む。

IV層：洪水砂層。4次調査区で確認されたIV A層は旧山寺川を起源とする堆積層。にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂を多く、小礫を少量含む砂層。

V層：古代の堆積層。暗褐色（10YR3/4）シルト。小礫・焼土粒子・炭化物片・地山ブロックなどを含み、縄文時代～古代の遺物を包含する。

X層：地山。各地点により異なる種類の地山が確認されたが、基本的にはX d→X c→X b層の順に堆積している。

- ・ X b 層：明黄褐色（10YR6/6）粘土質シルト土。小礫・黒色粒子を含む。
- ・ X c 層：にぶい黄褐色（10YR6/4）・明黄褐色（10YR7/6）シルト。小礫・黒色粒子を含む。
- ・ X d 層：褐色（7.5YR4/6）・にぶい橙色（7.5YR6/4）シルト。小礫を含む。

5 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は竪穴建物跡1棟、掘立柱建物9棟、土坑10基、溝跡6条のほか、柱穴・ビット243基である（第5～9図）。遺物は溝跡を中心に、土師器、須恵器、石器などが平箱で6箱ほど出土している。

（1）竪穴建物跡

【S16 竪穴建物跡】（第6・10図）

〔位置〕4次調査区T-1（中央）〔確認面〕地山〔重複〕P5129・5130と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕調査区内に全体の3分の1～半分ほどがかかる。長辺約4.22m、直交する辺の検出長が約1.20mである。平面形は方形ないし長方形を呈すると推定される。保存のため確認にとどめている。

〔堆積土〕確認面において地山ブロック・炭化物片を含む暗褐色（10YR3/3）シルトの堆積を記録した。

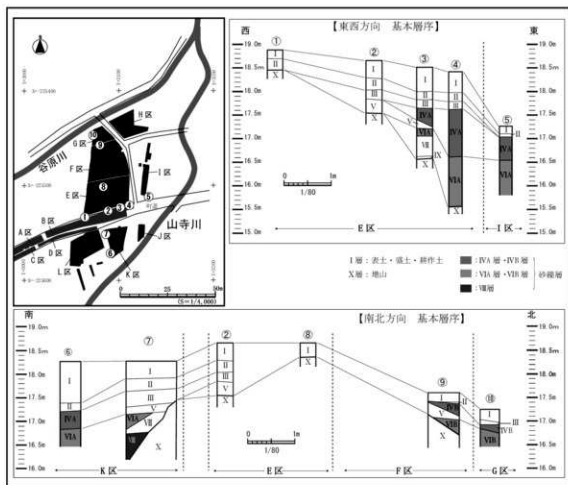
〔出土遺物〕確認面（1層）から非ロクロ調整の土師器坏2点（30g）、甕3点（10g）、須恵器坏1点（5g）が出土している。図示できたものは土師器坏1点（第10図1）、須恵器坏1点（2）である。土師器坏は非ロクロ調整で体部が内湾しつつ立ち上がり、底部は平底である。器面調整は外面にケズリと口縁部ヨコナゲ、内面にミガキのち黒色処理が施される。

〔そのほかの施設〕主柱穴・カマド・周溝・貯蔵穴などの施設は確認されていない。

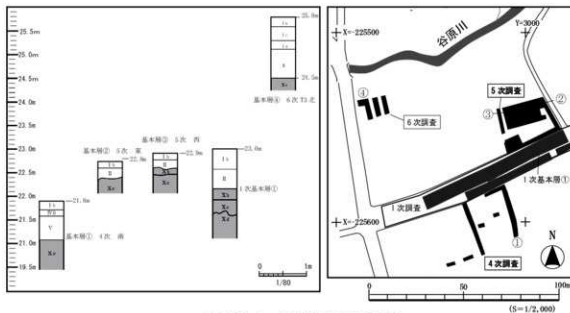
（2）掘立柱建物跡・柱穴列（第11～16図）

【SB214 掘立柱建物跡】（第11・12図）

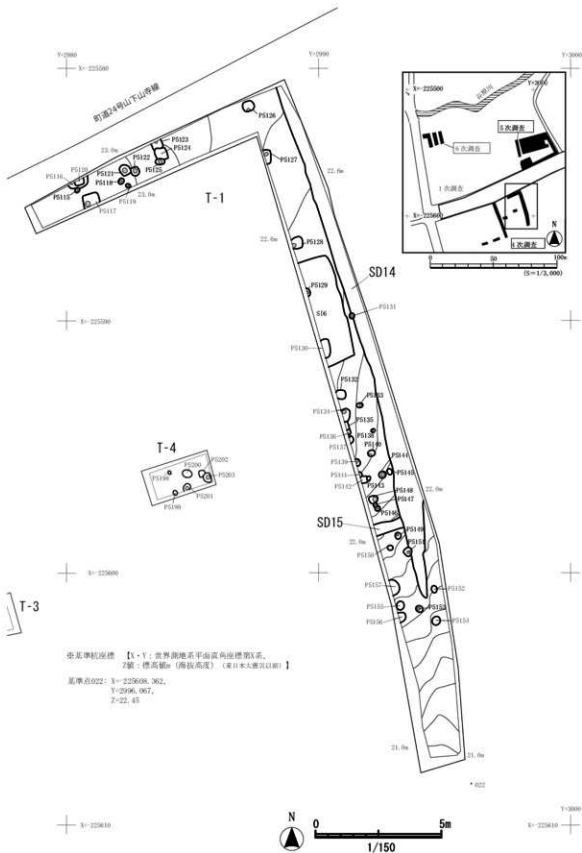
〔位置〕5次調査区（西）〔確認面〕地山〔重複〕P5329→SB214・P5328→P5330、SB214・P5326・



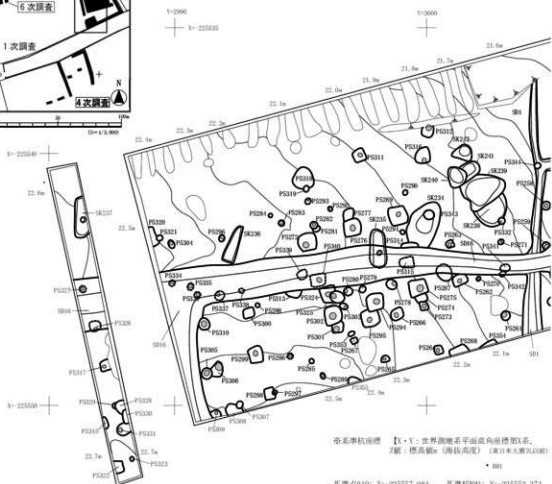
第3図 2次調査区の基本層序



第4図 4～6次調査区の基本層序

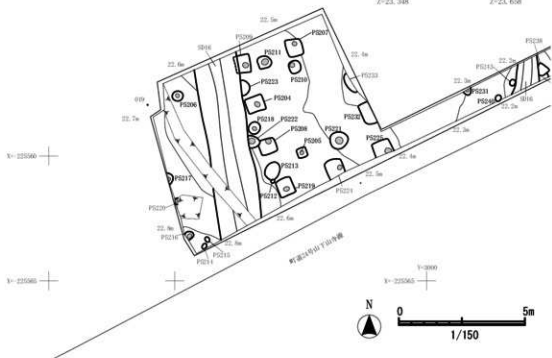


第6図 遺構配置図(2)

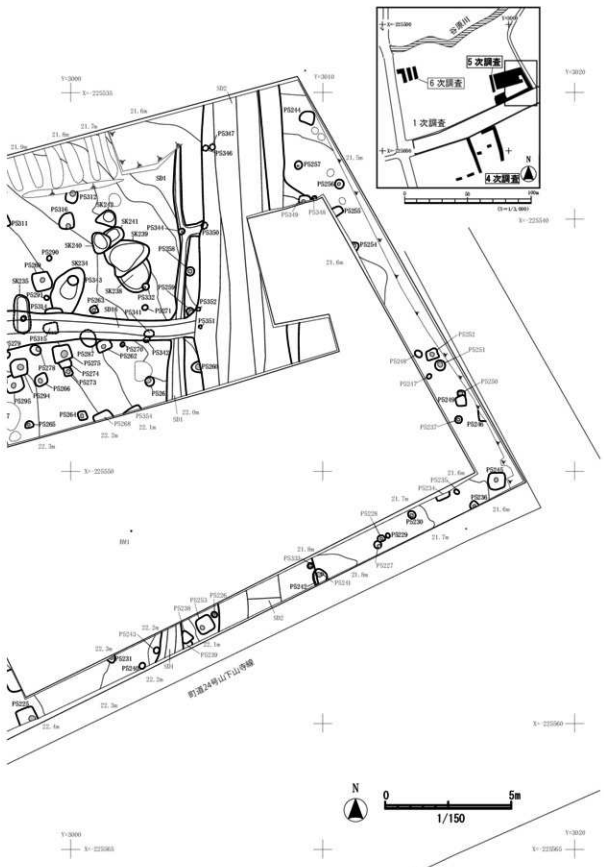


※基準杭履歴 【・Y：世界海抜基準面直交向標頭X系、
 2層：標高値（海抜高度）（単位：メートル（m））】

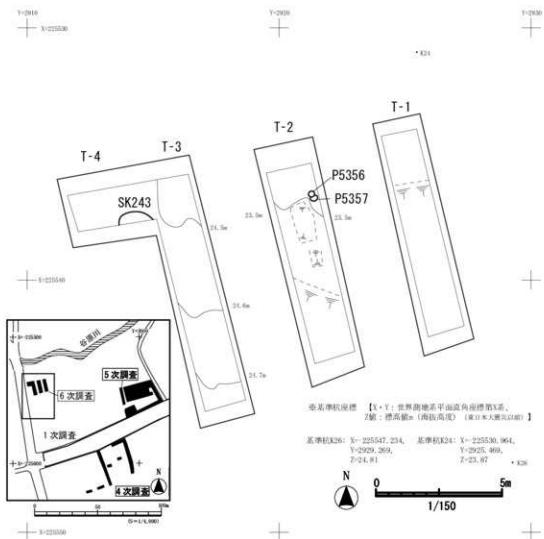
基準点019: X=22557.984, Y=2888.921, Z=23.348
 基準点081: X=22552.074, Y=3002.493, Z=23.658



第7図 遺構配置図(3)



第8図 遺構配置図(4)

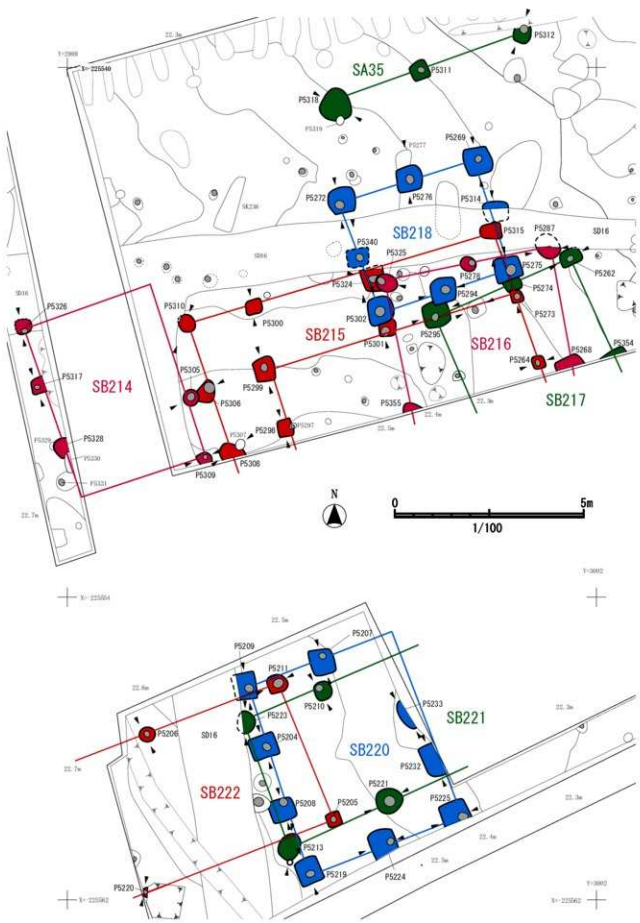


第9図 遺構配置図(5)



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法集→その他の特徴の順に記載】	登録
1	S16 1層	土師器	杯	口縁部 ~底面	外面: 欠ズリ・口縁部ヨコナデ, 内面: ~フミツキ~黄灰色地肌。色調: 外面: じぶい黄褐色 (10B7/A), 内面: 黄褐色 (E.50E2/1)。法集: 残存高3.3cm・器厚0.4~0.7cm。外面底部に黒泥あり	C-189
2	S16 1層	須恵器	杯	口縁部 ~体部	外面: ロケロナデ, 内面: ロケロナデ。色調: 内外面-黄灰色 (E.50E/1)。法集: 残存高2.5cm・口縁 (12.0)cm・器厚0.2~0.4cm	E-120

第10図 S16 竪穴建物跡 出土遺物



第 11 図 SB 掘立柱建物跡配置図、SA 柱六列配置図

5309 → SD16、SB215:P5306 → SB214:P5305 (P5329、SB215より新しく、SD16、P5330より古い)。

[構造] 東西1間以上、南北3間の南北棟と想定される。

[柱穴] 直径0.43 m～0.50 mのやや不整な円形・隅丸方形で、深さは最も深いもので0.20 mである。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色・褐色シルトなどである。

[柱痕跡] 直径約0.20 mの円形である。

[規模・柱間] 桁行は西側柱列で北から1.53 m・1.68 m・(1.45) mで総長約4.66 mである。梁行は南妻で約3.50 mを測る。

[出土遺物] 出土していない。

【SB 215 掘立柱建物跡】(第11・12図)

[位置] 5次調査区(西) [確認面] 地山 [重複] SB215:P5324 → SB216:P5325、SB217:P5274 → SB215:P5273 → SB218:P5275、SB215:P5301 → SB218:P5302、SB215:P5310・5315・5324 → SD16、SB215:P5308 → P5307、SB215:P5306 → P5305 (SB216・218、P5305・5307より古く、SB217より新しい)。

[構造] 東西3間、南北2間以上の東西棟と想定され、北側・西側をめぐるL字の廂がつく。廂部分は北側(桁行)で3間、西側(梁行)で2間以上である。南側は調査区外にかかる。

[柱穴] 一辺0.36 m～0.65 mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.46 mである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色・にぶい黄褐色シルトなどである。

[柱痕跡] 直径約0.20～0.30 mの円形である。

[規模・柱間] 桁行は身舎の北側柱列で西から3.70 m・3.33 m、廂の出が1.72 mであり、総長約8.75 mを測る。梁行は身舎の東妻で1.90 m、廂の出は1.70 mであり、総長は約3.60 m以上である。

[出土遺物] P5298から縄文土器1点(10g)、P5273からロクロ調整の土師器3点と非ロクロ調整の土師器甕1点(計40g)、P5306から土師器甕1点(5g)が出土している。図示できたものはない。

【SB 216 掘立柱建物跡】(第11・12図)

[位置] 5次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] SB215:P5324 → SB216:P5325、SB216:P5287 → SD16 (SB215より新しく、SD16より古い)。

[構造] 東西2間、南北1間以上の南北棟と想定される。

[柱穴] 直径約0.30 m～0.60 mのやや不整な円形・楕円形であり、深さは最も深いもので0.35 mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトなどである。

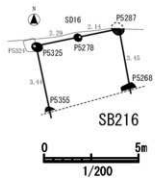
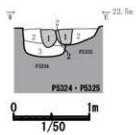
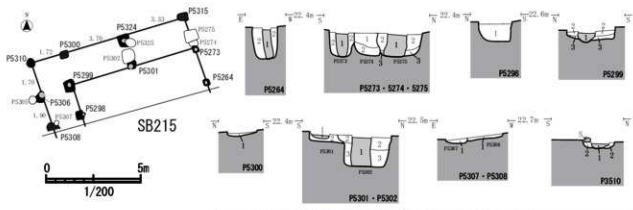
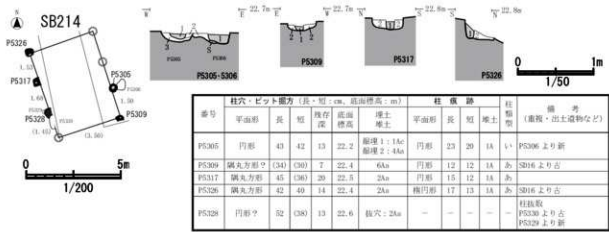
[柱痕跡] 直径約0.20 mの円形である。

[規模・柱間] 桁行は1間のみ調査区にかかり、西側柱列で3.44 mを測る。梁行は北妻で西から2.29 m・2.14 mで総長約4.43 mである。

[出土遺物] P5268からロクロ調整の土師器甕1点(5g)、坏1点(5g)、P5278から調整不明の土師器甕4点(15g)が出土している。図示できたものはない。

【SB 217 掘立柱建物跡】(第11・13図)

[位置] 5次調査区(中央) [確認面] 地山 [重複] SB217:P5295 → SB218:P5294、SB217:P5274 → SB218:P5275・SB215:P5273、SB217:P5262 → SD16 (SB215・218、SD16より古い)。



第12図 SB214～216 掘立柱建物跡

〔構造〕東西2間、南北1間以上の南北棟と想定される。

〔柱穴〕一辺0.46 m～0.70 mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.40 mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕直径約0.20 mの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は1間のみ調査区にかかり、東側柱列で3.50 mを測る。梁行は北妻で西から2.19 m・1.77 mで総長約3.96 mである。

〔出土遺物〕P5295から縄文土器2点(10g)、土師器坏1点(25g)、甕1点(5g)、P5262から土師器甕5点(25g)、P5274から土師器坏1点(15g)、甕1点(15g)が出土している。土師器は全てロクロ調整である。図示できたものはない。

【SB 218 掘立柱建物跡】(第11・13図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SB215:P5301→SB218:5302、SB217:P5295・5274→SB218:P5294・5275、SB218:P5314・5340→SD16、P5277→SB218:P5276、SK234→SB218:P5314(SB215・217、P5277より新しく、SD16より古い)。

〔構造〕東西2間、南北2間の東西棟である。

〔柱穴〕一辺0.52 m～0.75 mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.42 mである。埋土は地山ブロック・地山粒子を多く含む黒褐・暗褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕直径約0.25 mの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は北側柱列で西から2.05 m・1.87 mで総長約3.92 mである。梁行は西妻で北から1.51 m・1.52 mで総長約3.03 mである。

〔出土遺物〕P5269からロクロ調整の土師器坏1点(5g)、甕2点(30g)、P5276から縄文土器1点(10g)、ロクロ調整の土師器坏1点(15g)、甕2点(5g)、須恵器坏1点(5g)、P5275から非ロクロ調整の土師器高坏1点(15g)、須恵器甕1点(55g)、P5294からロクロ調整の土師器坏1点(5g)、須恵器坏2点(20g)が出土している。図示できたのはP5294から出土した須恵器甕1点(第16図1)、P5275から出土した須恵器坏1点(2)である。坏は底部が手持ちヘラケズリ再調整され、切り離し技法は不明である。甕は口縁部が下につまみだされる。

【SB 219 掘立柱建物跡】(第14図)

〔位置〕5次調査区(南東)〔確認面〕地山〔重複〕なし

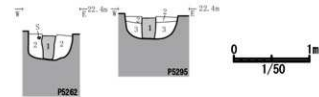
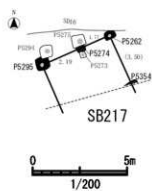
〔構造〕東西1間以上、南北2間の南北棟と想定される。西側は調査区外にかかる。

〔柱穴〕一辺0.43 m～0.67 mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.19 mである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐・暗褐色シルトなどである。

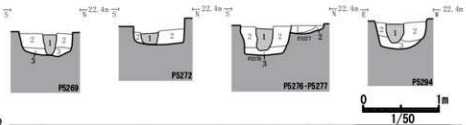
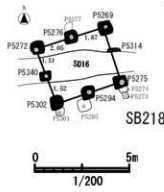
〔柱痕跡〕直径約0.18 mの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は東側柱列で北から(2.59) m・(2.60) mで総長約5.19 mである。梁行は南妻で1間のみ調査区にかかり、2.20 mを測る。

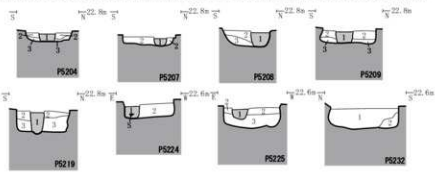
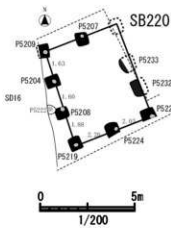
〔出土遺物〕P5246からロクロ調整の土師器甕6点(20g)が出土している。図示できたものはない。



番号	柱穴・ピット掘方 (長・短・cm, 底面標高: m)				柱痕跡			柱類型 (備考 (重積・出土遺物など))				
	平面形	長	短	残存 深	底面 標高	埋土 層土	平面形		長	短	埋土	
PS262	隅丸方形	57	42	40	21.7	1Aa	隅形跡	19	15	1A	あ	SB16より古。土師器焼
PS274	隅丸方形	46	32	35	21.8	掘埋1: 1Aa 抜穴2: 1Aa	—	—	—	—	—	柱採取 PS273-PS275より古。土師器焼・壺
PS295	隅丸方形	73	67	35	21.9	掘埋1: 1Aa 掘埋2: 1Aa	隅形跡	25	20	1A	あ	PS294より古。縄文土器片・土師器焼・壺
PS354	隅丸方形?	54	(53)	15	—	抜穴: 1Aa	—	—	—	—	—	柱採取



番号	柱穴・ピット掘方 (長・短・cm, 底面標高: m)				柱痕跡			柱類型 (備考 (重積・出土遺物など))				
	平面形	長	短	残存 深	底面 標高	埋土 層土	平面形		長	短	埋土	
PS269	隅丸方形	75	72	33	21.7	掘埋1: 1Aa 掘埋2: 2Aa	円形跡	20	17	1A	あ	土師器焼・壺
PS272	隅丸方形	72	69	40	21.8	1Aa	円形跡	25	23	1A	あ	—
PS275	隅丸方形	70	60	36	21.8	掘埋1: 1Aa 掘埋2: 1Aa	円形跡	27	26	1A	あ	PS274より新。須恵器焼
PS276	隅丸方形	68	68	42	21.7	掘埋1: 1Aa 掘埋2: 2Aa	円形跡	24	21	1A	い	PS277より新。縄文土器片
PS294	隅丸方形	67	65	36	21.8	掘埋1: 1Aa 掘埋2: 1Aa	円形跡	25	22	1A	い	PS295より新。須恵器焼
PS302	隅丸方形	70	68	42	21.8	掘埋1: 1Aa 掘埋2: 1Aa	円形跡	27	26	1A	あ	PS301より新
PS314	隅丸方形?	62	(18)	28	21.8	抜穴1: 1Aa 抜穴2: 2Aa	—	—	—	—	—	柱採取 SB16より古 SB234より新
PS340	隅丸方形	92	90	6	21.8	4Aa	円形跡	21	18	2A	あ	SB16より古



番号	柱穴・ピット掘方 (長・短・cm, 底面標高: m)				柱痕跡			柱類型 (備考 (重積・出土遺物など))				
	平面形	長	短	残存 深	底面 標高	埋土 層土	平面形		長	短	埋土	
PS204	隅丸方形	70	63	17	22.3	掘埋1: 2Aa 掘埋2: 4Aa	隅形跡	24	19	2A	あ	土師器焼
PS207	隅丸方形	66	63	13	22.3	2Aa	円形跡	19	17	4A	あ	土師器焼
PS208	隅丸方形	64	61	24	22.3	掘埋1: 2Aa 掘埋2: 3Aa	円形跡	23	22	2A	あ	PS222より古
PS209	隅丸方形	70	(48)	20	22.3	掘埋1: 2Aa 掘埋2: 3Aa	円形跡	24	21	2A	あ	SB16より古。土師器焼・須恵器焼
PS219	隅丸方形	70	70	35	22.2	掘埋1: 2Aa 掘埋2: 4Aa	隅形跡	25	18	1A	あ	—
PS224	隅丸方形?	(70)	68	24	22.2	2Aa	円形跡	19	18	1A	あ	縄文土器片
PS225	隅丸方形?	74	(55)	32	22.1	掘埋1: 2Aa 掘埋2: 3Aa	隅形跡	27	20	1A	い	—
PS232	隅丸方形?	92	(44)	30	22.1	抜穴: 3Aa 掘埋: 1Aa	—	—	—	—	—	柱採取
PS233	隅丸方形?	83	(23)	35	22.1	抜穴1: 3Aa 抜穴2: 2Aa	—	—	—	—	—	柱採取。土師器焼・壺

第13図 SB217～220 掘立柱建物跡

【SB 220 掘立柱建物跡】(第 11・13 図)

[位置] 5次調査区(南西) [確認面] 地山 [重複] SB220:P5208 → P5222, SB220:P5209 → SD16 (P5222、SD16 よりも古い)。SB221・222 と範囲が重複するが、柱穴の重複がないため新旧関係は不明。

[構造] 東西 2 間、南北 3 間の南北棟である。

[柱穴] 一辺 0.64 m ~ 0.92 m の隅丸方形で、深さは最も深いもので 0.35 m である。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色・にぶい黄褐色シルトなどである。

[柱痕跡] 直径約 0.25 m の円形である。

[規模・柱間] 桁行は西側柱列で北から 1.63 m・1.60 m・1.88 m で総長約 5.11 m である。梁行は南妻で西から 2.20 m・2.03 m で総長約 4.23 m である。

[出土遺物] P5204 からロクロ調整の土師器甕 3 点 (15g)、P5207 から調整不明の土師器甕 1 点 (5g)、P5209 から非ロクロ調整の土師器杯 1 点 (5g)、須恵器杯 1 点 (20g)、P5224 から縄文土器 1 点 (25g)、P5232 からロクロ調整の土師器杯 1 点 (10g)、P5233 からロクロ調整の土師器杯 1 点 (40g)、甕 1 点 (20g) が出土している。図示できたものは、P5233 から出土した土師器杯・甕 (第 16 図 4・5)、P5209 から出土した須恵器杯 (6) である。第 16 図 4・5 は体部下半から底部まで手持ちヘラケズリで器面調整が施される。

【SB 221 掘立柱建物跡】(第 11・15 図)

[位置] 5次調査区(南西) [確認面] 地山 [重複] SB221:P5223 → SD16、SB221:P5213 → P5212 (SD16、P5212 よりも古い)。SB220・222 と範囲が重複するが、柱穴の重複がないため新旧関係は不明。

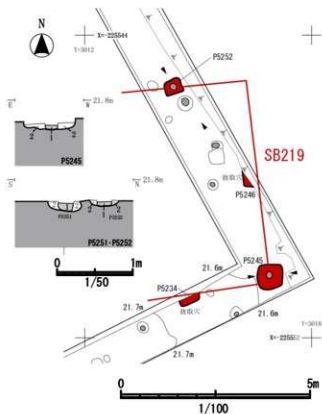
[構造] 東西 1 間以上、南北 1 間の東西棟と想定される。東側は調査区外にかかる。

[柱穴] 直径 0.50 m ~ 0.72 m のやや不整な円形・隅丸方形で、深さは最も深いもので 0.37 m である。埋土は地山ブロック・地山粒子を含む暗褐色・にぶい黄褐色シルトなどである。

[柱痕跡] 直径約 0.20 ~ 0.30 m の円形である。

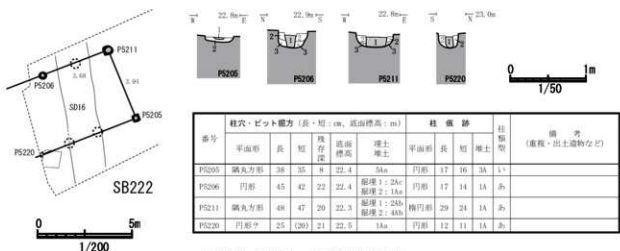
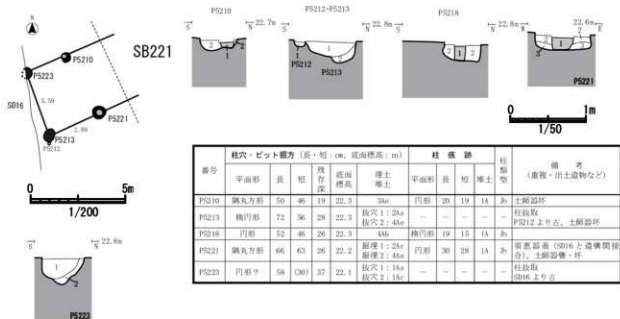
[規模・柱間] 桁行は 1 間のみ調査区にかかり、南側柱列で 2.89 m を測る。梁行は西妻で総長約 3.59 m である。

[出土遺物] P5210・5213 から土師器杯各 1 点



番号	柱穴・ピット置方(長・短・深・底面標高:m)				埋土	柱 痕 跡				柱 間 (重複・出土遺物など)	
	平面形	長	短	底面標高		平面形	長	短	埋土		
P5234	隅丸方形	83	(17)	14	21.5	柱穴: 2Aa	-	-	-	-	柱痕跡
P5245	隅丸方形	67	64	12	21.4	15b	円形	18	15	1A	あ
P5246	隅丸方形	(43)	(27)	19	21.3	柱穴: 1Ab	-	-	-	-	柱痕跡、土師器
P5232	隅丸方形	44	44	7	21.4	35a	円形	18	17	2A	あ

第 14 図 SB219 掘立柱建物跡



第15図 SB221～222 掘立柱建物跡

(各5g)、P5221から土師器環3点(10g)、甕2点(10g)、P5221から須恵器蓋が出土している。土師器は全てロクロ調整である。図示できたものはP5221から出土した須恵器蓋(第16図3)である。SD16・3層から出土した破片と遺構間接合する。体高が低く、器面上半とつまみ部は破損しており、口縁部端部が下向きに折り返される。

【SB 222 掘立柱建物跡】(第11・15図)

〔位置〕5次調査区(南西)〔確認面〕地山〔重複〕SB220・221と重複するが、柱穴の重複がないため新旧関係は不明。

〔構造〕東西1間以上、南北1間の東西棟と想定される。

〔柱穴〕直径0.25m～0.48mのやや不整な円形であり、深さは最も深いもので0.22mである。埋土は地山ブロック・地山粒子を含む暗褐色・にぶい黄褐色シルトなどである。

〔柱痕跡〕直径約0.10～0.30mの円形である。

〔規模・柱間〕桁行は北側柱列の一部のみが確認され、2間分と推定されるP5206-5211間の長さが

約 3.68 m である。梁行は東妻で総長約 3.94 m である。

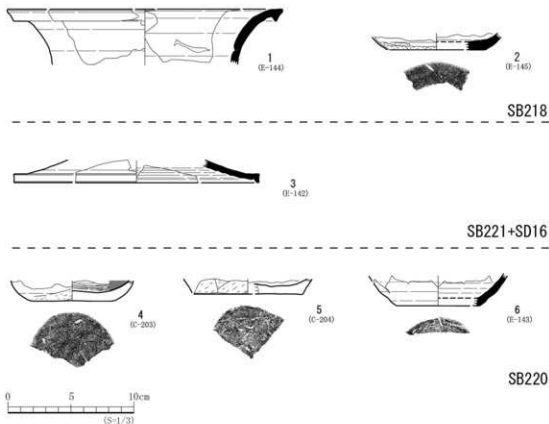
[出土遺物] 出土していない。

【SA 35 柱穴列】(第 17 図)

[位置] 4 次調査区 T-2 (北) [確認面] 地山 [重複] SA5:P5164 が P5163 と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 南北に伸びる 2 間の柱穴列である。東西いずれかに展開する掘立柱建物跡の可能性はある。

[柱穴] 直径 0.52 m ~ 0.65 m の隅丸方形あるいは不整な円形で、平面確認のみのため深さ・断面形は不明である。埋土は平面で地山ブロックを含む暗褐色シルトを記録した。



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【径法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他特徴の順に記述】	登録
1	SB218-P5275 扇方埴土	須恵器	甕	口縁部 ~ 底部	外面:ロクロナダ、内面:ロクロナダ、色調:外面・暗灰色(S5/1)、内面・灰色(S4/1)、法量:口径(21.8)cm・残存高4.4cm・器厚0.4~0.65cm、口縁端部つまみ下向き	E-144
2	SB218-P5294 扇方埴土	須恵器	甕	底部 ~ 底部	外面:底部ロクロナダ・底部下半~底部手持ちヘラケズリ、内面:ロクロナダ、色調:外面・黄灰色(2.5YR5/1)、内面・灰色(7.5YR7/4)、法量:底径(7.8)cm・残存高1.3cm・器厚0.45~0.85cm	E-145
3	SB221-P5221 S304 扇方埴土	須恵器	甕	口縁部 ~ 底部	外面:ロクロナダ、内面:ロクロナダ、色調: (2.5YR5/1)、内面・灰色(S5/1)、法量:口径(19.4)cm・残存高1.8cm・器厚0.3~0.5cm、SD16との遺構間接合	E-142
4	SB220-P5233 1層	土師器	甕	底部 ~ 底部	外面:ロクロナダ・底面、底部下半手持ちヘラケズリ、内面:ヘクミガキ→黒色処理、色調:外面・褐色(7.5YR6/0)、内面:黒色(7.5YR1.7/1)、法量:底径(6.4)cm・残存高1.7cm・器厚0.3~0.8cm	C-203
5	SB220-P5233 1層	土師器	甕	底部	外面:底部~底部手持ちヘラケズリ、内面:ロクロナダ、色調:外面・暗灰色(7.5YR4/1)/にぶい褐色(8.7.5YR5/4)、内面・にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量:底径(8.6)cm・残存高1.2cm・器厚0.3~1.0cm	C-204
6	SB220-P5209 扇方埴土	須恵器	甕	底部 ~ 底部	外面:ロクロナダ・底部回転承切、内面:ロクロナダ、色調:外面・灰色(S5/1)、内面・灰白色(S7/2)、法量:底径(6.6)cm・残存高2.6cm・器厚0.3~0.6cm	E-143

第 16 図 SB 掘立柱建物跡 出土遺物

[柱痕跡] 直径約 0.20 m の円形である。

[規模・柱間] 柱間は北から 2.45 m、2.54 m の総長約 4.99 m である。

[出土遺物] 出土していない。

【SA 36 柱穴列】(第 17 図)

[位置] 4 次調査区 T-2 (北) [確認面] 地山 [重複] SA36:P5171 が P5170 と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 南北に伸びる 2 間の柱穴列である。東西いずれかに展開する掘立柱建物跡の可能性はある。

[柱穴] 一边 0.58 m ~ 0.77 m の不整な隅丸方形で、平面確認のみのため深さ・断面形は不明である。埋土は平面で地山ブロックを含む暗褐色シルトなどを記録した。

[柱痕跡] 直径約 0.20 m の円形である。

[規模・柱間] 柱間は北から 1.67 m、(1.67) m の総長約 3.34 m である。

[出土遺物] 出土していない。

【SA 37 柱穴列】(第 10-18 図)

[位置] 5 次調査区 (北) [確認面] 地山 [重複] SA37:P5318 が P5319 と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 東西に伸びる 2 間の柱穴列である。北西側に展開する掘立柱建物跡の可能性はある。

[柱穴] 一边 0.46 m ~ 0.86 m の不整な隅丸方形で、深さは最も深いもので 0.35 m である。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐・暗褐色シルトなどである。

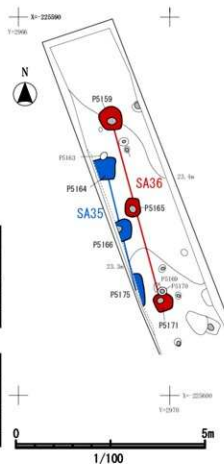
[柱痕跡] 直径約 0.20 m の円形である。

[規模・柱間] 柱間は西から 2.45 m、2.90 m の総長約 5.35 m である。

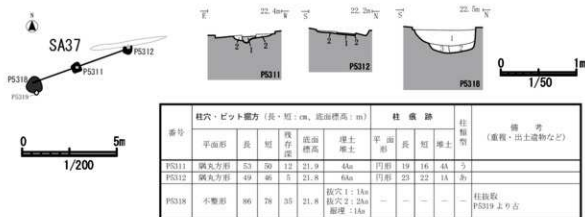
[出土遺物] 出土していない。

番号	柱穴・ピット四方 (長・短・sw、底面標高:m)				柱 痕 跡				柱 型 (重複・出土遺物など)	備 考		
	平面形	長	短	残存深	底面標高	埋土 層土	平面形	長			短	層土
SA35-P5164	隅丸方形?	63	(54)	-	-	1Ab	円形	23	22	1A	-	平面、P5163 より古
SA35-P5166	隅丸方形?	58	(36)	-	-	1Ab	隅円形	19	12	1A	-	平面
SA35-P5175	隅丸方形?	77	(16)	-	-	1Aa	-	-	-	-	-	平面 柱柱敷 or 柱切敷

番号	柱穴・ピット四方 (長・短・sw、底面標高:m)				柱 痕 跡				柱 型 (重複・出土遺物など)	備 考		
	平面形	長	短	残存深	底面標高	埋土 層土	平面形	長			短	層土
SA36-P5159	隅円形	65	36	-	-	2ka	隅円形	24	18	1A	-	平面
SA36-P5165	隅円形	52	42	-	-	1Ab	円形	20	18	1A	-	平面
SA36-P5171	円形	59	51	-	-	5Ab	円形	18	15	1A	-	平面、P5170 より古



第 17 図 SA35-36 柱穴列



第 18 図 SA37 柱穴列

(3) 土坑

【SK 234 土坑】(第 19 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SD16、P5314と重複し、これより古い。P5343と重複し、これより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.88m、短径約1.17mのやや不整な楕円形で、深さ0.34mを測る。断面は不整な台形を呈する。

〔堆積土〕6層に細分され、地山粒子・地山ブロックを含む暗褐・褐色シルトなどの人為堆積土である。底面には地山粒子を多量に含むにぶい黄褐色シルト(6層)が堆積する。

〔出土遺物〕堆積土からロクロ調整の土師器甕3点(20g)が出土している。図示できたものはない。

【SK 235 土坑】(第 19 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SD16と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.40m、短径約0.49mの楕円形で、深さ0.40mを測る。断面はやや凹凸のある底面から、両側の壁が垂直に立ち上がる。底面中央にビット状の落ち込みがあり、形状から陥し穴の可能性が考えられる。

〔堆積土〕4層に細分され、地山粒子・炭化物片を含む黒褐・暗褐色シルトや地山ブロック・黒色土ブロックを含むにぶい黄褐色シルトなどの自然堆積土である。4層(にぶい黄褐色シルト)はビット状の落ち込みに堆積している。

〔出土遺物〕出土していない。

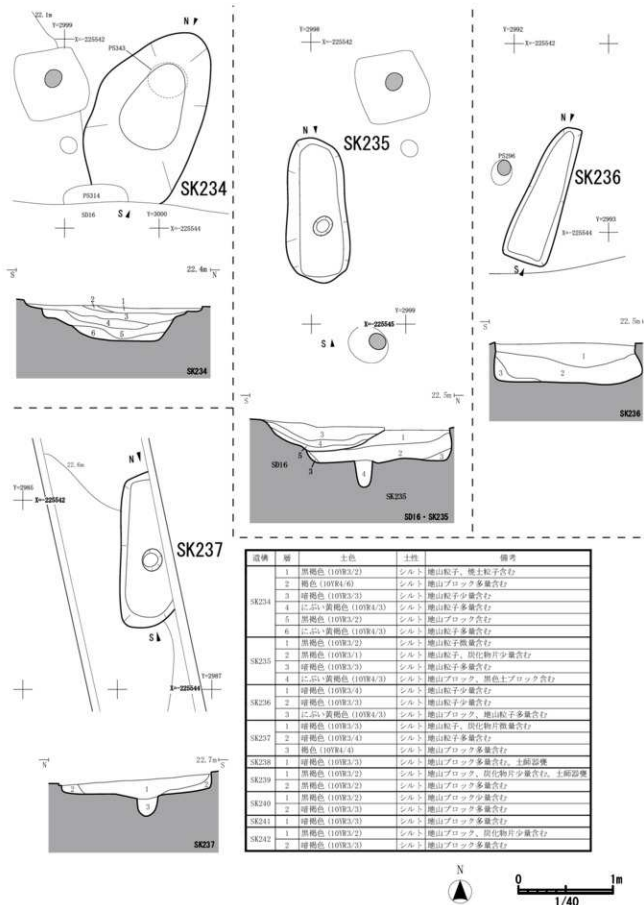
【SK 236 土坑】(第 19 図)

〔位置〕5次調査区(西寄り)〔確認面〕地山〔重複〕なし

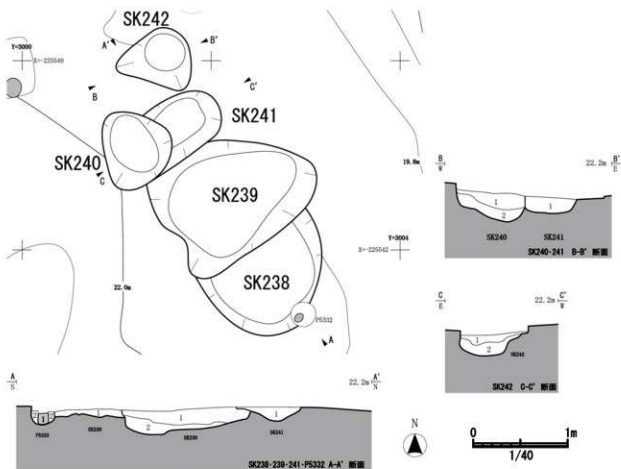
〔形状・規模〕平面形は長辺約1.43m、短辺約0.37mの不整な長方形で、深さ0.45mを測る。断面は平坦な底面に対し、南側の壁は垂直に、北側の壁は外側に膨らみながら立ち上がる。形状から陥し穴の可能性が考えられる。

〔堆積土〕3層に細分され、地山粒子を少量含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。



第19図 SK234～237土坑



第20図 SK 238～242土坑

【SK 237 土坑】(第19図)

〔位置〕5次調査区(北西隅)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約1.65m、短径約0.55m以上の楕円形とみられ、深さ0.2mを測る。断面は平坦な底面に対し、両側の壁が垂直に立ち上がる。東半分は調査区外にあたる。中央にピット状の落ち込みがあり、形状から陥し穴の可能性が考えられる。

〔堆積土〕3層に細分され、地山粒子・炭化物片を含む暗褐色シルトなどの自然堆積土である。ピット状の落ち込みには3層(褐色シルト)が堆積する。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 238 土坑】(第20図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SK239・P5332と重複し、これらより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.29m、短径約0.85mの円形あるいは楕円形とみられ、深さ0.12mを測る。断面は底面に細かい凹凸のある形状を呈する。北半は失われている。

〔堆積土〕1層のみであり、地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトの人為堆積土である。

〔出土遺物〕1層からロクロ調整の土師器甕4点(45g)が出土している。図示できたものはない。

【SK 239 土坑】(第 20 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SK238と重複し、これより新しい。SK240・241と重複し、これらより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約1.60m、短径約1.40mの不整形で、深さ0.30mを測る。断面は南側が深く、北側に段のつく底面に対し、両側の壁がほぼ垂直に立ち上がる。北側の壁の一部は失われている。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロック・炭化物片を含む黒褐色シルトなどの人為堆積土である。

〔出土遺物〕1層からロクロ調整の土師器甕2点(40g)が出土している。図示できたものはない。

【SK 240 土坑】(第 20 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SK239・241と重複し、これらより新しい。

〔形状・規模〕平面形は長径約0.86m、短径約0.67mのやや不整形な円形で、深さ0.35mを測る。断面は不整形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黒褐色シルトなどの人為堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 241 土坑】(第 20 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕SK239と重複し、これより新しい。SK240と重複し、これより古い。

〔形状・規模〕平面形は長径約0.73m以上、短径約0.70m、深さ0.17mを測る。平面形は楕円形とみられ、断面は底面中央が深く、両側が緩やかに立ち上がる形状を呈する。

〔堆積土〕1層のみであり、地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトの人為堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 242 土坑】(第 20 図)

〔位置〕5次調査区(中央)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕平面形は長径約0.73m、短径約0.63mの不整形で、深さ0.30mを測る。断面は西側に段のつく不整形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分され、地山ブロックを含む暗褐・黒褐色シルトなどの人為堆積土である。

〔出土遺物〕出土していない。

【SK 243 土坑】(第 8 図)

〔位置〕6次調査T-3(北)〔確認面〕地山〔重複〕なし

〔形状・規模〕全体の半分ほどを確認し、南側半分はトレンチ外にかかる。長径約1.21m、短径約0.43m以上の円形あるいは楕円形とみられ、平面確認のみであるため断面形は不明である。

〔堆積土〕確認面で地山ブロックを少量含む黒褐色(10YR3/2)シルトの堆積を記録している。

〔出土遺物〕出土していない。

(4) 溝跡

【SD1溝跡】(第21・23図)

〔位置〕5次調査区(西側)〔確認面〕地山〔重複〕SD16、P5344と重複し、これより古い。P5238・5239・5258と重複し、これより新しい。

〔規模・方向・断面形〕南から北へ延びており、検出長は約19.80mである。上幅約0.67m、下幅約0.28m、深さ約0.44mで、断面は底面の平坦な台形、あるいは壁が垂直に立ち上がる形状を呈する。

〔堆積土〕3層に細分され、炭化物片・地山粒子を含む暗褐色・にぶい黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から須恵器甕1点(135g)、2～3層からロクロ調整の土師器甕8点(130g)が出土している。図示できたものはない。

【SD2a溝跡】(第21・23・25・26図)

〔位置〕5次調査区(西側)〔確認面〕地山〔重複〕SD1・2b、P5241・5242・5333・5346・5347・5350・5351・5352と重複し、これより新しい。

〔規模・方向・断面形〕北から南へ延びており、検出長は約20.50mである。上幅約3.61m、下幅約0.90m、深さ約0.69mで、断面は台形を呈する。

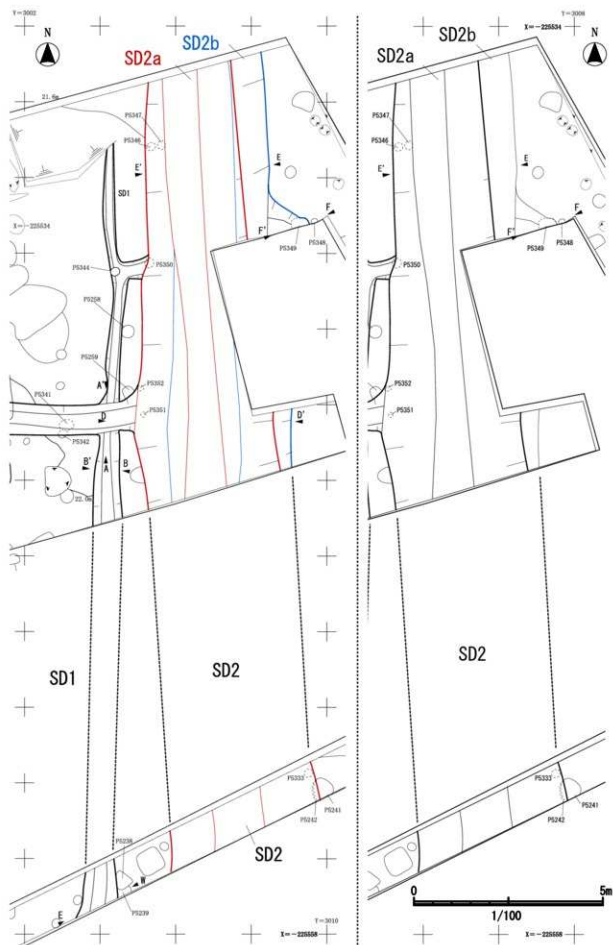
〔堆積土〕8層に細分され、炭化物片・地山粒子を含む黒褐色～灰黄褐色シルトの自然堆積土(2～3d)と、その上層の地山ブロック・小礫を含む暗褐色シルトの人為堆積土(1a～1c)に分かれる。

〔出土遺物〕縄文土器、土製品、土師器甕・坏・甗・蓋、赤焼土器坏、須恵器坏・甕・高台付坏・蓋・瓶類、石器(剥片)などが出土している。層位ごとの詳細は第2表を参照。図示できたものは1a～1c層から出土した土製品(土錘)1点(第25図1)、土師器甕2点(2・6)、坏4点(4・5・8・9)、甗1点(7)、赤焼土器坏1点(3)、須恵器坏1点(第26図7)、甕4点(1・4・5・8)、瓶類2点(2・3)、高台付坏1点(6)、2層から出土した須恵器甕1点(第26図9)、3b層から出土した土師器蓋1点(第25図10)、須恵器坏1点(第26図10)である。土師器はロクロ・非ロクロ調整のものが混在する。非ロクロ調整の坏(第25図4・5・8)は体部から底部付近に手持ちヘラケズリが施され、内面はミガキののち黒色処理される。ロクロ調整の土師器には坏(9)、蓋(10)、甗(7)などがある。甗の底部資料(7)は体部ロクロナゲと、底部張り出し部分の内外面が手持ちヘラケズリで調整される。赤焼土器坏(3)は口縁部の破片資料であり、内面にコテ状工具を当てた痕跡が残る。須恵器には底部が突出する高台付坏(第26図6)や、福島県大戸窯産とみられる瓶類底部(3)などがある。

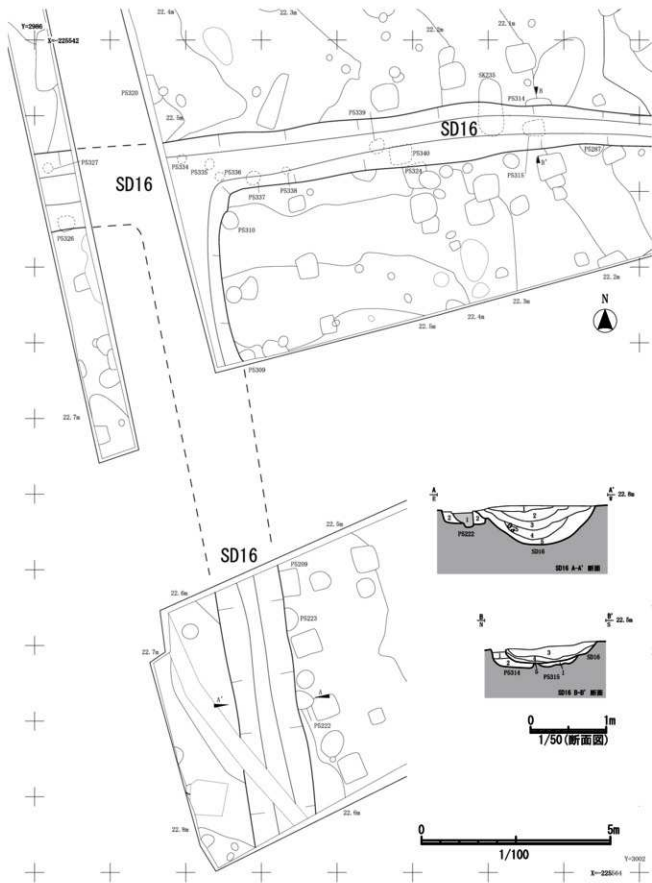
【SD2b溝跡】(第21・23・25・26図)

〔位置〕5次調査区(西側)〔確認面〕地山〔重複〕SD2aと重複し、これより古い。P5349と重複し、これより新しい。

〔規模・方向・断面形〕北から南へ延びており、検出長は約11.0mである。上幅約1.72m、下幅約0.96m、深さ約0.64mで、断面は台形を呈すると推測される。



第21図 SD1・2溝跡



第 22 圖 SD 16 溝跡

〔堆積土〕5層に細分され、炭化物片・小礫・地山粒子を含む黒褐色～灰黄褐色シルトの自然堆積土(5～7)と、その上層の地山ブロックを多量に含む黒褐・にぶい黄褐色シルトなどの人為堆積土(4a～4b)に分かれる。

〔出土遺物〕土師器坏・甕・甔、須恵器甕・蓋、石器(剥片)などが出土している。層位ごとの詳細は第2表を参照。図示できたものは6層から出土した土師器坏1点(第25図11)、須恵器蓋1点(第26図11)である。土師器坏は非クロ調整で体部下半にヘラケズリが施され、内面はミガキのち黒色処理される。口縁部はヨコナデが施され、ほぼ垂直に立ち上がる。須恵器蓋は宝珠形のつまみがつく中央部が明瞭に窪み、天井部は回転ヘラケズリで調整される。

〔SD 14 溝跡〕(第6図)

〔位置〕4次調査区 T-1 (東側) 〔確認面〕地山 〔重複〕P5151 と重複し、これより古い。

〔規模・方向・断面形〕北から南へ延びており、検出長は約 20.80 m、上幅約 0.9 m で、確認のみにとどめている。

〔堆積土〕確認面において地山粒子・炭化物片を含むにぶい黄褐色(10YR3/4)シルトの堆積を記録した。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SD 15 溝跡〕(第6図)

〔位置〕4次調査区 T-1 (中央) 〔確認面〕地山 〔重複〕SD14 と重複し、これより古い。

〔規模・方向・断面形〕西から東へ延びており、検出長は約 1.10 m、上幅約 0.33 m で、確認のみにとどめている。

〔堆積土〕確認面において地山粒子・炭化物片を含む暗褐色(10YR3/3)シルトの堆積を記録した。

〔出土遺物〕出土していない。

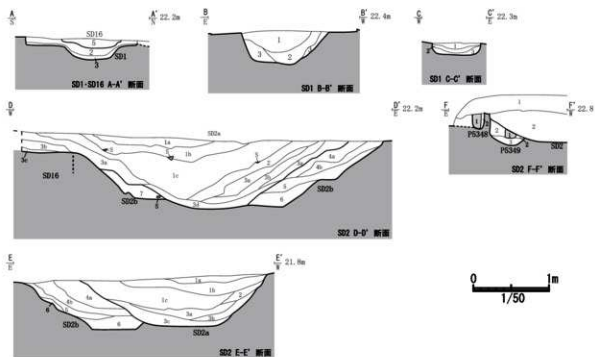
〔SD 16 溝跡〕(第22・23・24図)

〔位置〕5次調査区(中央) 〔確認面〕地山 〔重複〕P5309・5326、P5310・5315・5324、P5314・5340、P5223、P5222・52327・5334・5335・5336・5337・5338・5339・5341・5342、SD1 と重複し、これより新しい(SB214～218、SB220～2221より新しい)。

〔規模・方向・断面形〕東西に伸びる検出長 18.80 m の溝と、南北に伸びる検出長約 17.70 m の溝が直交した T 字形の平面形を呈する。これらに重複関係はなく一体である。上幅約 1.43 m、下幅約 0.4～0.5 m、深さ約 0.52 m で、断面は浅い U 字形を呈する。

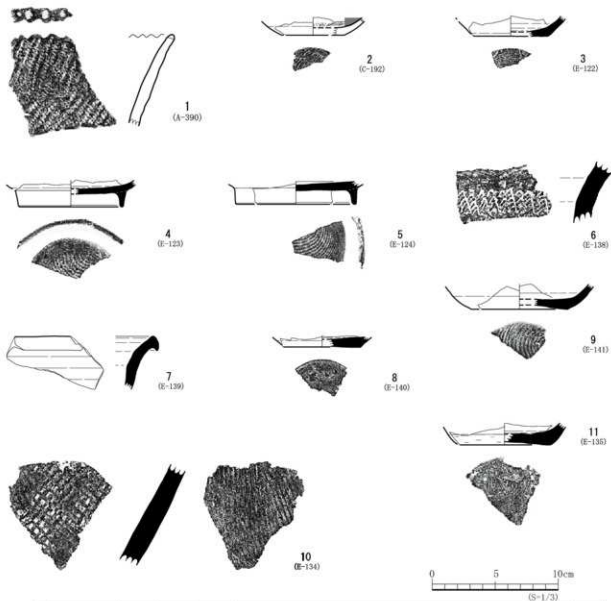
〔堆積土〕5層に細分され、炭化物片・地山粒子を含む暗褐・にぶい黄褐色シルトなどの自然堆積土である。

〔出土遺物〕縄文土器、土師器坏、須恵器坏・高台付坏・甕・蓋・瓶類、不明金属製品、石器(剥片)などが出土している。層位ごとの詳細は第2表を参照。図示できたものは4層から出土した縄文土器深鉢1点(第24図1)、3～5層から出土した土師器坏1点(2)、須恵器坏3点(3・8・9)、高台付坏2点(4・5)、甕2点(6・7)、蓋1点(第16図3)、2層から出土した須恵器坏1点(第24図11)、甕1点(10)である。縄文土器(1)は口縁



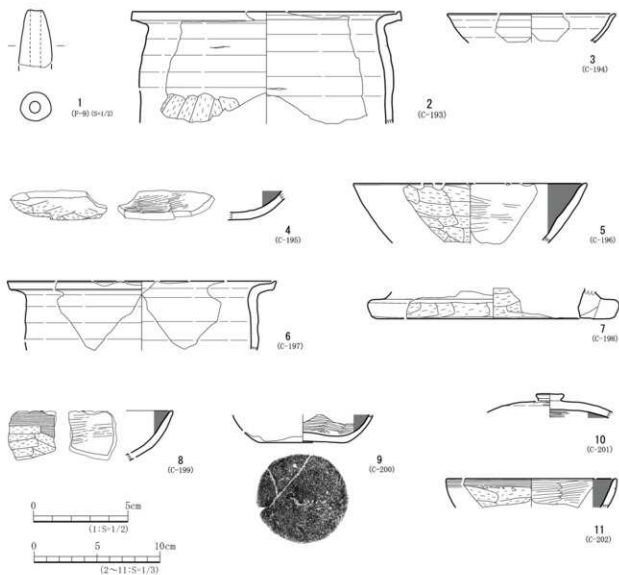
遺構	層	土色	土性	備考
SD16	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子・小礫少量含む。自然堆積層
	2	に高い黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子・粘土粒子微量含む。自然堆積層。須恵器高台付坪・甕・甕・瓶類
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子・粘土ブロック・粘土粒子少量含む。自然堆積層。須恵器坪・高台付坪・甕・甕・瓶類・鉄製品。須恵器坪・甕
	4	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子含む。自然堆積層。縄文土器・須恵器坪・甕
	5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量。炭化物片微量含む。自然堆積層。須恵器甕
SD1	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子少量含む。自然堆積層
	2	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子少量。炭化物片微量含む。自然堆積層。土師器甕 (2~3層)
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。自然堆積層
SD2a	1a	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック・小礫多量に含む。人為堆積層。縄文土器・土師器坪・甕・須恵器坪・甕・瓶類
	1b	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック・小礫多量に含む。人為堆積層。土師器坪・甕・甕・須恵器坪・甕・瓶類
	1c	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック・小礫多量に含む。人為堆積層。縄文土器・土師器坪・甕・高台付坪・高坪・須恵器坪・甕・高台付坪・瓶類・石器
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。自然堆積層。土師器坪・甕・高台付坪・須恵器坪・甕・甕・石器
	3a	に高い黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物片・地山粒子少量含む。自然堆積層。縄文土器・土師器坪・甕・須恵器甕・瓶類
	3b	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物片・地山粒子少量含む。自然堆積層。土師器甕・甕・須恵器坪・甕
	3c	に高い黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物片・地山粒子少量含む。自然堆積層。土師器坪・甕・須恵器坪
	3d	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子少量含む。自然堆積層。縄文土器・須恵器甕
SD2b	4a	に高い黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック非常に多く含む。人為堆積層。土師器坪・甕・須恵器瓶類
	4b	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック多量に含む。人為堆積層。土師器坪・甕・須恵器坪
	5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子・炭化物片・小礫含む。自然堆積層。縄文土器・土師器坪・甕・須恵器坪・甕・瓶類・石器
	6	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子含む。自然堆積層。土師器坪・甕・須恵器甕・甕・石器
	7	に高い黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒子含む。自然堆積層。土師器甕

第 23 図 SD 1・2・16 溝跡 断面図



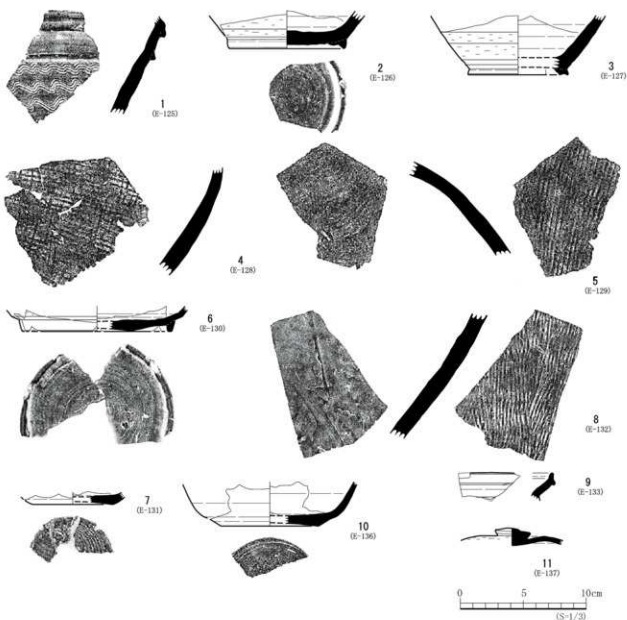
No.	遺物名・層	種類	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SD16 4層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部刻み目・胴部多糸18編文、内面：ナデ、色調：外面・にぶい褐色(T.5187/4)、内面・褐色色(T.5184/1)、法量：残存高6.4cm・器厚0.4~0.8cm、新土に織流産痕	E-390
2	SD16 3~5層	土師器	杯	体部~ 底部	外面：体部コクロナデ・底部同転糸切、内面：ヘラシギキ→黒色処理、色調：外面・明赤褐色(S185/6)、内面・明赤褐色(S185/6)/黒褐色(S183/1)、法量：直径(5.0)cm・残存高1.4cm・器厚0.3~0.6cm	E-192
3	SD16 4~5層	須恵器	杯	体部~ 底部	外面：体部コクロナデ・底部同転糸切、内面：コクロナデ、色調：外面・灰色(S186/1)、内面・灰白色(T.517/1)、法量：直径(6.0)cm・残存高1.6cm・器厚0.4~0.7cm	E-122
4	SD16 3~5層	須恵器	高台付杯	体部~ 底部	外面：体部コクロナデ・底部同転糸切→コクロナデによる高台限り付、内面：コクロナデ、色調：内外面・灰色(S186/1)、法量：直径(8.4)cm・残存高2.1cm・器厚0.3~0.5cm	E-123
5	SD16 3~5層	須恵器	高台付杯	体部~ 底部	外面：体部コクロナデ・底部同転糸切→コクロナデによる高台限り付、内面：コクロナデ、色調：外面・灰色(10197/1)、内面：にぶい黄褐色(10197/2)、法量：直径(9.0)cm・残存高1.8cm・器厚0.6cm	E-124
6	SD16 3層	須恵器	甕	口縁部	外面：コクロナデ→縞織波状文、内面：コクロナデ、色調：外面・黄褐色(10198/2)、内面・にぶい褐色(T.5197/2)、法量：残存高1.8cm・器厚1.3~1.5cm	E-138
7	SD16 3層	須恵器	甕	口縁部	外面：コクロナデ、内面：コクロナデ、色調：外面・暗灰色(N3/1)、内面・灰色(N3/1)、法量：残存高4.2cm・器厚0.6~0.8cm	E-139
8	SD16 3層	須恵器	杯	体部~ 底部	外面：コクロナデ・底部同転ヘラ切、内面：コクロナデ、色調：外面・灰色(S186/1)、内面・灰色(N5/1)、法量：直径(6.2)cm・残存高0.8cm・器厚0.3~0.8cm	E-140
9	SD16 4層	須恵器	杯	体部~ 底部	外面：コクロナデ・底部同転糸切、内面：コクロナデ、色調：内外面・灰白色(S17/1)、法量：直径(7.6)cm・残存高2.0cm・器厚0.4~0.9cm	E-141
10	SD16 2層	須恵器	甕	体部	外面：平行タタキ→ナデ、内面：格子状当て具痕、色調：外面・灰色(1014/1)、内面・オリーブ灰色(1015/2)、法量：残存高0.0cm・器厚1.2~1.5cm	E-134
11	SD16 2層	須恵器	杯	体部~ 底部	外面：コクロナデ→同転ヘラケズリ・底部同転糸切、内面：コクロナデ、色調：外面・淡赤褐色(T.5197/2)/褐色色(T.5185/1)、内面・明褐色(T.5187/2)、法量：直径(7.4)cm・残存高1.7cm・器厚0.5~1.1cm	E-135

第24図 SD16溝跡出土遺物



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	S20a 1層	土製品	土埴	-	色調:黒色(10YR1.7/1),法量:全長(3.1)cm・幅1.75~0.7cm・厚0.65~0.15cm・孔径0.5cm,全体の中分ほどが残存。	F-9
2	S20a 1層	土師器	甕	口縁部 ~体部	外面:口縁部~体部上部ロクロナデ・体部ヘラケズリ,内面:ロクロナデ・輪轆痕,色調:外面・にぶい褐色(5YR7/4),内面・にぶい黄褐色(10YR7/4),法量:口径(19.2)cm・残存高8.0cm・器厚0.5~0.7cm	C-190
3	S20a 1層	赤埴土器	坏	口縁部 ~体部	外面:ロクロナデ,内面:ロクロナデ,色調:外面・にぶい褐色(5YR7/4),内面・褐色(5YR7/6),法量:口径(13.2)cm・残存高2.3cm・器厚0.2~0.3cm,口縁部中央外周	C-194
4	S20a 1b層	土師器	坏	体部 ~底部	外面:手持ちヘラケズリ,内面:ヘラミガキ→黒色処理,色調:外面・にぶい褐色(7.5YR7/4),内面:黒色(2.5YR2/1),法量:残存高2.3cm・器厚0.5~0.6cm	C-196
5	S20a 1b層	土師器	坏	口縁部 ~体部	外面:手持ちヘラケズリ,内面:ヘラミガキ(磨削)→黒色処理,色調:外面・褐色(5YR6/6),内面:黒色(5Y2/1),法量:口径(18.0)cm・残存高4.7cm・器厚0.3~0.7cm	C-196
6	S20a 1b層	土師器	甕	口縁部 ~体部	外面:ロクロナデ,内面:ロクロナデ,色調:外面・にぶい褐色(7.5YR5/4),内面・にぶい褐色(7.5YR6/4),法量:口径(21.2)cm・残存高5.5cm・器厚0.5~0.8cm	C-197
7	S20a 1b層	土師器	甕	口縁部 ~底部	外面:体部ロクロナデ・底部手持ちヘラケズリ,内面:手持ちヘラケズリ,色調:外面・にぶい褐色(7.5YR6/4)/黄褐色(7.5YR5/1),内面・にぶい褐色(7.5YR7/3),法量:口径(19.4)cm・残存高2.4cm・器厚0.8~1.8cm	C-198
8	S20a 1c層	土師器	坏	口縁部 ~体部	外面:口縁部ヨコナデ・体部手持ちヘラケズリ,内面:ヘラミガキ→黒色処理,色調:外面・黒褐色(7.5YR3/1)/にぶい黄褐色(10YR7/3),内面・黒褐色(7.5YR3/1),法量:残存高3.9cm・器厚0.3~0.6cm	C-199
9	S20a 1c層	土師器	坏	体部 ~底部	外面:ロクロナデ(磨削)・底部回転ヘラ切→回転ヘラケズリ,内面:ヘラミガキ→黒色処理,色調:外面・にぶい褐色(7.5YR7/4)/黒色(N1.5),内面・黒色(N1.5),法量:口径(13.4)cm・残存高2.2cm・器厚0.3~0.7cm	C-200
10	S20a 3b層	土師器	甕	つまみ ~体部	外面:下平ロクロナデ・上半手持ちヘラケズリ→ロクロナデによるつまみ部の磨付,内面:ヘラミガキ→黒色処理,色調:外面・にぶい褐色(7.5YR7/4),内面:黒褐色(2.5YR3/1),法量:残存高1.9cm・器厚0.5~0.13cm	C-201
11	S20b 6層	土師器	坏	口縁部 ~体部	外面:口縁部ヨコナデ・体部手持ちヘラケズリ→黒色処理,内面:ヘラミガキ→黒色処理,色調:内外面・黒色(5Y2/1),法量:口径(13.4)cm・残存高2.3cm・器厚0.3~0.5cm	C-202

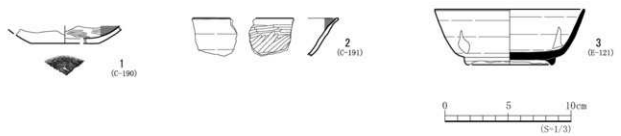
第25図 S D 2a-2b 清跡出土遺物(1)



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴【注法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	図録
1	5D2a 1層	須恵器	甕	口縁部	外面：口縁部黄褐色付け→ロクロナデ、口縁部下半ロクロナデ→縞線或状況4条、内面：ロクロナデ、色調：外面・赤灰色(2.5Y8/1)、内面・黄灰色(5Y8/1)、法量：残存高7.7cm・器厚0.7～1.0cm	E-125
2	5D2a 1a層	須恵器	瓶類	底部	外面：回転ヘラケズリ→ロクロナデによる底部高台起り付け、内面：ロクロナデ、色調：内外面・黄灰色(2.5Y8/1)、底径9.4cm・残存高3.0cm・器厚0.8～1.0cm	E-126
3	5D2a 1b層	須恵器	瓶類	底部 ～底部	外面：回転ヘラケズリ→ロクロナデによる底部高台起り付け、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(7.5Y6/1)、内面：灰白色(0Y7/1)、法量：底径8.0cm・残存高4.7cm・器厚0.6～1.1cm	E-127
4	5D2a 1b層	須恵器	甕	底部	外面：格子状タタキ、内面：同心円状当て具痕→ナデ、色調：外面・灰褐色(0S/1)、内面・灰色(0M/1)、法量：残存高8.5cm・器厚0.7～1.2cm	E-128
5	5D2a 1b層	須恵器	甕	底部	外面：平行タタキ、内面：同心円状当て具痕→ナデ、色調：外面・灰白色(0Y7/1)、内面・灰色(0M/1)、法量：残存高7.4cm・器厚0.9～1.1cm、外面自然釉付着	E-129
6	5D2a 1b層	須恵器	高台付杯	底部 ～底部	外面：回転ヘラケズリ→ロクロナデによる底部高台起り付け、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(0S/1)/オリーブ灰色(2.5Y8/1)、内面・灰色(2.5Y8/1)、法量：底径(11.8)cm・残存高2.0cm・器厚0.3～0.4cm	E-130
7	5D2a 1c層	須恵器	杯	底部 ～底部	外面：底部ロクロナデ・底部回転糸切、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(0M/1)/灰黄色(2.5Y7/2)、内面・灰色(0S/1)、法量：底径(6.4)cm・残存高0.9cm・器厚0.4～0.7cm	E-131
8	5D2a 1c層	須恵器	甕	底部	外面：平行タタキ、内面：当て具痕→ナデ、色調：内外面・灰色(10Y5/1)、法量：残存高10.0cm・器厚1.0～1.2cm	E-132
9	5D2a 2層	須恵器	甕	口縁部	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(0A/1)、内面・灰色(0M/1)、法量：残存高2.2cm・器厚0.5～0.7cm	E-133
10	5D2a 2b層	須恵器	杯	底部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ、内面：ロクロナデ、色調：内外面・灰色(0S/1)、法量：底径(7.8)cm・残存高3.5cm・器厚0.3～1.0cm	E-134
11	5D2b 6層	須恵器	高	つまみ部 ～天井	外面：天井部回転ヘラケズリ・ロクロナデによるつまみ部起り付け、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(0M/1)、内面・灰色(0S/1)、法量：残存高1.4cm・器厚0.3cm	E-137

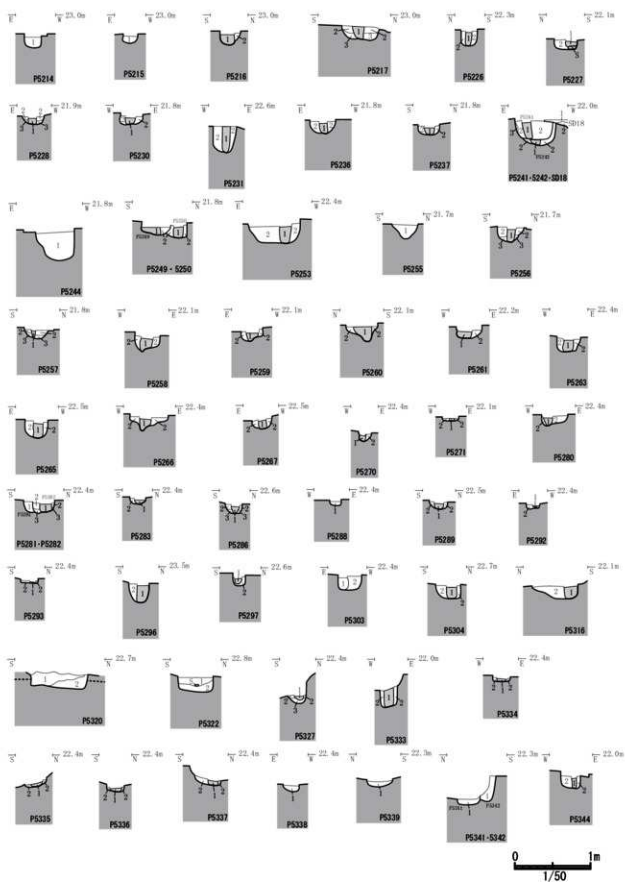
第26図 S D 2a・2b 溝跡出土遺物(2)

番号	柱穴・ピット跡方 (長・短・cm, 底面深高・m)				柱穴跡			備考 (産物・出土遺物など)				
	平面形	長	短	残存深	平面形	長	短					
PS243	円形	26	23	21	1.8a	—	—	—				
PS244	楕円方形	53	52	36	21.0	柱穴: 2.8a	—	—				
PS247	円形	20	17	15	21.4	1.8a	—	—				
PS248	円形	28	26	15	21.4	1.8a	—	—				
PS249	楕円方形	38	37	15	21.3	1.8a	—	—				
PS250	楕円方形	29	(24)	21	21.3	2.0a	円形	20	18	11.6	a	PS249より古
PS251	楕円方形	43	36	14	21.3	2.5a	円形	22	20	11.6	a	土師器
PS252	楕円方形	70	65	24	21.6	1.8a	円形	19	16	11.6	a	土師器
PS254	円形	34	(30)	36	21.2	2.5a	楕円形	13	8	11.6	a	—
PS255	楕円形	(40)	40	20	21.3	2.5a	—	—	—	—	—	柱穴跡?土師器
PS256	円形	34	34	20	21.3	2.5a	楕円形	16	12	11.6	a	—
PS257	楕円形	33	27	14	21.4	断面1: 1.8a 断面2: 5.6a	円形	9	7	11.6	a	—
PS258	円形	36	33	23	21.5	1.8a	円形	16	16	11.6	a	断面より古土師器
PS259	円形	32	(30)	20	21.6	1.8a	楕円形	20	15	11.6	a	断面より古
PS260	円形	40	(32)	23	21.6	2.3a	楕円形	24	16	11.6	a	—
PS261	円形	34	34	25	21.6	2.5a	円形	22	19	11.6	a	縄文土器・土師器
PS263	楕円方形	32	29	19	21.6	1.8a	円形	14	13	11.6	a	土師器
PS265	楕円方形	34	30	26	22.0	1.8a	円形	13	10	11.6	a	—
PS266	楕円方形	49	42	22	22.0	1.8a	円形	20	17	25.4	—	—
PS267	楕円方形	27	24	12	22.1	1.8a	円形	12	9	11.6	a	—
PS270	円形	18	17	14	21.9	3.8a	円形	9	7	11.6	a	—
PS271	円形	21	18	4	21.9	3.8a	円形	9	6	11.6	a	土師器
PS277	楕円方形	(44)	42	14	22.0	柱穴: 3.8a 断面: 5.6a	—	—	—	—	—	柱穴跡 断面より古
PS279	円形	36	30	10	22.1	1.8a	—	—	—	—	—	—
PS280	楕円形	39	31	13	22.1	1.8a	楕円形	16	12	11.6	a	—
PS281	円形	29	(23)	17	22.0	1.8f	—	—	—	—	—	PS282より古 縄文土器
PS282	円形	30	26	20	22.0	断面1: 1.8a 断面2: 4.6a	楕円形	15	11	11.6	a	PS281より古
PS283	円形	23	23	10	22.1	2.5a	楕円形	18	14	11.6	a	—
PS284	円形	17	17	7	22.2	2.5a	—	—	—	—	—	—
PS285	円形	21	19	20	22.2	断面: 1.8a 断面: 6.6a	—	—	—	—	—	—
PS286	円形	22	22	12	22.2	断面1: 4.8a 断面2: 2.8a	円形	12	10	11.6	a	—
PS288	円形	17	16	7	22.1	1.8a	—	—	—	—	—	—
PS289	楕円形	23	17	10	22.3	2.5a	楕円形	16	10	11.6	a	—
PS290	円形	21	20	12	21.9	2.5a	—	—	—	—	—	—
PS291	円形	17	16	8	22.0	2.5a	—	—	—	—	—	—
PS292	円形	18	17	6	22.1	1.8b	円形	11	9	11.6	a	—
PS293	円形	22	21	4	22.1	1.8b	円形	9	6	11.6	a	—
PS296	円形	27	23	26	22.0	3.5a	円形	16	14	11.6	a	—
PS297	円形	19	18	16	22.3	2.0a	円形	10	10	11.6	a	PS296より古
PS303	楕円形	32	22	22	22.0	2.3a	円形	16	13	11.6	a	—
PS304	楕円形	30	23	18	22.2	2.2a	円形	15	14	11.6	a	—
PS307	円形	30	27	8	22.3	2.5a	—	—	—	—	—	PS296より古 土師器
PS313	円形	65	(25)	10	22.1	柱穴: 2.8a	—	—	—	—	—	柱穴跡、断面より古



No.	遺構名・層	種類	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	PS122 柱穴跡	土師器	杯	体部→底部	外面: 底部ロクロナデ、底部円形余切一ナデ、内面: ヘラミガキ→黒色処理、色調: 外面・黄色(105W/71)、内面: 濃い黄褐色(105W/30)、法量: 底径(5.4)cm・残存高1.4cm・器厚0.3~0.5cm	C-190
2	PS122 柱穴跡	土師器	杯	口縁部	外面: ロクロナデ、内面: ヘラミガキ→黒色処理、色調: 外面・濃い黄褐色(105W/22)、内面・黒(105W/1.7)、法量: 口径3.0cm・器厚0.2~0.3cm	C-191
3	PS130 窟方埋土	須恵器	高台付杯	口縁部 底部	外面: ロクロナデ・底部円形ヘラミガキ→ロクロナデによる高台付付け、内面: ロクロナデ、色調: 内外面・淡黄色(C.508/3)、法量: 口径(11.8)cm・底径(6.6)cm・残存高4.4cm・器厚0.2~0.5cm	E-121

第27図 柱穴・ピット出土遺物



第 28 図 柱穴・ビット断面図

部付近まで地文（多条LR）が施され、口縁部には連続した刺突による装飾が施される。土師器は坏（2）が1点のみ出土しており、口縁調整で、底部は回転糸切り無調整である。内面はミガキののち黒色処理が施されている。須恵器坏は底部回転糸切り無調整（3・9・11）と回転ヘラケズリ再調整のもの（8）がある。須恵器高台付坏（4・5）は底部回転糸切りののちに高さ1.2 cmほどの高台を貼り付けている。

（5）柱穴・ピット（第3表、第27～28図）

調査区全域において、ピット243基を確認した。確認面はX層（地山層）である。それぞれの規模、柱痕跡の有無、堆積土・埋土、重複関係などの特徴について基準（例言参照）に基づき第3表に示す。

一部に柱痕跡を確認できるものもあり、これらは概ね掘方が直径0.30～0.70 mの隅丸方形・不整形円形を呈し、地山ブロックを多く含む黒褐・にぶい黄褐色シルトなどで人為的に埋め戻されている。柱痕跡は直径0.15～0.25 m程度の円形で、堆積土は黒褐・暗褐色シルトが主体である。これらについては、本来は掘立柱建物や柱穴列などを構成していたと考えられるが、掘立柱建物跡として認識できたのは先述のSB 214～222掘立柱建物跡9棟、SA35～37柱穴列3列のみである。

出土遺物は、縄文土器、土師器坏・高坏・甕・高台付坏、須恵器坏・甕・瓶類・高台付坏、製鉄関連遺物（鍛冶滓）などが出土している。出土した柱穴・ピットおよび遺物の詳細は第2表・第3表を参照されたい。図示できたものはP5122の柱痕跡から出土した口縁調整の土師器坏2点（第27図1・2）、P5130の掘方埋土から出土した須恵器高台付坏1点（3）である。

6 総括

（1）遺物の特徴と年代

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、金属製品、製鉄関連遺物、土製品、石器である。出土した土器類の総数は1,044点（約10,080g）あり、内訳は縄文土器31点（約380g）、土師器857点（約5,900g）、須恵器156点（約3,800g）である。石器類の総数は10点（約63.4g）で、内訳は砥石1点と剥片9点である。このほか、土製品（土錘）1点（約40g）、不明金属製品1点（約9.9g）、製鉄関連遺物（鍛冶滓）7点（約270g）が出土している。

図示する遺物の抽出に際しては、遺構出土の遺物を優先し、残存状態の良いもの、文様や器形の分かるものを抽出した。

出土状況としては、小破片が多く、遺構ごとのまとまりは希薄で帰属年代等の厳密な検討は困難である。土器組成を示す資料はないことから、分類等を行わず、以下では、各資料の特徴と近隣での類例などをもとにおおよその年代的位置づけを試みることにする。

①縄文土器

1点を図示した。出土した縄文土器は鉢・深鉢の小破片に限られる。図示した第25図1は口唇部

に刻み目、体部に口縁部直下まで多条のLR縄文が施される。縄文時中期末頃の環状集落が確認された谷原遺跡第1・2次調査(山元町教育委員会 2016a・b)では報告されていない文様構成で、町内では北経塚遺跡(山元町教育委員会 2010)から類例が出土しており、縄文時代前期に位置づけられている。他は小破片のため時期は不明である。

なお、本資料は、環状集落が営まれる以前に場の利用があったことを示唆するものである。ただし、当該期の遺構としては、別項で後述する陥し穴状遺構が可能性として考えられるものの、共存遺物は出土しておらず、断定は困難である。

②土師器

16点を図示した。器種は坏・高台付坏・甗・甕がある。非ロクロ調整のものとロクロ調整のものに分かれる。

◀非ロクロ調整▶坏・甗・高台付坏が出土している。図示できたものは坏のみである。

【坏】

S16 竪穴建物跡確認面出土の坏(第29図11)は、外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキ調整のち黒色処理されている。SD2a・2b 溝跡出土の坏(第29図3～6)も同様である。器形は平底風あるいは底部形状不明だが器壁が内湾ぎみで、口縁部付近でヨコナデが施される場合があり、体部に沈線や段はつかない。これらの特徴をもつ土師器坏は町内の熊の作遺跡2地点SX1B-IV-3～4層(宮城県教育委員会 2016)などの出土例と類似しており、8世紀中葉以降に位置づけられている。

◀ロクロ調整▶坏・甗・高台付坏・蓋・甗が出土している。

【坏】

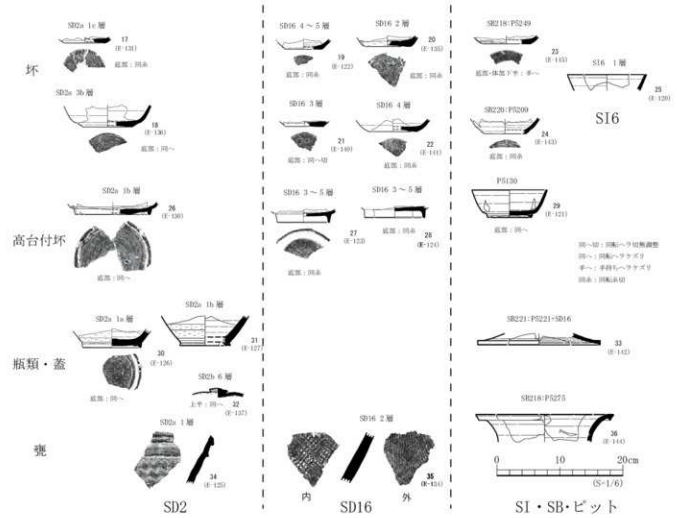
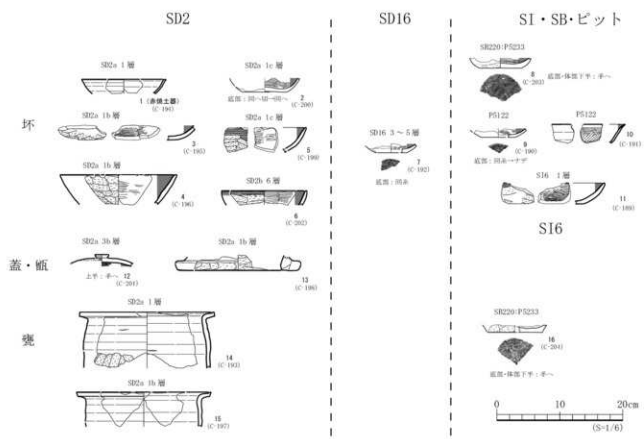
多くが底部または口縁部のみの資料で、器形が明らかな資料はない。底部切り離し技法や調整技法には、①回転ヘラ切→回転ヘラケズリ再調整(第29図2)、②切り離し不明→手持ちヘラケズリ再調整(第29図8)、③切り離し不明→ナデ調整?(ナデ?)(第29図9)、④回転糸切無調整(第29図7)などがある。

これらのうち、平底で器壁がゆるやかに内湾して立ち上がり、底部調整が②の第29図8については器形や調整技法などの特徴から、町内では日向遺跡S15 竪穴建物跡(山元町教育委員会 2015a)などに類例が求められ、概ね8世紀末から9世紀初頭に位置づけられている。

また、④の回転糸切無調整の坏は、町内の調査事例(熊の作遺跡・涌沢遺跡など)では概ね9世紀中葉以降に主体となると考えられている(宮城県教育委員会 2015・2016)。

【甗】

口縁部が屈曲して外側に開く形状を呈する(第29図14・15)。胴部下半から底部まではヘラケズリが施されるが、中間の資料は出土していないため全体の形状や調整は不明である。町内の類例としては涌沢遺跡S181・SK127(宮城県教育委員会 2015)、日向遺跡S12・S13 竪穴建物跡(山元町教育委員



第29図 谷原遺跡4～6次調査出土 土師器・須恵器・赤焼土器集成

会 前掲) 出土資料などがあり、これらは9世紀中頃～後半に位置づけられている。

【瓶】

破片資料で、無底の瓶の最下端から全周に張り出す構造の一部である(第29図13)。町内における類例はなく、県内では多賀城跡・山王遺跡などの国府・城柵周辺あるいは交通路沿いの集落などに限られ、出土例も少数である(古川 2014)。張出し部の断面が長方形を呈する本資料は、類例としては山形県高瀬山遺跡(山形県埋蔵文化財調査センター 2005)や山王遺跡多賀前地区東西大路西2道路SX10(宮城県教育委員会 1996)などから出土したものが最も近似しており、これらは共伴する遺物などから概ね8世紀後半から9世紀に属すると考えられている。

以上、今回の調査で出土した土師器の器種毎の特徴、類例等について述べた。

上記のような本資料の特徴は、東北地方南部の土師器編年にあてはめれば、大きく非ロクロ調整のものは国分寺下層式、ロクロ調整のものは表杉ノ入式期(氏家 1957)に位置づけられるものである。

年代的な位置づけについては、町内の各類例に近い時期に属する可能性も考えられるが、出土状況は散発的で小破片が多く、共伴関係なども把握できないため、詳細な比較検討は困難である。

③須志器

26点を図示した。器種は坏・高台付坏・蓋・瓶・甕である。

【坏】

すべて破片資料であり、器形が復元できるものはない。①底部切り離し不明→回転ヘラケズリ再調整が施されるもの(第29図18)、②切り離し不明→底部・体部下半に手持ちヘラケズリが施されるもの(23)、③底部回転糸切(17・19・20・22・24)あるいは回転ヘラ切(21)→無調整のものがある。

近隣の出土例としては、①は亙理町宮前遺跡20号住居跡(宮城県教育委員会 1983)、山元町熊の作遺跡2地点SX1B-IV-3下層(宮城県教育委員会 前掲)、②は北名生東窯跡(東北古代土器研究会 2008)、③は涌沢遺跡(宮城県教育委員会 前掲)などに類例があり、①は8世紀末～9世紀初頭、②は8世紀後半～9世紀前半、③は9世紀以降にそれぞれ位置づけられている。

【高台付坏】

①底部が高台部から突出し疑似高台を呈するもの(第29図26)、②坏部が器高の高い椀形を呈し、底部回転ヘラケズリ再調整ののち、底部外縁よりやや内側に高台が接着されるもの(29)、③底部回転糸切無調整で、薄手で先端に向けて細くなる高さ1.5cmほどの高台が底部周縁に垂直に接着されるものがある(27・28)。

類例として①は谷原遺跡2次調査SK111、福島県相馬市善光寺遺跡5号窯跡(福島県教育委員会 1988)などで出土しており、これらは7世紀後半～8世紀初頭以降(福島 1992)とされている。②は日向遺跡S15 堅穴建物跡、谷原遺跡2次調査S12 堅穴建物跡(前掲)があり、その他、亙理町宮前遺跡20号住居跡(宮城県教育委員会 前掲)にも類例を求められ、これらは8世紀末から9世紀初頭と推定されている。③については、近隣の類例に乏しいが坏部の特徴は底部回転糸切無調整の坏と同様であり、本資料についても概ね同時期のものと考えておきたい。

【蓋】

扁平な宝珠つまみが付き天井部が回転ヘラケズリ調整されるもの(第29図32)、器高が低く口縁部下端が下につまみだされるもの(33)がある。いずれも破片のため器形全体は確認できない。

両者の類例としては、熊の作遺跡2地点SX1B-IV-3下層、SX47・48 堅穴状遺構(宮城県教育委員会 前掲)に類例をみることができ、宝珠つまみが欠損しているものの谷原遺跡2次調査基本層V層(山元町教育委員会 2016b)でも出土している。これらは概ね8世紀後半から9世紀前半の年代が推定される。

【瓶】

長頸瓶の底部とみられる資料を図示した(第29図30・31)。うち1点(31)は胎土の観察から福島県会津・大戸窯の産とみられる。高台部形状などの特徴から9世紀後半～10世紀初頭の上雨屋107・112窯式(会津若松市教育委員会 1993・1994・1998)と考えられる。もう1点(30)は断面が三角形を呈する高台がやや外に開き、坏底部と高台の間に低い突帯が巡る。類例は福島県相馬地方の猪倉B遺跡などで確認され、9世紀末を中心とした年代が推定されている(福島県教育委員会 1996)。

【甕】

すべて破片のため、器形を復元できるものはない。装飾的な要素としては、口縁部～頸部に櫛描波状文が数段施されるもの(第22図6、第29図34)や頸部無文で口縁部下端が下につまみだされるもの(第29図36)などがある。胴部資料の調整技術には外面の平行タタキ・格子状タタキ痕と、内面に当て具痕とナデ調整がみられる。SD16溝跡の2層から出土した甕胴部資料(第29図35)は、外面平行タタキ・内面格子状当て具痕の組み合わせがみられる。

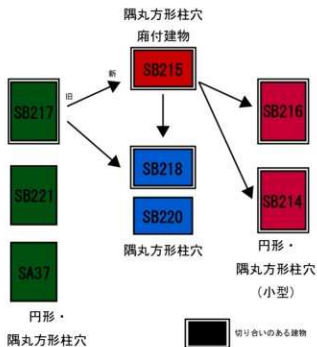
頸部に突帯がめぐり、その下に櫛描波状文が数段描かれる甕は、町内には出土事例がないが、県内では利府町硯沢窯跡B5号堅穴建物跡・表土出土資料(宮城県教育委員会 1987)などに類例を求めることができる。共伴する遺物が少ないため年代の推定は困難であるが、周辺の須恵器窯跡の年代から概ね8世紀代と考えておきたい。また、突帯を伴わない甕の頸部櫛描波状文は町内の新中永窪遺跡SR20・30須恵器窯跡などでまとめて出土しており、概ね8世紀中葉に位置づけられている。

SD2aの1b層から出土している外面に格子状タタキ痕、内面に同心円状当て具痕がみられる胴部破片(第26図4)は、過去の谷原遺跡2次調査でS13堅穴建物跡から出土しており、遺構の年代は概ね7世紀末から8世紀前葉と推定されている(山元町教育委員会 2016b)。また、SD16の2層から出土している内面に格子状当て具痕、外面に平行タタキ痕がみられる胴部破片(第29図35)は町内および近隣に類例がなく、年代・性格の推定が困難である。

その他については、年代の特定は困難であるが、谷原遺跡の既往の調査で古墳時代の須恵器は出土しておらず、概ね奈良・平安時代に属する可能性が高いものと考えられる。

④赤焼土器

1点を図示した(第29図1)。SD2a溝跡の1層から出土した坏で、ロクロ調整で黒色処理は施されず、内面には回転中にコテ状工具を当てた痕跡がみられる。底部を欠くため、器形の復元は困難であ



第30図 掘立柱建物跡の変遷

調査（山元町教育委員会 前掲）でも出土しており、古代以降の所産と推定されている。

金属製品・製鉄関連遺物は、P5275から鉄滓（鍛冶滓か）が、SD16の3層から不明鉄製品が出土している。遺構との関連は不明であり、時期や性格の推定は難しい。

（2）遺構の特徴と年代

今回の調査では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、土坑10基、溝跡6条、柱穴・ピット243基を確認した。以下では、これらの遺構の特徴・出土遺物・重複関係などから時期などについて検討する。

①竪穴建物跡

4次調査区で1棟（S16）を確認した。北西-南東を軸とし、北東辺約4.22mが調査区内にかかる。保存のため精査を行っておらず、規模・性格などは不明である。角は直角に近く、辺は直線的である。周囲に点在する柱穴・ピット類（P5130・5129）と重複し、これらより古い。

遺構確認時の取り上げを1層として、土師器環（第29図11）・甕、須恵器環（25）などが出土している。非クロロ調整の土師器環（11）は前項の検討により、国分寺下層式期の概ね8世紀代のものと考えられるが、これをもって竪穴建物跡の年代を推定することは難しい。

②掘立柱建物跡および柱穴・ピット

5次調査区で9棟（SB214～SB222）を確認した。これらは平面形が隅丸方形あるいは円形を呈す

り、底部の切り離しや調整についても不明である。

過去には、谷原遺跡2次調査（山元町教育委員会 前掲）でS14竪穴建物跡、基本層V層などから赤焼土器環が出土している。また、涌沢遺跡SX29土器集積遺構（宮城県教育委員会 前掲）でも類例が認められ、これらを鑑みて概ね10世紀代の年代を想定しておきたい。

⑤土製品・金属製品・製鉄関連遺物

土製品は土唾1点を図示した。SD2aの1層から出土したもので、土師質の管状・紡錘形を呈する（第25図1）。遺構との関連は不明だが、同様の資料は2次

る直径40～70 cm前後の柱穴・ピットから構成され、直径20～25 cmほどの柱痕跡をもつものが多い。

構成する柱穴の重複関係からSB217→SB215→SB214・216・218の新旧関係がわかる(第30図)。

もっとも古いSB217は、円形あるいは隅丸方形のやや不揃いな形状を呈する柱穴で1間以上×2間からなる南北棟建物跡である。その北側にはSA35、南側には2間以上×1間の東西棟建物であるSB221があり、同様の主軸方向や柱穴の形状・規模をもつ。

SB217よりも新しいSB215は、身舎北側と西側にL字の廂がつく建物跡であり、調査区南側に続く2間×2間以上の規模が推定される。柱穴はやや不整な隅丸方形を呈し、辺の向きが揃う。梁行の柱間寸法が約3.7・3.3 mと比較的広く、面積が最も広くないと考えられる。

SB215・217より新しいSB218は大型(直径60 cm以上)で辺の向きが揃った隅丸方形の柱穴からなる2間×2間の建物跡である。柱間寸法は桁行で約2.0 m、梁行で約1.5 mと比較的短い。中央部分はSD16と重複して失われているが、総柱の建物であった可能性もある。この南側には同様の柱穴規模・柱間寸法・軸方向をもつ3間×2間からなるSB220がある。

以上から、円形・隅丸方形柱穴の南北棟建物跡(SB217・221)から廂の付く東西棟建物跡(SB215)を経て、大型・隅丸方形柱穴の南北棟建物跡(SB218・220)への変遷が認められる。これらはいずれも、SD2と方向が揃う。

一方、SB215との重複関係があり、これより新しいSB214・216は比較的小規模かつ不整な円形・隅丸方形の柱穴で構成される南北棟建物跡である。これらはSB215のあと、SB218など大型隅丸方形柱穴の建物跡と同時にあるいは後続して存在したものとみられる(第30図)。

年代については、隅丸方形の柱穴を持つSB220は、ロクロ調整で底部が手持ちヘラケズリ再調整される土師器環(第29図8)・底部回転糸切の須恵器環(24)が出土しており、概ね9世紀以降の建物跡として位置づけられる。その他の建物跡からもロクロ調整の土師器環・甕を中心とした遺物が出土している。小破片のみで量も乏しいため、詳細な検討は困難であるが、柱穴の規模・形状の面をみると、SB217・221は1次調査で確認されたSB2、SB214・216はSB3・5掘立柱建物跡とそれぞれ類似する。SB2・3からはロクロ調整土師器が出土しており、概ね平安時代の年代に収まるものと考えられており(山元町教育委員会 2016a)、今回報告分の掘立柱建物跡(SB214～222)も同様の年代を想定しておきたい。

なお、掘立柱建物跡や柱穴列として認識できなかった柱穴・ピットのなかには、小型かつ円形のものも含まれる。これらは1次調査時のSB6や2次調査時に多数確認された掘立柱建物跡群と同様に、中世に属する遺構の可能性があるが、当該期の遺物は出土していないため断定は困難である。

③柱穴列

3列確認した(SA35～37)。柱穴の規模や形状から本来は掘立柱建物跡の一辺を構成するものと考えられるが、断定は困難であることから、柱穴列として扱った。遺物は出土していない。軸方向はSA35・36が北から約15°西、SA37は約20°西に傾く。

④土坑

土坑は10基確認した（SK234～243）。円形・楕円形か不整形を呈し、断面形は浅い皿状を呈するものと、深い方形や台形を呈するもの（SK235・236・237）がある。

後者の3基はその平面・断面形と中央にビット状の構造（逆茂木跡？）をもつことから、陥し穴と思われ、5次調査区の標高22.6mから22.0mまでの尾根上に約5m間隔で3基並ぶ。軸向は等高線に平行し、対象獣が移動するルート上に設定されたものと思われる。いずれも遺物が出土していないため時期は不明だが、陥し穴状遺構と考えられるものについては的場遺跡（山元町教育委員会2014a）や谷原遺跡2次調査でも類似した土坑が確認されており、前者は縄文時代前期以降のもの、後者は縄文時代中期末以降の環状集落跡に先行する遺構と考えられている。

そのほか、5次調査区の中央北寄りにまとまって6基（SK234・238～242）分布する。このうちSK238～SK241の4基は位置を北へずらしながら重複し、繰り返して掘り込まれたものと考えられる。すぐ北にはSK242が近接する。SK234はSK238～242のまとまりからやや南西にあり、SD16溝跡・SB218掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。

6次調査T-3から1基（SK243）確認されたが、平面確認にとどめている。

遺物としてはSK234・238・239からロクロ調整の土師器甕が出土しているが、SK234以外は他の遺構と重複関係がないため具体的な年代や性格は不明である。

⑤溝跡

6条確認した（SD1・2a・2b、14～16）。SD14・15は平面の確認のみで断面形状や深さ、堆積状況は確認していない。平面的な特徴としては、5次調査区と1次調査区にまたがってほぼ真北を向いて延びるSD1・2と、これらに直角に交わるT字形のSD16がある。4次調査区のSD14は全体が明らかでないが、南北に延びる溝であると考えられる。SD15はSD14に直交して切られる短い溝であり、性格は不明である。SD2は上幅約3.5m以上、深さ約70cmの断面台形・深い皿状を呈する溝跡であり、座標北を向く。当初存在したSD2bと、その上からやや西側を掘り込んだSD2aに分かれる。SD1はSD2の西側1mに平行する上幅約60cmほど、深さ40cmほどの溝跡で、一部T字状に東（SD2側）へ張出す。

溝跡の重複関係をみるとSD1が古く、SD16・SD2aが後続する。SD1・16と直接の重複があるのはSD2aであり、SD2bの時点で関係があったかどうかは不明である。

SD16は5次調査区西・南西側に密集する複数の掘立柱建物跡（SB214～218、SB220・221）を構成する柱穴および重複する柱穴・ビット・土坑よりも新しい。5次調査区の掘立柱建物跡群が廃絶された後に設けられた施設であり、SD2aはそれと同時に、さらに新しい施設と考えられる。SD16とSD2aが接する箇所（第24図D-D'断面）では、SD16の側までSD2aの堆積が入り込んでいることがわかる。SD16とSD2aは一時期接続した溝として機能していた可能性がある。

SD16の遺物出土状況を見ると、2～5層から9世紀以降の須恵器坏（第29図19・20・22）、高台付坏（27・28）が出土している。須恵器が主体であり、縄文土器・石器・鉄製品などがわずかに混

じるが、土師器は出土していない。

SD2a では大別 1 層中に 7 世紀後半～8 世紀初頭以降の須恵器高台付坏 (26)、8 世紀代の土師器坏 (3～5)、8 世紀後半～9 世紀代の土師器瓶 (13)、9 世紀末頃の須恵器瓶 (第 29 図 31)、9 世紀後半～10 世紀初頭の須恵器瓶 (30)、10 世紀代の赤焼土器坏 (1) などが混在する状況である。SD2b の 6 層からは 8 世紀代の非クロロ調整土師器坏 (6)、8 世紀後半から 9 世紀前半の須恵器蓋 (32) が出土している。

以上から各溝跡の時期を推定すると、まず SD2b が 8 世紀後半から 9 世紀前半以降に埋没し、SD2a は SD2b が埋没した後かその過程で上から掘削され、最終的には概ね 9 世紀末以降に埋没したと考えられる。SD16 は 9 世紀以降に埋没したと考えられるが、9 世紀以降の SB218・220 および後続する SB216・214 より新しい溝跡であり、SD2a と接続していた時期もあると考えられるため、実際に埋没した時期は SD2a と同様に 9 世紀末以降まで下る可能性も想定できる。

これらの溝跡が掘削・埋没した時期を厳密に推定することは困難だが、出土遺物が概ね 8 世紀後半から 10 世紀代に収まること、重複する遺構のなかに中近世まで下る遺構が明確に確認できないことなどから、SD1・2・16 溝跡は掘立柱建物の年代と同じ平安時代に属するものと考えておきたい。

⑥ 古代における遺跡周辺の空間利用

今回調査した範囲の遺構・遺物は、古代 (奈良～平安時代) に属するものが中心となる。谷原遺跡周辺の古代集落は、概ね 7 世紀頃：集落の開始 (日向北・日向・谷原)、8～9 世紀中葉：須恵器・製鉄など生産活動を統括する有力集団の定着 (谷原・涌沢)、9 世紀後半：集落城の拡大 (日向～的場一帯)、10 世紀前葉以降：集落城の縮小 (谷原・涌沢への集約) という変遷をたどる (山元町教育委員会 2016)。

谷原遺跡が所在する山寺地区は、こうした動向のなかで中心的に利用された地域であり、和名類聚抄に記載のある「菱沼郭」の推定地とされてきた経緯もある。今回の報告を含めた発掘調査による成果を活用し、古代の谷原遺跡周辺についての検討を進めたい。

具体的な空間利用の様子をみると、山寺川と谷原川に挟まれた遺跡範囲のなかで、より標高の高い西側 22.0 m 付近に今回と 1 次調査で見つかった掘立柱建物群があり、2 次調査範囲にあたる東側 17～20 m には散発的な竪穴建物跡と捨て場の分布がある (第 31 図)。両者の分布は 1 次調査区と 5 次調査区を南北に貫く大溝 (SD2) によって区画されており、計画的な配置であることが指摘されている (山元町教育委員会 2016)。

竪穴建物跡の年代は少なくとも 7 世紀後半から 9 世紀後半以降までの幅がある一方、掘立柱建物群は出土遺物から 9 世紀以降を中心とする年代が想定される。建物の重複関係と軸向の変化から、隅丸方形柱穴の建物跡、廂付の大型建物跡、柱間の狭い隅丸方形柱穴の小型建物跡と円形・隅丸方形柱穴の建物跡の順に変遷する (第 30 図)。隅丸方形柱穴の小型建物跡は、柱の間隔や面積からみて、倉庫として機能していた可能性がある (菅原 2007)。

区画溝と考えられた SD2 溝跡に関しては、少なくとも 1 度掘り直されるなど機能が維持されていた

形跡があり、長期的に機能したと考えられる。また、いずれかの段階でSD16溝跡が接続され、区画がより細分されている。SD16溝跡はSD2の西側すぐそば（5次調査区）に位置する掘立柱建物跡・柱穴・ピット類よりも新しい遺構であることから、これらに伴って配置された施設とは考えられない。

よって、掘立柱建物跡群と区画溝などの諸施設は当初から揃っていたわけではなく、数時期に分けられるものと考えられる。

まず、比較的標高の高い位置に隅丸方形柱穴の掘立柱建物群（SB217・219・221）が展開されるのと前後して大溝（SD2b）による区画分けが行われ、その西側に廂付建物（SB215）や倉庫群（SB218・220）、円形・楕円形柱穴の掘立柱建物（SB214・216）が連続して配置されたものと考えられる。掘立柱建物群に限られた場所で重複し、その場所の変化に伴って区画溝の新設や維持が行われている様子からは、継続的に営まれた拠点としての性格が想定される。

丘陵上の高所における倉庫群の配置、区画溝と軸向を描いた掘立柱建物跡の密集した配置、低所に点在する竪穴建物群などは、古代の有力者居宅（菅原 前掲）とその周辺の特徴に類似する。なお、谷原遺跡2次調査では陶硯（円面硯・風字硯）が出土している。

以上のことから、谷原遺跡の古代の掘立柱建物跡群は、河川を挟んで隣接する生産関連遺跡である涌沢遺跡の発掘調査報告書（宮城県教委 2015）で存在が予想されていた、周辺域の生産活動を統括する有力者の居宅を構成する施設、あるいはその一部分に該当する可能性を考えておきたい。涌沢遺跡で鍛冶関連遺構（鍛冶炉・木炭焼成遺構）が出現し始めるのが8世紀後半から9世紀前半であり、SX118出土の「田人」墨書土器などが示す生産労働者の招集と給食活動が行われるようになるのは遅くとも9世紀後半からと考えられる（宮城県教育委員会 2015）。これに関して、9世紀以降の谷原遺跡に認められる掘立柱建物跡群の出現と連続した建て替えの様子は、涌沢遺跡における生産活動の本格化と併行した居宅としての機能の出現あるいは拡充を示す可能性が考えられる。ただし、熊の作遺跡（宮城県教育委員会 2016）などで見つかっている大型竪穴建物や大型掘立柱建物（主屋）の配置が存在するかどうかは未だ不明瞭であるため、今後の調査・資料の蓄積を待って検討していくことが必要と考える。

（3）まとめ

- ・谷原遺跡は、阿武隈山地から東へ舌状に延びる丘陵東側の中位段丘・低位段丘上段に立地する。今回の調査（4～6次調査）では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、溝跡6条、土坑10基、柱穴・ピット243基を確認し、主に縄文土器、土師器、須恵器が出土した。
- ・土坑には縄文時代の陥し穴が含まれ、斜面上に配列されている。
- ・掘立柱建物跡およびそれ以外の柱穴・ピットは、その特徴や周辺の調査事例から平安時代に属するものと考えられる。遺跡を東西に区画する溝跡などと合わせて、古代の有力者の居宅を構成していた可能性が考えられる。



1. 谷原遺跡遠景（東から 平成24年8月10日撮影：2次調査時）



2. 谷原遺跡遠景（南から 平成24年8月10日撮影：2次調査時）

図版 1



1: 4次調査区 T-1 SD14 (北から)

2: 4次調査区 T-1 遺構検出状況 (北から)

3: 4次調査区 T-1 基本層① (西から)

4: 4次調査区 T-1 S16 (北から)

5: 4次調査区 T-2 SA35-36 (北から)



図版 2

1: 5次調査区北側完掘状況
(北から)

2: 5次調査区北側完掘状況
(北東から)

3: 5次調査区作業風景
(西から)



図版 3

- 1 : 5次調査区 SB220-222
(北から)
- 2 : 5次調査区北側 SD16 検出状況
(南から)
- 3 : 5次調査区北側 SB218
(北から)
- 4 : 5次調査区北側 SB 検出状況
(東から)
- 5 : 5次調査区北側 SB220-222 (西
から)
- 6 : 5次調査区北側 SD16 断面
(西から)
- 7 : 5次調査区北側 SD1 断面
(南から)



図版 4



- 1 : 5次調査区北側完掘状況
(南から)
- 2 : 5次調査区北側SD2 断面
(北から)
- 3 : 5次調査区北側SK237 断面
(西から)
- 4 : 5次調査区北側SD2 断面
(南から)
- 5 : 5次調査区北側SK235 完掘状況
(東から)
- 6 : 5次調査区北側SK238・240・241
完掘状況 (東から)
- 7 : 5次調査区北側P5221 断面
(南から)



2



3



4



5



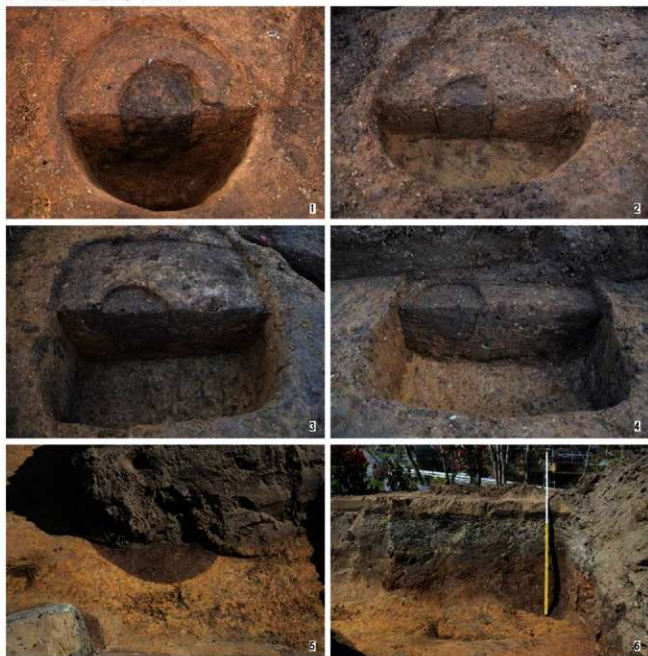
6



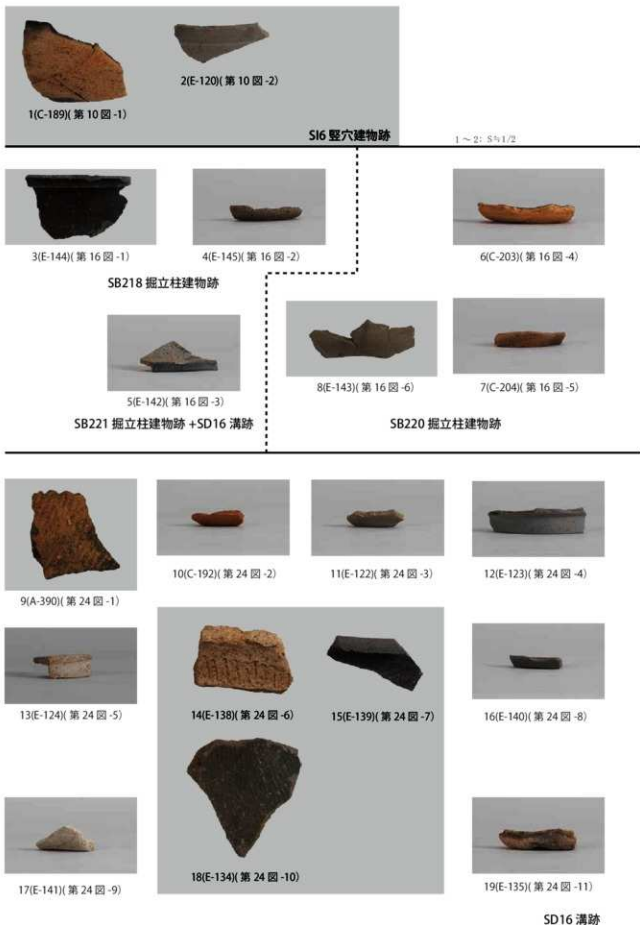
7

図版 5

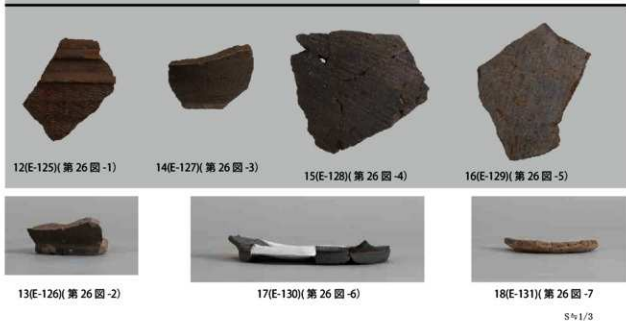
- 1 : 5次調査区 P5256 断面 (東から)
 2 : 5次調査区 SB221:P5218 断面 (東から)
 3 : 5次調査区 SB220:P5219 断面 (東から)
 4 : 5次調査区 SB220:P5224 断面 (北から)
 5 : 6次調査区 SK243 検出状況 (北から)
 6 : 6次調査区 基本層④ (南から)



図版 6



図版 7





たて うち
館の内遺跡

かっせんはら
合戦原B遺跡

館の内遺跡

遺跡名：館の内遺跡（遺跡番号 14009）

所在地：宮城県亶理郡山元町大平字館ノ内 4-3

調査原因：個人住宅造成工事

調査期間：平成 25 年 11 月 20 日

調査主体：山元町教育委員会生涯学習課

調査担当：山田隆博

対象面積：406 m²

調査面積：104 m²



1 調査に至る経緯

東日本大震災によって被害を受けた個人住宅の再建工事に際し、計画地が館の内遺跡に含まれ、切土・盛土による造成や掘削が深さ 2 m に及ぶ浄化槽設置工事が計画されていたことから、遺構面の深度や遺構分布状況等を把握するための確認調査を実施したものである。

【協議及び発掘通知】

平成 25 年 10 月 16 日	事業主からの協議書の提出
平成 25 年 10 月 16 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1116 号）
平成 25 年 10 月 23 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 1908 号）
平成 25 年 10 月 30 日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成 25 年 10 月 30 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 1188 号）
平成 25 年 11 月 13 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 2064 号）

2 調査の概要

館の内遺跡は、山元町役場から北西に約 3.0 km 離れた位置に所在し、阿武隈山地の縁辺から発達した西から東に延びる小丘陵上の緩やかな斜面に立地する。本遺跡は、平成 13 年、農村整備事業に伴い県教委により発掘調査が実施されており、9 世紀頃の竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・土坑などが確認されている。また、遺跡北側には中世の大平館跡が隣接していることから、平安時代だけでなく、中世の遺構も存在する可能性も考えられる。

今回の調査対象地は遺跡の西部にあたり、住宅基礎や浄化槽と擁壁の設置予定箇所を対象に 5 箇所にてトレンチ (T-1～5) を設定した。

調査の結果、現表土から 0.80～1.0 m 下の地山面でも土坑とみられる落ち込みやビットが確認され、遺構確認面で土師器片などが出土した。掘削が深さ約 2.0 m に及ぶ浄化槽設置部では、ビット (P1～3) が確認されたことから、遺構の精査を行い、その他については掘削が遺構面まで及ばないことから、平面確認のみに留め調査を終了した。

3 発見された遺構と遺物

T-1～4において、土坑とみられる落ち込みを2箇所（SK1・2）と多数のピットを確認した。

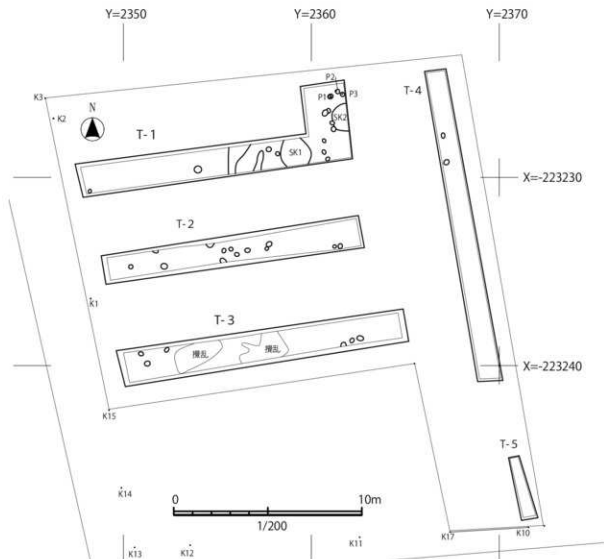
【SK1・2土坑】

ともに調査区外に延びるため詳細は不明であるが、平面形は径1.5m前後の不整形円形を呈しており、確認面でみられる堆積土はSK1は地山粒を含む黒褐色シルト、SK2は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

【P1～3】

平面形が径約22～29cmの円形または不整形円形で、深さは0.16～0.30mである。柱痕跡は径15cm前後の円形である。堆積土は掘り方理土が地山ブロックを多量に含む黒～黒褐色シルト、柱痕跡は地山粒を含む、しまりのない黒褐色シルトである。

遺物は確認面等から土師器小片などが少量出土したものの、時期などの詳細は不明である。



第1図 遺構配置図 (S=1/200)



- 1 : T-1(西から)
- 2 : T-2(西から)
- 3 : T-3(西から)
- 4 : T-4(北から)
- 5 : T-1 基本層位
- 6 : P1～3 横出状況
- 7 : T-5(北から)
- 8 : P1 断面(北から)
- 9 : P2 断面(北から)
- 10 : P3 断面(南から)

図版

合戦原B遺跡

遺跡名：合戦原B遺跡（遺跡番号 14061）
 所在地：宮城県亶理郡山元町高瀬字館下 12-1・13-1
 調査原因：個人住宅建築工事
 調査期間：平成 26 年 6 月 2～3 日
 調査主体：山元町教育委員会生涯学習課
 調査担当：丹野修太
 対象面積：163 m²
 調査面積：95 m²



1 調査に至る経緯

東日本大震災によって被害を受けた個人住宅の再建工事に際し、計画地が合戦原B遺跡に含まれ、建物基礎の柱状改良や掘削が深さ 2 m に及び浄化槽設置工事が計画されていたことから、遺構面の深度や遺構面分布状況等を把握するための確認調査を実施したものである。

【協議及び発掘通知】

平成 26 年 4 月 30 日	事業主からの協議書の提出
平成 26 年 4 月 30 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 198 号）
平成 26 年 5 月 14 日	県教委から確認調査実施の回答（文第 396 号）
平成 26 年 5 月 19 日	埋蔵文化財発掘届の提出
平成 26 年 5 月 19 日	町教委から県教委へ進達（山教委発第 309 号）
平成 26 年 5 月 30 日	県教委から発掘調査の実施の通知（文第 563 号）

2 調査の概要

合戦原B遺跡は、合戦原遺跡が所在する宮城病院の東側、国道 6 号線沿いの丘陵上に位置する。これまで本格的な発掘調査は実施されていないが、周辺で鉄滓が一定量採集されることから、製鉄関連の遺跡である可能性が高いと考えられる。

今回の調査対象地は遺跡の北端部にあたり、住宅基礎や浄化槽と擁壁の設置予定箇所を対象に 4 箇所にトレンチ（T-1～4）を設定した。

基本層序としては表土・耕作土・地山の別 3 層に分けられるが、敷地南側では地山が一部現れていることや、敷地北側では地山を切る攪乱層が見られるなど、全体的に土地の削平や攪乱を受けているものと思われる。

調査の結果、T-2 において土坑（SK1）を 1 基確認した。住宅基礎の柱状改良部にあたることから精査を行って、調査を終了した。

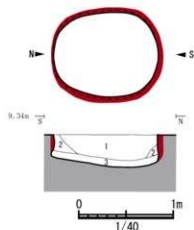
3 発見された遺構と遺物

【SK1土坑】

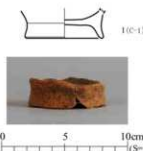
平面形は、長軸約1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈しており、深さは34cmで、壁はややオーバーハング気味に立ち上がっている。堆積土は大別3層に分けられ、1層は暗褐色シルトの自然堆積土、2層は地山由来の明赤褐色砂質シルトで壁の崩落土とみられる。底面直上には炭化物が8cm程堆積しており、側壁が赤色に焼けていることなどから、本土坑については木炭焼成土坑と考えられる。

遺物は、確認面から回転系切り痕を残す土師器高台杯1点が出土したほか（第2図）、堆積土中から土師器の小破片が少量出土したのみで遺構に伴うものは出土していない。

なお、底面直上の炭化物をサンプリングした放射性炭素年代測定(AMS)では、¹⁴C年代は1340 ± 20yrBP、暦年較正年代(1σ)は655 ~ 678cal ADの範囲が示されている。

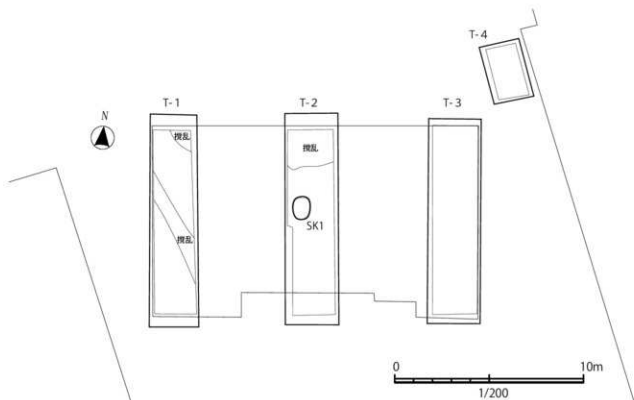


第1図 SK1平・断面図

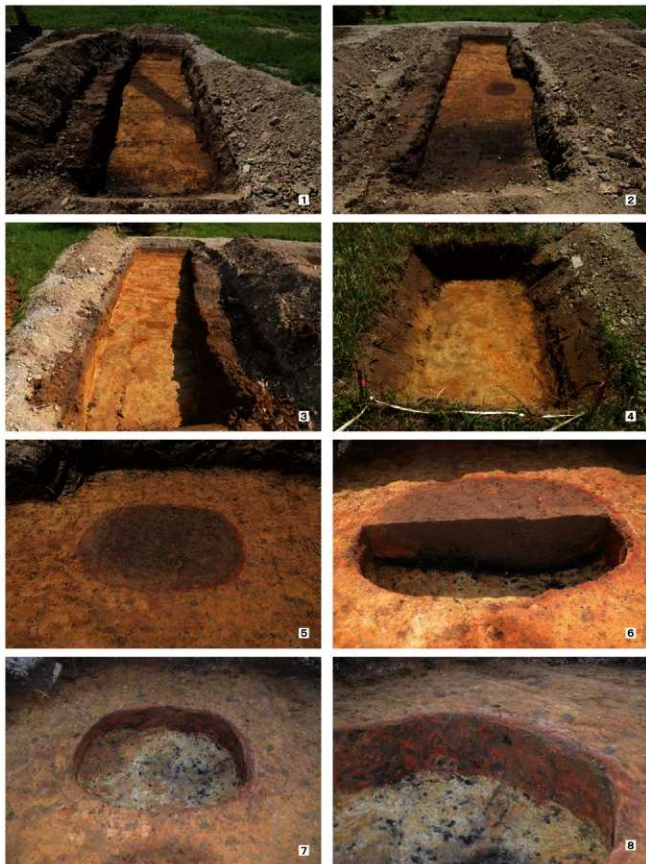


第2図 SK1出土遺物

No.	遺構名・層	種別	器種	現存	特徴【技法(外面・内面)一色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK1 1層	土師器	高台付 杯	有顔 →底面	外面：磨減、底部の転系切、内面：磨減、色調：外面・にふい黄褐色(10YR6/3)、内面・にふい黄褐色(10YR7/3)、法量：底径6.2cm・残存高2.4cm・器厚0.4~1.0cm	C-1



第3図 遺構配置図



1 : T-1(北から) / 2 : T-2(北から) / 3 : T-3(北から) / 4 : T-4(北から)
5 : SK1 検出状況(東から) / 6 : SK1 断面(東から) / 7 : SK1 完掘状況(東から) / 8 : SK1 倒壁拡大(南東から)

図版

1 測定対象試料

宮城県亘理郡山元町に所在する合戦原 B 遺跡の測定対象試料は、木炭焼成土坑と考えられる土坑から出土した炭化物 1 点である (第 1 表)。

2 測定の意義

合戦原 B 遺跡の木炭焼成土坑からは、遺物がほとんど出土していないため、年代測定によって土坑の時期を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 1 表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。

補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を第1・2表、第1図に示す。

合戦原B遺跡出土試料6の ^{14}C 年代は $1340 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1σ)は655~678cal ADの範囲で示される。試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

第1表 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C補正值)

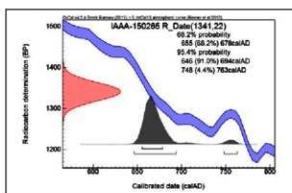
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-150265	6	合戦原 B 遺跡 T-2 SK1 3層	炭化物	AAA	-27.05 ± 0.22	1,340 ± 20	84.62 ± 0.23

[#7366, 7367]

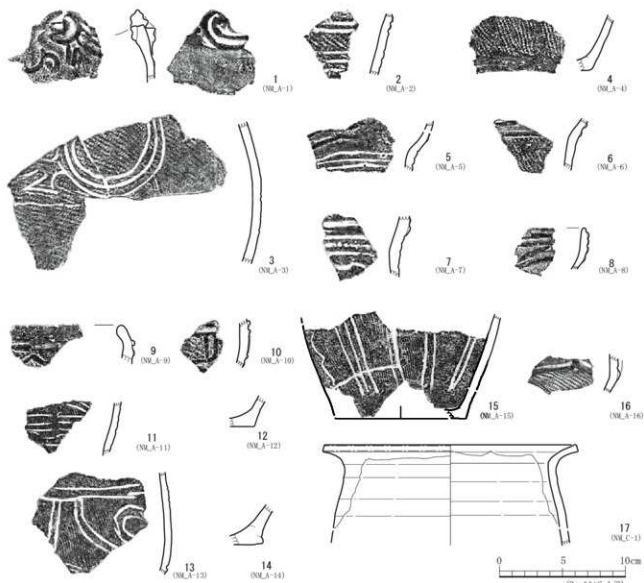
第2表 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-150265	1,380 ± 20	84.26 ± 0.23	1,341 ± 22	655calAD - 678calAD (68.2%)	646calAD - 694calAD (91.0%) 748calAD - 763calAD (4.4%)

[参考値]

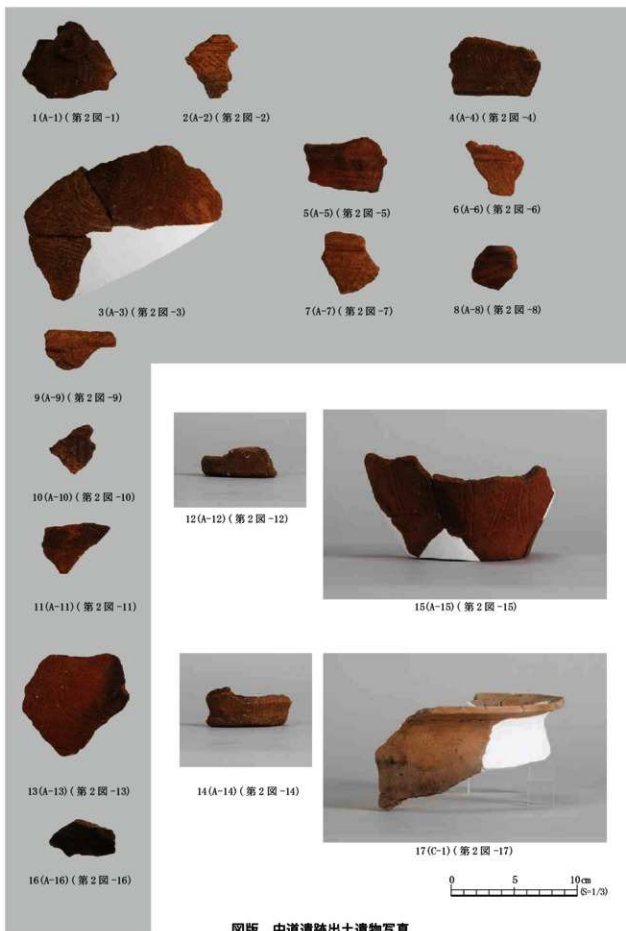


第1図 暦年較正年代グラフ (参考)



No.	遺跡名・層	種類	器種	残存	特徴【注1(外面・内面)→色調1(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	陸奥南側	縄文土器	深鉢	口縁部	外面:口縁部粘土層付剥離文・体部隆帯,内面:口縁部粘土層付剥離文・体部ナデ,色調:外面・褐色(T.5184/3),内面・赤褐色(T.5184/4),法量:残存高5.7cm・器厚0.5~1.2cm	A-1
2	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:1段縄文・沈線文・隆帯,内面:摩滅,色調:外面・褐色(T.5186/3),内面・赤褐色(T.5184/4),法量:残存高4.9cm・器厚0.5~0.7cm	A-2
3	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:1段縄文・沈線文,内面:ナデ,色調:外面・にぶい赤褐色(T.5183/4),内面・赤褐色(T.5184/4),法量:残存高11.3cm・器厚0.5~1.0cm	A-3
4	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:1段縄文・底部ナデ,内面:ナデ,色調:外面・にぶい赤褐色(T.5184/4),内面・赤褐色(T.5185/4),法量:残存高4.4cm・器厚0.6~0.7cm	A-4
5	陸奥南側	縄文土器	深鉢	口縁部	外面:口縁部R網赤文・隆帯,体部網赤文・沈線文,内面:ナデ,色調:外面・赤褐色(T.5183/4),内面・明赤灰色(T.5183/1),法量:残存高4.0cm・器厚0.5~0.7cm	A-5
6	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:1段縄文・隆帯,内面:ナデ,色調:外面・褐色(T.5186/4),内面・にぶい赤褐色(T.5185/4),法量:残存高4.2cm・器厚0.5~0.7cm	A-6
7	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:隆帯・沈線文・刺突,内面:ナデ,色調:外面・褐色(T.5186/3),内面・にぶい赤褐色(T.5185/4),法量:残存高4.9cm・器厚0.6~1.1cm	A-7
8	陸奥南側	縄文土器	深鉢	口縁部	外面:R網赤文・隆帯,内面:ナデ,色調:外面・にぶい赤褐色(T.5184/4),内面・にぶい赤褐色(T.5184/2),法量:残存高3.3cm・器厚0.3~0.6cm	A-8
9	陸奥南側	縄文土器	深鉢	口縁部	外面:1段縄文・隆帯,内面:ナデ,色調:外面・明赤褐色(T.5183/3),内面・にぶい褐色(T.5183/4),法量:残存高3.1cm・器厚0.7~0.8cm	A-9
10	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:1段縄文・隆帯,内面:摩滅,色調:外面・赤灰色(T.5184/1)/褐色(T.5186/3),内面・赤褐色(T.5184/4),法量:残存高3.9cm・器厚0.6~0.8cm	A-10
11	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:R網赤文・沈線文,内面:ナデ,色調:外面・灰褐色(T.5184/2)/明赤褐色(T.5185/3),内面:赤灰色(T.5184/1),法量:残存高4.3cm・器厚0.5~0.6cm	A-11
12	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:ナデ,内面:ナデ,色調:外面・にぶい赤褐色(T.5185/4),内面・褐色(T.5186/3),法量:残存高2.4cm・器厚0.6~1.0cm	A-12
13	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:R網赤文・沈線文,内面:ナデ,色調:外面・赤褐色(T.5184/3),内面:赤褐色(T.5182/1),法量:残存高6.1cm・器厚0.4~0.6cm	A-13
14	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:ナデ,内面:ナデ,色調:外面・にぶい赤褐色(T.5185/4),内面・灰褐色(T.5185/2),法量:残存高3.2cm・器厚0.7~1.3cm	A-14
15	陸奥南側	縄文土器	深鉢	体部	外面:体部R網赤文・沈線文・体部下端~底部ナデ,内面:ナデ,色調:外面・赤褐色(T.5184/3),内面:赤褐色(T.5182/1),法量:残存高8.3cm・器厚0.5~1.0cm	A-15
16	陸奥北側	縄文土器	深鉢	体部	外面:隆帯・沈線文・屈文,内面:ミヅナ,色調:外面・黒褐色(T.5183/1),内面・にぶい赤褐色(T.5186/4),法量:残存高3.1cm・器厚0.6~0.8cm	A-16
17	陸奥北側	土師器	甕	口縁部	外面:口タコナデ,内面:口タコナデ,色調:外面・にぶい黄褐色(T.5187/2),内面・にぶい黄褐色(T.5186/3),法量:口径130.0mm・残存高0.0cm・器厚0.8~0.7cm	C-1

図版 中道遺跡出土遺物



図版 中道遺跡出土遺物写真

※中道遺跡(本書P11,第3表14)では遺構が確認されていない。また、データ破損のため図面を掲載せず。

東部地区圃場整備事業 防災公園整備事業 農産物出荷貯蔵施設整備事業 確認調査

[東部地区圃場整備事業]

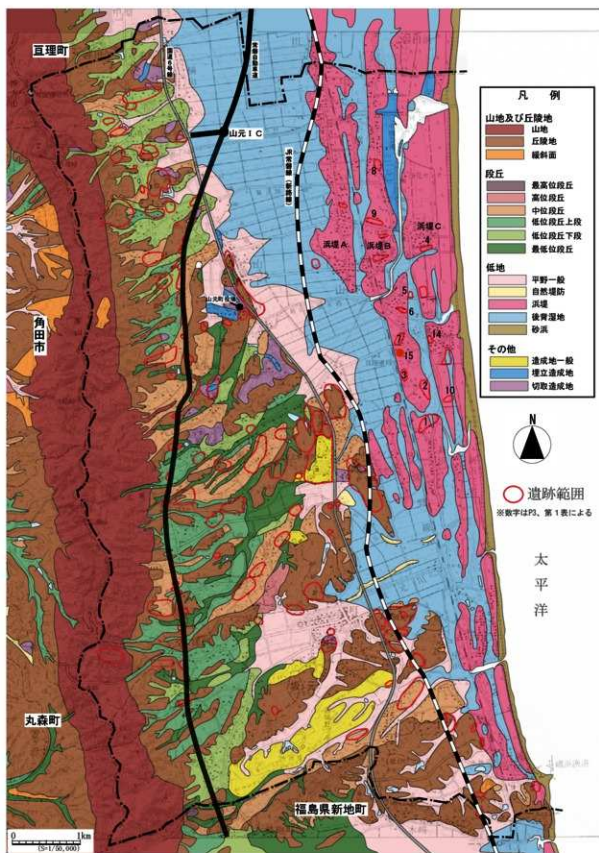
新浜遺跡・狐須賀遺跡
北中須賀遺跡・浜遺跡
西北谷地 A 遺跡・西北谷地 B 遺跡
西須賀遺跡・笠浜遺跡
北泥沼遺跡・畑合遺跡

[防災公園整備事業]

浜遺跡・笠野 A 遺跡

[農産物出荷貯蔵施設整備事業]

北中須賀遺跡隣接地



第1図 地形分類図と遺跡の位置

東部地区ほ場整備事業・防災公園整備事業・農産物出荷貯蔵施設整備事業関連確認調査の概要

本章では、調査対象範囲が広範となった東部地区ほ場整備事業、防災公園整備事業、農産物出荷貯蔵施設整備事業に伴う確認調査について、各遺跡における調査概要を示す。

山元町の地形は、西から阿武隈山地・山麓に形成される丘陵地・低湿地・浜堤列に大別され、浜堤列については大きく3列（以下、陸側から浜堤列A・B・Cと記す。）が確認されている（第1図）。上記三事業は、浜堤列地帯を中心に計画され、各浜堤列には多くの遺跡が所在していることから、事業との関わりを把握するため確認調査を実施したものである。

なお、いずれの調査においても遺跡に伴う遺構・遺物は確認されていない。（※以下、遺跡名の前に付した数字はP3の第1表による。）

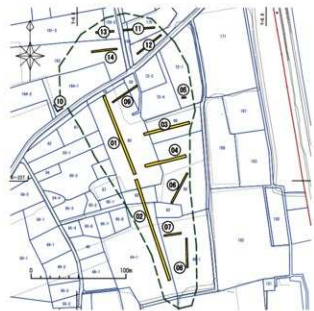
1 新浜遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列B上に位置しており、東日本大震災被災前の地目は畑等であった。平成19年度の踏査により、土師器片8点が表面採集されている。

調査は計画地内に16本のトレンチを設定して実施した。但し、新浜-98-8地点については湛水によりトレンチ掘削はできなかった。調査の結果、現表土である東日本大震災による津波堆積物上面で土師器片等が採集されるものの、調査トレンチ内においては遺構・遺物は認められなかった。砂層を基盤としており、遺構は浸食や耕作等による後世の削平等により消失した可能性も考えられる。これについては、以下で述べる他の遺跡においても同様である。



新浜遺跡トレンチ配置図



狐須賀遺跡トレンチ配置図

2 狐須賀遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列B上に位置し、東日本大震災の被災以前の地目は畑であった。平成19年度の踏査によって、土師器片8点が表面採集されて

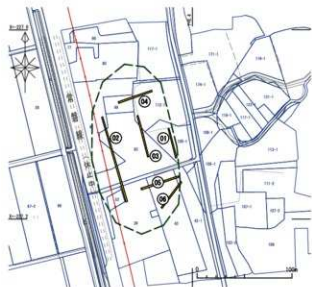
おり、現在も、地表面には製塩土器や土師器の細片等が散見される。

調査は計画地内に14本のトレンチを設定して実施した。調査の結果、1・2・3・13・14トレンチでは、耕作土直下の砂層上面で溝状遺構等を確認したが、これについては層位や埋土の様相から新しい時期のものだと判断した。また、浜堤から堤間湿地に移行する場所にあたる9トレンチでは、堆積土中に十和田a (To-a) と考えられる火山灰層が確認されている。

3 北中須賀遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列B頂部から内陸側を下る地点に位置し、東日本大震災被災前の地目は畑、水田であった。平成19年度の踏査により、土師器片7点が表面採集されている。

調査は計画地内に6本のトレンチを設定して実施した。調査の結果、砂層上面の所々にスクモ層が堆積する湿地が点在して確認されたが、これについては、検討の結果、人為的に掘り込まれたものではなく、自然形成のものだと判断した。3トレンチで埋土により近現代のものと考えられる3条の溝状遺構を確認した以外には遺構、遺物は確認されなかった。



北中須賀遺跡トレンチ配置図

4・13 浜遺跡【東部地区ほ場整備事業 / 防災公園整備事業】

遺跡は浜堤列C上に位置し、遺跡南側は浜堤を切って太平洋に流れだす前川に接している。東日本大震災被災前の地目は畑・宅地で、遺跡北側には、直径400mほどの円形の集村である「花笠」集落がある。平成19年度の踏査により、土師器片1点が表面採集されている。

調査は計画地内に8本のトレンチを設定して実施した。なお、地番141-1、141-4、141-5については、空中写真判読から前川に面する低湿地を盛土したことが明確であるため、調査対象から除外した。

調査の結果、4トレンチ等で溝状遺構等を確認したが、これについては層位や埋土の様相から新しい時期のものだと判断した。遺物は採集されなかった。



浜遺跡トレンチ配置図

5 西北谷地A遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列B・Cの堤間湿地上に位置し、東日本大震災被災前の地目は畑であった。平成19年度の踏査により、土師器片3点が表面採集されている。

調査は計画地内に2本のトレンチを設定して実施した。トレンチ設定にあたっては、地形との関係把握には東西方向のトレンチが有効と考えられたが、地下埋設管の存在が想定されたことから南北方向に設定したものである。調査の結果、2本のトレンチともに湿水性堆積物が堆積しており、遺構、遺物は確認されなかった。



西北谷地A・B遺跡トレンチ配置図

6 西北谷地B遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列B上に位置し、東日本大震災被災前の地目は畑であった。平成19年度の踏査により土師器片26点が表面採集されている。

調査は遺跡東半部の計画地内に2本のトレンチを設定して実施したが、遺構、遺物は確認されなかった。



西須賀遺跡トレンチ配置図

7 西須賀遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列B上に位置し、東日本大震災被災前の地目は畑であった。平成19年度の踏査により、土師器片2点が表面採集されている。

調査は計画地内に9本のトレンチを設定して実施した。調査の結果、1トレンチの南端部で湿地状をなす凹地が確認され、底部に白色火山灰の堆積がみられた。また、5トレンチの地山上面で土師器細片が数点出土したものの、遺構は近現代とみられる溝状遺構等以外には確認されなかった。

8 北泥沼遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列Bの海側傾斜部に位置し、東日本大震災被災前の地目は宅地、畑であった。平成19年度の踏査により、土師器片5点、須恵器片1点が表面採集されている。

調査は遺跡西半部の計画地内に3本のトレンチを設定して実施したが、遺構、遺物は確認されなかった。

なお、2トレンチでは、深掘りにより堆積状況の確認を行った。表土下の砂層は、海側に傾斜する風成砂、砂鉄ラミナを含む風成砂、5mm以下の礫をまばらに含む浜砂層に細分され、砂鉄ラミナが見られる付近では倒木もみられた。

9 畑遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列B上に位置し、東日本大震災被災前の地目は宅地、畑であった。平成19年度の踏査により、土師器片4点が表面採集されている。

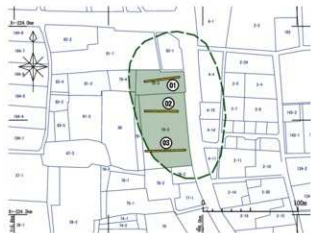
調査は計画地内に6本のトレンチを設定して実施したが、いずれのトレンチも表層部分は攪乱されており、遺構・遺物ともに確認されなかった。

10 笠浜遺跡【東部地区ほ場整備事業】

遺跡は浜堤列Cと堤間湿地上に位置し、東日本大震災被災前の地目は畑、水田であった。平成19年度の踏査により、土師器片5点が表面採集されている。

調査は計画地内に5本のトレンチを設定して実施したが、調査の結果、遺構・遺物ともに確認されなかった。なお、今回の確認調査で浜堤列Cの堆積状況を観察できたのは本遺跡のみであることから、やや詳しく記述する。

1トレンチでは東日本大震災による津波堆積物の下層に、耕作土層が堆積し、その下から砂層が現れる。この砂層は5cm以下の亜円礫を含む粗砂・小礫を主体とするもので、淘汰不良、貝殻細片を多く含む部分がある。砂層中に貝殻片を含むものは、他遺跡では確認されておらず、基盤と考えられる。なお、2トレンチ西端では表層の攪乱を受けていない部分があり、ここでは海側に傾斜する砂鉄ラミナを含み、巨視的に級化構造をもつ砂層がみられた。浜砂と風成砂の中間的な様相を示すものと考えられ、基盤を覆うものとみられる。3トレンチは浜堤から海側の堤間湿地に至るトレンチである。堤間湿地は、0.5m程度の深さで、



北泥沼遺跡トレンチ配置図



畑遺跡トレンチ配置図



笠浜遺跡トレンチ配置図

スクモ状の粘質土のブロック、淘汰良好の砂、黒褐色のシルト混じり砂のブロックが乱雑に堆積する。ヨシの根が多数見られ、表層においても堤間湿地にのみヨシが繁茂している。なお、笠浜遺跡の堤間湿地付近の東日本大震災による津波堆積物は、2次的な攪乱をうけておらず、砂鉄ラミナが見られ、上方で細～中砂、下方で中砂～小礫の級化構造が見られる。

14 笠野 A 遺跡【防災公園整備事業】

遺跡は、浜堤列 C と内陸側堤間湿地との境界付近に位置する。東日本大震災被災前の地目は畑で、遺跡東側には直径 400 m 弱の集村をなす「笠野」の集落が広がっている。平成 19 年度の踏査により、土師器片 23 点が表面採集されている。

調査は計画地内に 6 本のトレンチを設定して実施した。調査の結果、5 トレンチを中心に埋土中にビニール片が含まれる溝状遺構、柱穴等を確認した以外には遺構・遺物は確認されなかった。

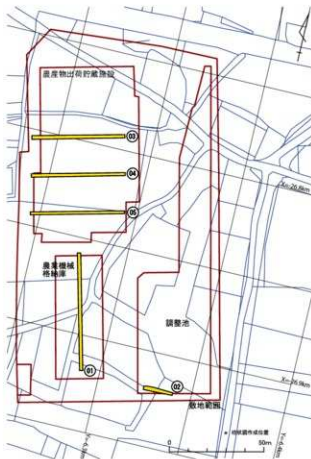


笠野 A 遺跡トレンチ配置図

15 北中須賀遺跡隣接地【農産物出荷貯蔵施設整備事業】

計画地は遺跡の南側に隣接し、浜堤列 B 上に位置する。東日本大震災被災前の地目は畑であった。調査は、計画地内の構造物および調整池部分に 5 本のトレンチを設定して実施したが、いずれのトレンチでも遺構・遺物は確認されなかった。

※平成 29 年度に調査した北頭無遺跡・笠野 B 遺跡については、遺構・遺物ともに確認されず、調査記録不備のため図面を掲載せず。



北中須賀遺跡隣接地トレンチ配置図

引用文献一覧

- 青山博樹 2010「古墳時代前期の土器編年—仙台平野とその周辺—」『北杜 辻秀人先生選歴記念論集』
- 会津若松市教育委員会 1993『会津・大戸窯（遺構編）』
- 会津若松市教育委員会 1994『会津・大戸窯（遺物編）』
- 氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
- 小井川和夫 1978「今熊野遺跡」『どるもん』16
- 古代土器研究会 2008『研究報告3 東北古代土器集成—須恵器・竈跡編—（陸奥）』
- 山形県埋蔵文化財調査センター 2005『高瀬山遺跡（HO地区）』山形県埋蔵文化財調査センター報告書第145集
- 小山正忠・竹原秀雄編 1973『新版標準土色帖』2010年版
- 仙台市教育委員会 1980『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第24集
- 柴桃正隆 1974『史料 仙台領内古城・館』第4巻
- 菅原祥夫 2007「東北の豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』奈良文化財研究所
- 菅原祥夫 2008「東北の豪族居宅（補遺）」『蔵王東麓の郷土史—中橋彰吾先生追悼論文集』
- 仙台市教育委員会 1981『六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第34集
- 仙台市教育委員会 1995『下飯田遺跡』仙台市文化財調査報告書第191集
- 宮城県教育委員会 2015『涌沢遺跡ほか 常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第239集
- 宮城県教育委員会 2016『熊の作遺跡ほか 常磐線復旧関連遺跡調査報告書—』宮城県文化財調査報告書第243集
- 福島県教育委員会 1988『勝光寺遺跡』『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第192集
- 福島雅儀 1992「陸奥南部における古墳時代の終末」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第44集
- 宮城県教育委員会 1991『館南開遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第144集
- 古川一明 2014「古代東北地方における特殊な形態の煮炊用土器について—」『東北歴史博物館研究紀要』15
- 宮城県教育委員会 1983『宮前遺跡』『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集
- 宮城県教育委員会 1985『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集
- 宮城県教育委員会 1986『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集
- 宮城県教育委員会 2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第4集
- 山元町教育委員会 2013『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第5集
- 山元町教育委員会 2014a『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第6集
- 山元町教育委員会 2014b『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第7集
- 山元町教育委員会 2014c『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第8集
- 山元町教育委員会 2015a『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第9集
- 山元町教育委員会 2015b『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第10集
- 山元町教育委員会 2015c『小平館跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第11集
- 山元町教育委員会 2016a『谷原遺跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第12集
- 山元町教育委員会 2016b『谷原遺跡Ⅱ』山元町文化財調査報告書第13集
- 山元町教育委員会 1995『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書
- 渡部義顕 1931『互理郡史』
- 福島県教育委員会 1996『猪倉B遺跡』『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第326集

報告書抄録

ふりがな	こいだいらたてあと・たにはらいせきほか						
書名	小平館跡・谷原遺跡ほか						
副書名	東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告VI						
シリーズ名	山元町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第23集						
編著者名	熊谷亮介・佐藤憲幸						
編集機関	山元町教育委員会・宮城県教育委員会						
市町村コード	043621						
所在地	〒989-2203 宮城県亶理郡山元町浅生原字作田山 32 TEL: 0223-36-8948						
発行年月日	令和4(2022)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	遺跡 番号	位置		調査期間	調査面積	調査原因
			北緯	東経			
小平館跡	宮城県亶理郡山元町 小平字館・北	14020	37° 58' 58"	140° 51' 54"	2013.3.21～29 2013.4.24,6.4～14 2016.1.21～2.19	2次:450㎡,3次: 330㎡,4次:6㎡,5 次:655㎡	記録保存調査
谷原遺跡	山元町山寺字谷原	14067	37° 58' 05"	140° 52' 06"	2013.11.27～28 2013.12.5～20 2014.4.25～26	4次:146㎡,5次: 345㎡,6次:74㎡	記録保存調査
館の内遺跡	山元町大平字館ノ内	14009	37° 59' 20"	140° 51' 37"	2013.11.20	104㎡	確認調査
合戦原B遺跡	山元町高瀬字館下	14061	37° 56' 00"	140° 53' 40"	2014.6.2～3	96㎡	確認調査
新浜遺跡	山元町高瀬字新浜一	14106	37° 52' 32"	140° 54' 35"	2015.5.11～5.22	2335㎡	確認調査
狐須賀遺跡	山元町高瀬字狐須賀	14104	37° 57' 07"	140° 54' 33"	2015.5.21～6.30	1260㎡	確認調査
北中須賀遺跡	山元町高瀬字北中須賀	14103	37° 57' 14"	140° 54' 20"	2015.6.3～6.8	514㎡	確認調査
笠野A遺跡	山元町高瀬字笠野	14101	37° 57' 31"	140° 54' 36"	2015.6.10～6.15	389㎡	確認調査
浜遺跡	山元町山寺字浜	14096	37° 58' 13"	140° 54' 34"	2015.6.16～6.19	533㎡	確認調査
西北谷地A遺跡	山元町高瀬字西北谷地	14098	37° 57' 51"	140° 54' 24"	2015.6.22	114㎡	確認調査
西北谷地B遺跡	山元町高瀬字西北谷地	14099	37° 57' 44"	140° 54' 22"	2015.6.23	128㎡	確認調査
西須賀遺跡	山元町高瀬字西須賀	14100	37° 57' 36"	140° 54' 17"	2015.6.24～6.29	526㎡	確認調査
北泥沼遺跡	山元町山寺字北泥沼	14091	37° 58' 53"	140° 54' 05"	2016.2.15～2.16	200㎡	確認調査
畑合遺跡	山元町山寺字畑合	14093	37° 58' 53"	140° 54' 05"	2016.2.15～2.18	246㎡	確認調査
笠浜遺跡	山元町高瀬字笠浜	14105	37° 57' 02"	140° 54' 47"	2016.2.18～2.22	167㎡	確認調査
北中須賀遺跡 (隣接地)	山元町高瀬字北中須賀	-	37° 57' 24"	140° 54' 18"	2015.12.14～12.17	420㎡	確認調査
中道遺跡	山元町鷲足字中道	14023	37° 56' 32"	140° 52' 07"	2013.11.28～12/3	96㎡	確認調査

番号	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
1	小平館跡	集落	古墳時代	竪穴建物跡・溝跡	土師器	古墳時代前期 (埴釜式)
		城館・散布地	古代～ 中近世	掘立柱建物跡・土坑	土師器・須恵器	
2	谷原遺跡	集落・散布地	古代	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡	土師器・須恵器	平安時代前半の 掘立柱建物跡群
3	新浜遺跡	散布地	古代	なし	なし	
4	狐須賀遺跡	散布地	古代	なし	なし	
5	北中須賀遺跡	散布地	古代	なし	なし	
6	笠野A遺跡	散布地	古代	なし	なし	
7	浜遺跡	散布地	古代	なし	なし	
8	西北谷地A 遺跡	散布地	古代	なし	なし	
9	西北谷地B 遺跡	散布地	古代	なし	なし	
10	西須賀遺跡	散布地	古代	なし	なし	
11	北泥沼遺跡	散布地	古代	なし	なし	
12	畑合遺跡	散布地	古代	なし	なし	
13	笠浜遺跡	散布地	古代	なし	なし	
14	北中須賀遺跡 (隣接地)	散布地	—	なし	なし	
15	中道遺跡	散布地	縄文～古墳 後期	なし	縄文土器・土師器	縄文時代後期
要約	<p>1: 小平館跡は、阿武隈山地から東に延びる標高12～32mの中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する。今回の調査(2～5次調査)では、館跡本体の東側で竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、溝跡16条、土坑52基、柱穴・ピット553基を確認し、主に土師器、須恵器が出土した。竪穴建物跡と溝跡の一部は古墳時代前期に属すると推定され、掘立柱建物跡と溝跡の一部は中近世の所産と推定される。</p> <p>2: 谷原遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高17m～25mの中位・低位段丘上段に立地する。今回の調査(4～6次調査)では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、溝跡6条、土坑10基、柱穴・ピット243基を確認し、主に縄文土器、土師器、須恵器が出土した。遺構は主に平安時代前半のものと推定され、倉庫跡とみられる掘立柱建物跡の存在などから有力者の居宅の一部を構成すると考えられる。土坑9基のなかには縄文時代の陥し穴が3基含まれる。</p> <p>3～14: いずれの遺跡においても遺構・遺物は確認されなかったが、堆積層の観察により沿岸部の浜堤列の状況を確認することができた。また、このような微地形と土地利用の関係を把握することができた。</p> <p>15: 中道遺跡の確認調査では、遺構は確認されなかったものの、現地表から約2.0mの深さにおいて縄文土器や弥生土器の小破片を含む2次堆積層が確認された。</p>					

山元町文化財調査報告書第 23 集

小平館跡・谷原遺跡ほか

—東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告VI—

令和 4 年 3 月 31 日発行

編集 宮城県教育委員会

宮城県仙台市青葉区本町3丁目8番1号

発行 山元町教育委員会

宮城県亶理郡山元町浅生原字件田山 32

印刷 株式会社 東北プリント

宮城県仙台市青葉区立町 24-24
